

42627

教科書文庫

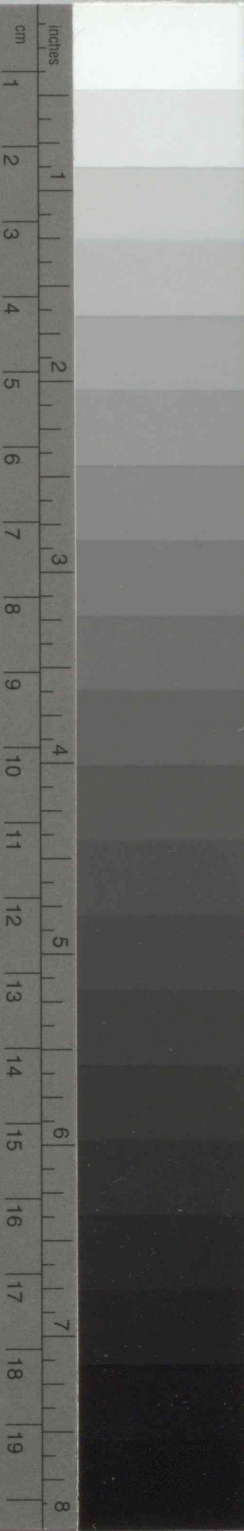
4
810
51-1932
200030
1915

Kodak Gray Scale



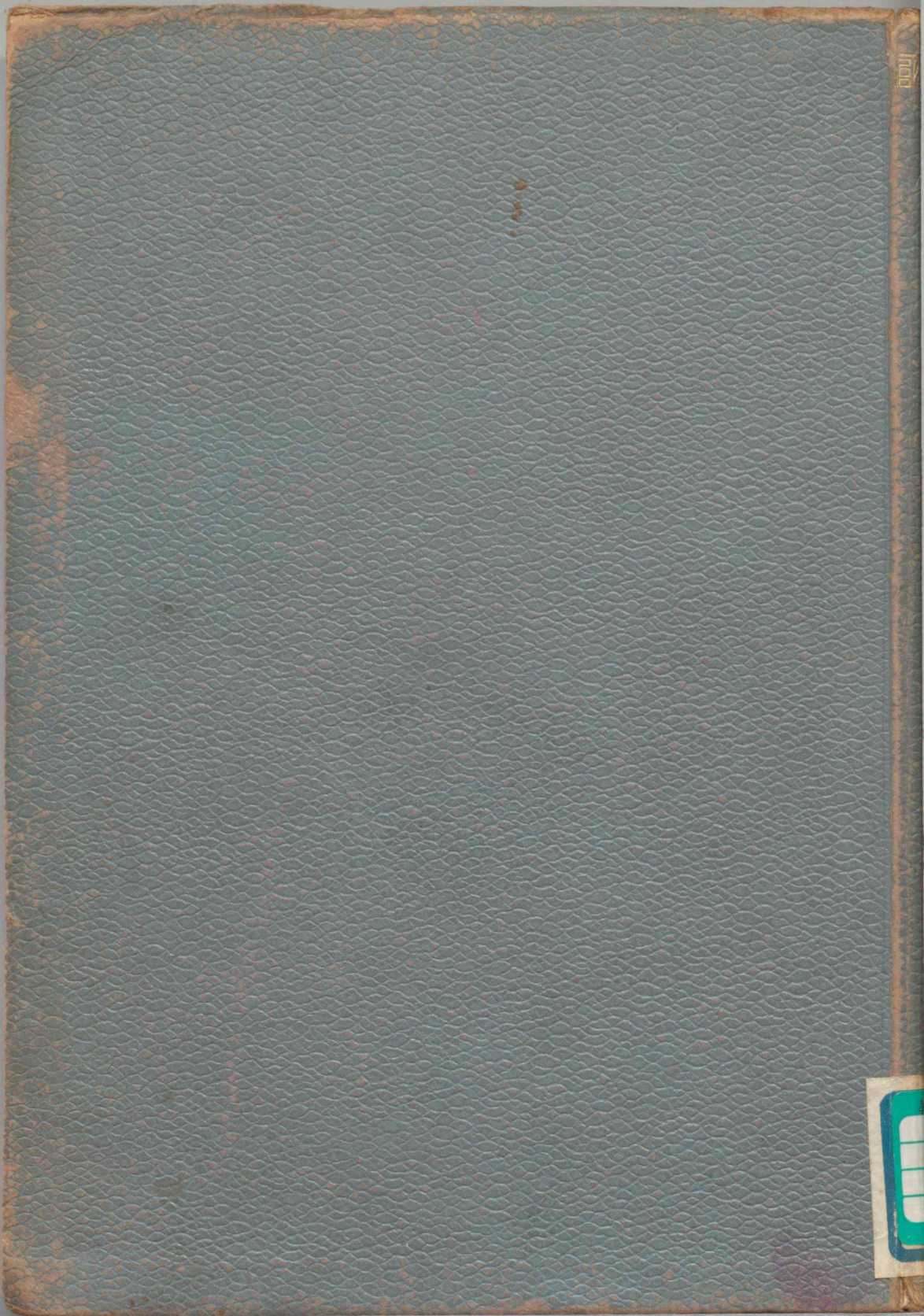
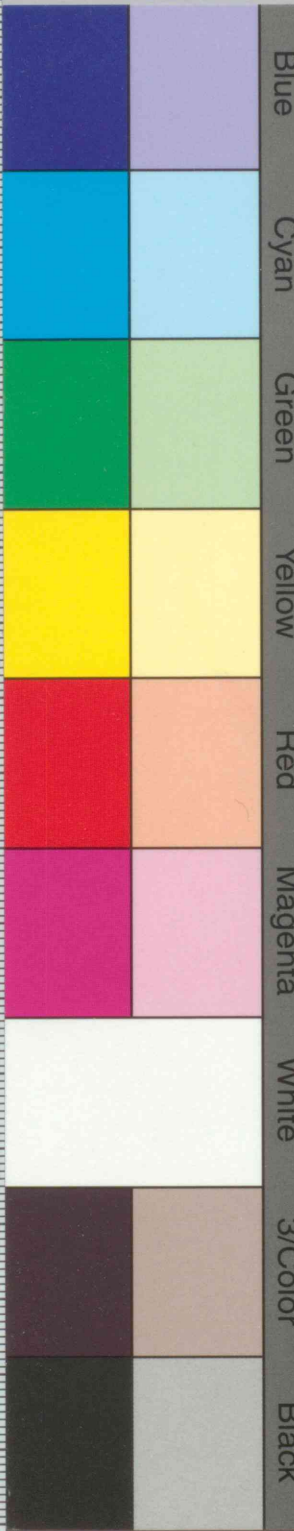
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
51-1932
2000301915

資 料 室

375.9
Ka 9

日七十月二年七和昭

濟定檢省部文

用科文漢語國校學範師

範師
國
文
選

東京高等師範學校教授垣內松三編

卷一

(第一學年用)

広島大学図書

2000301915



社 會 式 株

田 神 ・ 院 書 治 明 ・ 京 東



- 一、文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。
- 一、教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。
- 一、小學國定讀本の研究と聯關して學習と應用との融合を圖れり。
- 一、縦に學年を貫き横に學期に互りて特に全篇の組織に留意せり。
- 一、教育のために玉稿轉載を許諾せられたる原作者各位に深謝す。

目次

一	五十嵐 力	愛語	六
二	島崎 藤村	太陽の言葉	三
三	長塚 節	蛙	六
四	百田 宗治	詩二篇	五
		春待つころろ	五
		野に出でて	五
五	高濱 虚子	静寂	七
六	(公 報)	日本海の海戦	三
七	豊島 與志雄	蓮	四
八	吉村 冬彦	蜂	五

九	荻原 井泉水	清水	六
一〇	新井 白石	沈黙	六
一一	(第二讀方教授)	トロール船より	七
一二	橘 南 谿	蜃氣樓	七
一三	饗庭 篁村	蜀山人の盆燈籠	八
一四	相馬 御風	身邊涼味	八
一五	北垣 恭次郎	十和田湖	九
一六	尾上 柴舟	海金剛	九
一七	吉村 冬彦	先生への通信	二八
一八	夏目 漱石	二百十日	三三
一九	吉江 喬松	翼	三三
二〇	若山 牧水	廢れたる園	三三

二一	幸田露伴	雲のいろく	二五
二二	(小學唱歌)	荒城の月	二五
二三	正岡子規	箱根路	二六
二四	大町桂月	田園雜興	二七
二五	落合直文	萩の家	二七
		萩の家	二七
		綠蔭垂釣	二八
二六	吉江喬松	丘の上	二八
二七	薄田泣菫	茶話三題	二九
二八	北原白秋	童心	二九
二九	柳澤淇園	畫師の苦心	三〇
三〇	吉田絃次郎	名工柿右衛門の村を訪ふ	三〇

三一	國木田獨步	春の鳥	三一
三二	和辻哲郎	幼稚といふこと	三二
三三	阿部次郎	早春の賦	三三
三四	中村正直	否の一語	三四
三五	(イソップ物語)	イソップより	三五
三六	芥川龍之介	蜘蛛の絲	三六
三七	森 鷗外	曾我兄弟	三七

附録
 聲音の分類
 國語假名遣



一 愛 語

こゝに獨立した一つの國があつて、その國をそのまゝ、維持して行き、或は更に進んで一層立派なものに仕上げて行くには、その國民の愛護して行かなければならないものが澤山にあるかと考へます。

先づ第一に國體といふものがありませう。それから、國民が祖先から傳へられた淳風美俗といふものがありませう。或は建築、繪畫、彫刻、その他の古藝術といふものもありませう。或は山水、その他の自然美もありませう。或はその國の特産とする天産物もありませう。その他いろいろの物がありませうが、國語といふもの、——吾々が先祖から傳へて、思想

淳風美俗 淳美なる風俗。

傳通の機關として調法して居る國語といふものも、國民の愛護しなければならぬ最も大切なものの一つであるかと考へます。

人によつては、格別國語に重きを措かずして、吾々の重んずべきものは思想である、實體、實質である、言葉などといふものは、思想、實體を現す一つの符牒形式ではないか、一種の表現形式ではないか、表現の形式や符牒ぐらゐに詰らない骨折をするのは愚かな事であるといふやうな事を考へて居る人があるかも知れません。またさういふ人が、實際かなり多くあるやうにも思はれます。しかしながら、これは片手落の理窟といふもので、事實に於ては、表現即ち實體である、言葉即ち實物である、思想であるといつてもよいかと、私は

思ひます。少くとも表現が實體の半分であることぐらゐは考へることが出来ませう。エマーソンは、
 「人といふものは、唯半分だけが自分で、他の半分は自分の表現だ。自分の現れたもの、或は現したものだ。」と言ひました。佛者は一心萬法とも申して居ります。いかにも一心の中に萬法が含まれて居りませうけれども、萬法を離れて一心を考へることは出来ませうまい。かりに自分といふものについて考へて見ますと、吾々が人から、汝は何者ぞ。と問はれた時に、先づ思ひ浮かべるものは、自分の現れたものでありませう。そして自分の姓名、職業、資格、住處、事業等を以て答へるでございませう。自分自身の現れなる、若しくは自分が現したる姓名、服裝、住宅、庭園、言語、文章、藝術等を除外して、何處に各個

エマーソン 米國の文學者。(一八〇二—一八八二年) R. W. Emerson.

個の「我」といふものがあるませうか。又國自身の現れなる國土、山川、都會、田舍、諸制度、諸設備、諸藝術等を除いて、何處に「國」といふものがあるませうか。世の中には異を樹つることを好む詭辯者があつて、よく表現の様式や外形などに支配されてたまるものか、衣服は寒暑が凌げれば澤山だ、言葉は思ふ事が言へれば澤山だなど申しますが、世の中の實際はなか／＼さう手軽に行くものではありません。めかしやは自然にしやれた服裝をなし、しまりやは自然に質素な服裝をする、これが世間の常態で、そしてそれ／＼の服裝の上に、二者の人物心持がすつかり現れて來るのでありませう。表現はかやうに意味の深いものであります。そして之を個人について見るに、その表現には、顔付、容貌、恰好、服裝、歩き

詭辯者 殊更に奇僻なる議論を樹つる輩。

つき話し振など、いろくありませうが、特に言葉について見るに、言葉はその人の爲人を現す所以のものであります。その人の人格嗜好を現し、またその人の過去をも、現在をも、時として未来をも現すものであります。従つて言葉は自分に對し、又他人に對して深く大いなる影響を及ぼすもので、時には言葉の方便によつて、人を向上せしむることも出来ませう。穢らしい著物を著て寝轉んで居ると、自分の性格までが卑しくなるやうに思はれますが、羽織袴を著けて端然と坐つて居ると、自分の品位が高くなつたやうに思はれ、自然に身を慎むやうな心持にもなるではありませんか。言葉も同じ事で、その表現上の用意、嗜み次第で、自分の人間としての品格を高め、立派な運命を開拓することも出来ませ

う。また之によつて、人に好感を與へ、ひいては社會を利し、一國文化の向上に貢獻することも出来ませう。言葉などといふと、いかにも小さい事のやうに聞えますが、決して馬鹿にすべきものではありません。

曹洞宗の開祖道元禪師は、「愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。」と説いて居られます。

私は禪師の此の簡単な一句の中に、言葉の靈力が力強く道破されてあることを見出します。そして殊に教育家の言葉使用に關する理想境が、味ひ深く道破されてあることを悦びます。(五十嵐カ「國語の愛護」)

曹洞宗 佛教の一宗派。支那にては禪宗五家の一。我が國にては禪宗三家の一。
道元禪師 禪僧。曹洞宗の開祖。京都の人。建長五(一九一三)年寂す。年五十四。

五十嵐カ 文學博士。米澤市に生まる。東京專門學校の出身、現に早稻田大學教授たり。

二 太陽の言葉

「お早う。」と、わたしは太陽の隠れて居るところへ行つて聲を掛けて見た。返事がない。けふも太陽は引込みきりだ。

すこしばかり自分の記憶にあることをこゝに書きつけよう。始めて太陽の美しさがわたしの眼に映つたのは日の出の時ではなくて、むしろ日没の時であつた。わたしはまだ十八歳の少年であつた。當時のわたしの周囲には、ごく漠然とした自然の愛を教へてくれる人はあつても、一語「あの太陽を見よ。」とわたしに指して言つてくれるものもなかつた。わたしは沈んで行く夕日を高輪御殿山の木立の間に見つけて、その驚きと喜びとを分つために、一緒に山遊びに出掛

高輪御殿山 東京市芝區の南端なる丘陵。江戸時代の初期に品川御殿ありし故に此の名あり。

けた友達の方へ走つて行つたくらゐである。わたしは友達と二人で、美しい日没を望みながら、しばらくそこに立ちつくしたが、あの時のわたしの胸に満ちて來た驚きと喜びとは、今だに忘れずにある。



村 藤 崎 島

それにも増して忘れ難いのは、始めてわたしの内部に太陽の登つて來たこゝを感じいた時だ。青年時代のわたしの生涯は艱難の

連続で、ほこく、太陽の笑顔を仰ぐといふこともなしに多くの暗い月日を過した。稀にわたしの眼に映るものはと言へば、何の温か味もなく、何の生氣もなく、唯朝になれば東の空から出て、晩には西の空へ沈んで行くやうな、紅いしよん

ほこく、ほこん、殆ど。

ぼりこした日輪であつた。わたしが二十五歳の青年の時だ。わたしは仙臺の方へさびしい旅をして、その時始めて、自分の内部にも太陽の登つて来る時のあることを知つた。

日光の饑——このわたしの要求はかなり強いものであつたと見えて、明けさうで明けない薄くらやみが續きに續いて行つた時には、わたしもひどくがつかりした。わたしは幾度か太陽を見失つたこともある。太陽を求める心すら、時には薄らいだこともある。太陽はわたしから離れて行つて、たゞ、無意味な、悲しく痛ましげな顔付のものさばかり、わたしの眼に映つたこともある。けれども、一度自分の内部にも太陽の登つて来る時のあることを知つたわたしは、幾度もなく夜明を待ちうける心に歸つて行つた。毎年五個月

もの長い冬の續く信濃の山の上からも、新開地らしい頃の東京の郊外の畠の間からも、日の出を町の空に望むに好い隅田川の岸からも、わたしは夜明を待ちつづけた。そればかりでなく、長い年月の間には、わたしも異郷の旅人となつた。ここがあつて、紫色の泥かきも見まがふ遠い海の下からも、見るからに夢のやうな青い燐の光の流れる熱帯地方の波の間からも、それから又、石造りの建築物も冷たく、竝木も黒く、萬物は皆凍り果てたやうな寒い異郷の町の中からも、わたしは夜明を待ちつづけた。そして遠い日の出を夢みながら、故國をさして歸つて来たこともあつた。

わたしは三十年の餘も待つた。おそろく、わたしはこんな風にして、一生夜明を待暮すのかも知れない。しかし、誰でも

が太陽であり得る。わたしたちの急務は、たゞ、眼の前の太陽を追ひかけることではなくて、自分等の内部に高く太陽を掲げることだ。この考は年と共に深く、わたしの小さな胸の中に根を張つて來た。

今のわたしは想像する太陽とは、もう餘ほどの年齢のものだ。物心づいてからこのかた、わたしが覺えて居るだけでも、太陽の齡はこゝし五十三にもなる。そのわたしの知らない以前の齡を加へたら、この太陽が何ほどの高齡な老年であるとも、ちよつとそれを言つて見ることも出來ない。

人が五十三もの年頃になれば、衰へないものはごく稀だ。髪は年毎に白さを増し、齒も缺け、視力も衰へ、かつて紅かつた頬にも古い岩壁の面のやうな皺を刻みつける。そこには、

附著する苔のやうな皮膚の斑點をさへ留める。多くの親しかつたものも次第に死んで行つて、思ひがけない病と、晩年の孤獨とが人を待つて居る。このわたしたちの力弱さに比べたら、太陽のこゝは想像も及ばない。絶間のないあの飛翔と、あの奮躍。夜毎の没落はやがてまた朝紅の輝きにこ進んで行くあの生氣。まことの老年の豊富さは、太陽を措いて外にはない。それにしても、この世で最も老いたものが最も若いといふことには、わたしは心から驚かされる。

「お早う。」と、またわたしは聲を掛けて見たが、返事がなかつた。しかし、わたしはこの年になつて、また自分の内部に甦つて來る太陽のあるこゝを感じるところから見ると、どうやら夜明も遠くないやうな氣がする。(鳥崎藤村「春を待ちつゝ」)

鳥崎藤村 名は春樹。文學者。長野縣に生まる。明治學院の出身。

三 蛙

春は空から、さうして土から微かに動く。
 毎日のやうに、西から埃を捲いて來る疾風が、ごうかする
 と、はたと止つて、空際にはふわ／＼とした綿のやうな白い
 雲が、ぼつかりと暖かい日光を浴びようとして、僅に立騰つ
 たといふやうに、動きもしないで、ぢつとしてゐるここがあ
 る。水に近い濕つた土が、暖かい日光を思ふ存分吸うて、其の
 勢づいた土の微かな刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛
 の木の地味な蕾は、目にたゞぬ間に少しづつ伸びて、ひらひ
 らと動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在
 りながら、稀にはそつちでも、こつちでも、く／＼と鳴出す

蟄居 蟲類などが土中など
 にこもり居ること。蟄
 正音チフ。シフ。

ここがある。

空から射す日の光は、そろ／＼と熱度を増して、土はそれ
 を幾らでも吸うて止まぬ。土は凡てを段々と刺戟して、堀の
 邊には、蘆や、さだ芝や、其の他の草が空と相映じて、すつきり
 と其の首をもたげる。軟かさに満たされた空氣を、更に鈍く
 するやうに、榛の木の花はひらく／＼と止まず動きながら、煤
 のやうな花粉を撒散らしてゐる。蛙は假死の状態から離れ
 て、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして、
 空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、
 其の長い睡眠から復活したことを、空に向かつて告げる。そ
 れで遠く聞く時は、彼等の騒がしい聲は、只空にのみ響いて
 快げである。

さだ芝 花芝とも書く。禾
 木科に屬する多年生の
 草。莖は高さ一米に達す。

彼等は更に春の到つたことを、地上の一切の生物に向かつて告げる。草や木が心づいて其の活力を存分に發揮するのを見ない。うちは、鳴くことを止めまいと努める。田圃の榛の木は疾くに花を捨てて、自分が先に嫩葉の姿になつて見せる。黄色味を含んだ嫩葉は、爽かで且朗かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下に、まだためらつてゐる。周囲の林を見る。岬のやうな形に偃うて居る水田を抱へて、周囲の林は、漸く其の本性のまに、勝手に白つほいのや、赤つほいのや、黄色つほいのや、種々に茂つて、それが氣が附いたやうに、急いで一つの深い緑に成るのである。雑木林の其處ら此處らに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、恥づかしさうに葉の

ためらふ 心に決せずして
ぐすく すること。

間からこつそりと四方を覗く。雑木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求め、雲雀が時々空を占めて、春が更けたと喚びかける。さうする、其の同族の聲のみが空間を支配して居べき筈だと思つてゐる。蛙は、其の囀る聲を押し去らうとして、互の身體を跳び越え跳び越え鳴立てるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、これを仰げば眩しさに堪へぬやうに、其の身を遙かに煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉の拗切れるまでは、劇しく鳴かうとするのである。蛙はいよゝます、く、鳴き矜つて、檜の木やうな大きな常緑樹の古葉をも、一時にからりと落させねば止むまいとする。

此の時、凡ての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に附いてゐた凡ての雜草が、爪立ちしてたゞ空へ空へと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをぢつと曳きこめて放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行することを好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、各自に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふほど、喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら、殊更に鳴立てる。白い絛絲のやうな雨は、水が田に滿ちるまでは注いで又注ぐ。鳴くべき時に鳴くためにのみ生まれて來た蛙は、苜株を引つ返し引つ返し働いてゐる人々の周圍から、足下から逼つて、敏捷に其の手を

絛絲 シケイト。繭の外側より採りたる粗き絹絲。

働かせ働かせと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。

更に蛙は、ひっそりと静かな夜になると、如何に自分の聲が遠く且遙かに響くかを矜るもの如く、力をきはめて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲は滅切り遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓の凡てを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出る。今更のやうに耳元に迫る蛙の聲に、其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に、全く朝の元氣を喚びかへすのである。

消耗 セウカウ。通音セウモウ。へる。つひえなくなること。

草木は、遠く遙かに響けと鳴く其の聲に揺られつゝ、夜の間に生長する。櫟や楡や其の他の雑木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうしてそれが鳴止む季節までは、幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には、毛蟲や其の他のあさましい損害が、或は有るにしても、しごく、と屢梢を打つ雨が空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い深い緑が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。(長塚節「土」)

あさまし
あきるゝほど甚
し。

くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の
ふる (正岡子規)

長塚節 歌人。茨城縣の人。
正岡子規に從ひて歌道に進
み、晩年小説に筆を執る。
大正四年歿す。年三十七。

世にあらむ生きのたづきのひまをもとめ雨の青葉に一日
こもれり (伊藤左千夫)

正岡子規 名は常規。歌人。
俳人。松山市の人。明治三
十五年歿す。年三十六。

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみた
れども (長塚節)

伊藤左千夫 名は幸二郎。
歌人。千葉縣の人。大正二
年歿す。年五十。

四 詩二篇

春待つこゝろ

燕を待ちわびるこゝろ、

春を待ちわびるこゝろ、

いづくもなく、

ほのかに出づる芽もなつかしく、

大ぞらの青きがもこに、

瞳を閉ぢて、

明るきなかに眠り入る、

春待つこゝろ。

野に出でて

野に出でて、

歌はまし。

曉の

野に出でて、

歌はまし。

めざめたる草の花さこもに、

曉を知る

水の流さこもに、

あはれ、

輝きいづる太陽をこさほぐために、

野に出でて、

歌はまし。(百田宗治「新月」)

野に出でて、
歌はまし。
曉の
野に出でて、
歌はまし。
めざめたる草の花さこもに、
曉を知る
水の流さこもに、
あはれ、
輝きいづる太陽をこさほぐために、
野に出でて、
歌はまし。
百田宗治 詩人。大阪市に
生まる。

五 靜 寂

寢床を出て、楊枝をつかひながら、湖水の見える部屋に往つて見る。

朝日が部屋一面にはひつて居る。湖水と思はれる邊は雲ばかりで、何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼より、稍、高く、稍、低く、無数の杉の梢が、鉾のやうに突つ立つてゐる。左手には、北谷の向うに當る峯が、鋸の齒のやうな杉を背にならべて、湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いで、近景の杉の梢も、遠景の杉の峰も、新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を、薄い霞が流れて居る。非常に靜かだ。自分の

湖水 こゝにては琵琶湖なり。

東谷 比叡山延暦寺の寺内東塔の一部の稱。

呼吸の外、浮世の物音は何も聞えぬ。たゞこの天地をわが物顔に啼き囀つてゐるのは、小鳥だ。何と可愛い聲であらう。名がわからぬのが残念だ。その杉の梢で、一羽啼いてゐる。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。また遙か向うの谷深く、他の一羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲が、どこかで聞えるやうだ。又その小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、又凜々しいところがあつて、その音の空山に響く趣が何ともいへぬ。これも名のわからぬのが残念だ。それも一羽ではない。三羽、四羽と聞くうちに、だん／＼殖えてくる。前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸のやうに、互に錯綜して、能く調和を保

凜々しきり／＼ひきしまりてあるさま。

つどころが面白い。突然けん／＼とけた、ましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりも稍急調だ。或は山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織り成した美しい絹を、たゞ一聲で引裂いたのかと疑はれる。

暫くして、その聲は谷の底の底、峯の奥の奥に浸みこんでしまつて、そのあさは元の通り静かになる。眞つ先にその静けさを破るものは、鶯の聲だ。絹におかれた緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、又縦糸を織つて、前の小鳥が啼く。又横糸を織つて、次の小鳥が啼く。緋が啼く。縦糸が啼く。横糸が啼く。この絹を、又山鳥の聲が破るのかと思ひながら、待設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞

く蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけて吠くのかとも疑はれる。他の鳥の聲々が皆高調で、晴れ晴れとした中に、ひこり低調で、不平らしい音を出すのが面白い。友は「啄木鳥だらう。」といひ、他の者は「山鳩だらう。」といった。琵琶湖の上には、まだ漠々とした白雲が漂うてゐる。杉の梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで来て、だん／＼と谷が深く見えて来る。(高濱虚子「叡山詣」)

鰐口 佛殿などの前方の軒下に吊したる金屬製圓形扁平中空の器。前面に接觸せしめて垂したる緒によりて打鳴し得る如くなしたり。

高濱虚子 名は清。俳人。松山市に生まる。第三高等學校に學ぶ。正岡子規に師事す。

内藤鳴雪 名は素行。俳人。松山の人。大正十五年歿す。年八十。

灯くらく蛙きく夜や寫し物 (正岡子規)
 夕立に桐の木多き小寺かな
 旅人の汐干見て行く馬上かな (内藤鳴雪)
 矢車に朝風強き幟かな
 山寺の寶物見るや花の雨 (高濱虚子)
 金龜子擲つ闇の深さかな

六 日本海 の 海 戦

天祐と神助とに依り、我が聯合艦隊は五月二十七日、八日、敵の第二第三艦隊と日本海に戦うて、遂に殆ど之を撃滅するを得たり。

初め敵艦隊の南洋に出現するや、上命に、基づき之を近海に迎撃する計畫を定め、朝鮮海峡に全力を集中して、徐ろに敵の北上を待ちしが、敵は一時安南沿岸に寄泊したる後、漸く北行し來れるを以て、豫定の如く數隻の哨艦を南方に配備し、各隊は一切の戦備を整へ、直ちに出勤し得る姿勢を持したり。

果然、二十七日午前五時に至り、哨艦信濃丸の無線電信は、

天祐 天の助。祐は佑に同じ。
 五月二十七日・八日 明治三十八年。
 第二・第三艦隊 露國の太平洋第二艦隊及び第三艦隊。

安南 佛領印度支那沿岸のカムラン灣及びホンコーへ灣。

信濃丸 假裝巡洋艦。

「敵艦見ゆ。東水道に向かふものの如し。」と警報せり。全軍踴躍、直ちに對敵行動を開始せり。

午前七時、哨艦和泉亦敵の北東に航進するを報じ、片岡艦隊、東郷艦隊、ついで出羽艦隊も、午前十時十一時の交、壹岐對馬の間より沖の島附近に至るまで、時々敵の砲撃を受けつゝ、終始よく之と接觸を保ち、詳かに敵情を電報せしかば、海上濛氣深く、展望五海里以外に及ばざりし此の日も、數十里を隔てたる敵影恰も眼中に映れるが如く、既に敵の艦隊は其の第二、第三艦隊の全力なること、其の陣形は二列縦陣にして、其の主力は右翼の先頭に立ち、其の他の艦船約七隻は其の後尾に續けること、其の速度は約十二海里にして、なほ北東に航進せること等を知り、本職は之により、我が主

東水道 對島と壹岐との中間の海面。

和泉 巡洋艦。
片岡艦隊 第三艦隊司令長官中将片岡七郎直率。
東郷艦隊 少將東郷正路の率たるもの。第三艦隊所屬。
出羽艦隊 中将出羽重遠の率たるもの。第一艦隊所屬。

力を以て午後二時頃、沖の島附近に敵を迎へ、先づその左翼の先頭より撃破せんことを心算を立つるを得たり。

午後一時三十分、主戦艦隊、装甲巡洋艦隊、瓜生戦隊、各驅逐隊及び出羽、東郷艦隊等前後して來り會し、暫時にして正に我が左舷に當れる南方數海里に敵影を發見せり。こゝに於て戦闘開始の令を下し、我が全艦隊に對し、

「皇國の興廢此の一戦に在り。各員一層奮勵努力せよ。」との信號旗を掲げたり。而して主戦艦隊は斜に敵の先頭を壓迫し、装甲巡洋艦隊これに續き、他の諸戦隊はいづれも南下して敵の後尾を衝けり。これ我が豫定戦策なり。敵は我が壓迫を避けて稍、右舷に舵を轉じ、こゝに砲火を開始せり。われは暫く之に耐へて、距離六千米に近づくに及

沖の島 福岡縣宗像郡に屬する玄海灘中の一孤島。

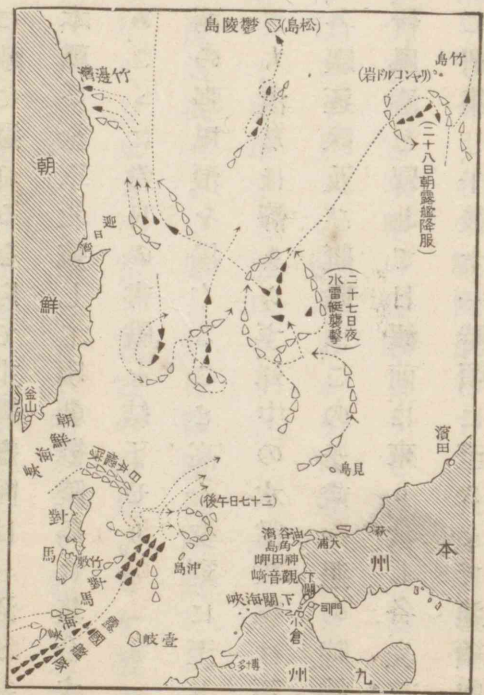
主戦艦隊 聯合艦隊司令長官大將東郷平八郎直率。
装甲巡洋艦隊 第二艦隊司令長官中将上村彦之丞直率。
瓜生戦隊 中将瓜生外吉の率たるもの。第二艦隊所屬。

び、猛烈に敵の左右の先頭艦に砲火を集中せり。敵はこれのために益、東南に壓迫せらるゝものの如く、自然に不規則なる單縦陣となり、われと並航の姿勢をこれるが、我が全隊の砲火は、距離の短縮にも益、著しき効果をあらはし、その左翼の先頭艦オスラビヤの如きは須臾にして撃破せられて大火災を起し、旗艦クニヤージスワロフ、二番艦アレクサンドル三世もまた大火災に罹り、相ついで戦列を離れれば、敵の陣形いよく亂れ、他の諸艦また火災に罹れるもの多く、炎煙西風に襲きて忽ち海面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包みぬ。これ午後二時四十五分にして、彼我の勝敗は既にこの間に決したるなり。

我は煙霧のうちに敵影を發見する毎に、緩かに之を砲撃

オスラビヤ 戦艦。第二
戦艦隊の旗艦。 Osabha.
クニヤージスワロフ 戦艦
第一戦艦隊の旗艦。
Kniaz Suvarof.
アレクサンドル 戦艦。
Imperator Alexander II.

じつ、敵の前路に出でたれば、敵は俄に變針して北方に遁走を試みんごせり。我は急にその前路を扼して、再び南方に壓迫し猛射したれば、敵の諸艦は多大なる損害を受けて頗る混亂を極めぬ。この間に壯烈なる事蹟として特記すべきは、千早及び廣瀬鈴木の兩驅逐隊が、敵の敗艦スワロフに對し二回まで勇敢なる水雷攻撃を執行したることなり。



變針 進路の方向を轉する
こと。

千早 通報艦。

兩驅逐隊 中佐鈴木實太郎の率ゐし第四驅逐隊と、中佐廣瀬順太郎の率ゐし第五驅逐隊とを指す。

かくて我は、洋上に彷徨離散せる殘敵を縦横に搜索して、これが撃沈につとめぬ。この時夕陽すでに暮き、我が驅逐隊、水雷艇隊は漸次に敵に逼れるを以て、主戰艦隊は日没と共に引上げ、同時に本職は、全軍北航して、明朝鬱陵島に集合すべし。傳令せしめ、こゝに當日の晝戰を結了せり。

この日、朝來南西の強風浪を揚ぐるこゝ高く、夕刻に至りて風稍和ぎたれども、浪なほ靜まらず、洋中の水雷攻撃は不利尠からざれど、各驅逐隊及び艇隊は、この千歳一遇の時機を失せんを恐れ、皆風濤を冒して日没前に來り會し、各先を争うて敵の周圍に蟻集し、午後十一時頃に至るまで、連續肉薄して激烈なる攻撃を加へつ。敵は探照砲火を以て極力防戦したるが、遂に我が攻撃に耐へず、僚艦相失して四分五裂

彷徨 きまよふ。うつろつ。
暮く ウスツク。夕陽の將に没せんとする貌。

鬱陵島 朝鮮江原道竹邊灣の東方約百軒にあたる。

艇隊 水雷艇隊。

蟻集 蟻のはりの如く多く集まること。

の状態となり、各一方の血路を覓めんとしたれば、我が追撃のために一場の大混戰を現出し、少くも敵艦三隻は、この間に我が水雷に罹りて全くその戰鬪航行力を失ひぬ。後日捕虜の言を聞くに、當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆ど言語に絶し、左右應接に遑なく、且その距離あまりに近きために、備砲俯角の度を過ぎて照準する能はざりきといふ。
二十八日黎明、濛氣拭へるが如し、既に鬱陵島附近にありたる我が艦隊は、早くも東方に當り數條の煤煙あるを發見せり。これ問はずして殘敵の主力たるや明かなり。即ち三方より之を包圍す。固より敗餘の敵艦、已に多大なる損傷を負へるのみならず、わが優勢に抵抗し得べきにあらざれば、砲火の開かるゝや、須臾にして白旗を掲げ、敵司令官ネボガト

ネボガトフ 露國太平洋第一艦隊司令長官。少將。Nebogatoff.

フ少將は、その戦艦四隻を擧げて部下と共に降意を表はしぬ。本職は特に將校以上の帶劔を許して之を受けたり。驅逐艦漣陽炎は、鬱陵島附近に於て敵の驅逐艦二隻の遁走し來れるを發見し、極力これに追及して戦闘を開始したるに、その後續艦は遂に白旗を掲げぬ。これビエードウイにして、敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將及びその幕僚の移乘し居るを知り、その乗員と共に之を捕虜となせり。聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を收むるに汲々たるに當り、南方前日の戦場に於ても亦相應なる殘獲ありて、敵艦數隻を撃滅したり。

抑、日本海を通過せんせし敵艦隊は約三十八隻にして、我が撃滅或は捕獲に洩れたりと認むるものは、巡洋艦驅逐

ビエードウイ Rodovi.
ロゼストウエンスキー 露國太平洋第二艦隊司令長官。中將。(一八八一—一九〇九年) Rozhdestvensky.

艦及び特務艦各數隻に過ぎず。この二日間の戦闘に於て、我が失ひたるは水雷艇三隻のみ。その他多少の損害を蒙りたるものあれども、一として今後の役務に支障あるものなし。此の大戦に於ける敵の兵力、我と大差あるにあらず。敵の將卒も亦その祖國のために極力奮闘したるを認む。しかも我が聯合艦隊がよく勝を制して奇績を收め得たるものは、一に 天皇陛下の御稜威の致すところにして、もごより人爲の能くすべきにあらず。殊に我が軍の損失、死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に依るものと信ずる外なく、嚮に敵に對して勇戦したりし麾下將卒も、皆この成果を見るに及びて、唯感激してその言ふところを知らざるもの如し。

(東郷聯合艦隊司令長官公報による)

東郷司令長官 名は平八郎。元帥海軍大將。鹿兒島縣に生まる。

七 蓮

私は蓮が好きである。泥池の中から真直ぐに一莖を伸ばして、その頂に一つ葉や花や實をつける、あの獨得な風情もよい。又單に花からばかりではなく、葉や實や根などからまでも、仄かに漂ひ出してくる、あの清い素純な香もよい。その形、その香、そして泥土と水、凡てに原始的な幽玄な趣がある。田舎の子供達は、眞白な蓮の根をほきりと折つて、中に通つてゐる八つの穴に何がはひつてゐるか、好奇の眼を見張りながら、いつまでもぢいつと覗き込む。または葉の莖を折取つて、それを更に幾つにも小さく折つて、折られた莖が細い絲でつながつてゆくのを、面白さうにぶら下げて眺め

素純 素朴にして純正なること。
幽玄 趣味深くして容易に知り難きこと。

る。それにも倦きると、小川の清い水を葉の中にすくひ込み、鮒や鯰の子を捕へて来て、その中に泳がせて楽しむ。或はまた大きな花を折取つて来て、その眞白な花瓣を一つくむしり取り、黄色い雄蕊雌蕊を中に乗せ、實を積んだ舟として、橋の上から川の眞中に、幾つも幾つも流し浮かべる。

蓮の葉や花が孟蘭盆の佛壇につきものとなつてゐるのは、佛教の廣まつてゐる地方共通の周知の事柄である。が、或地方では、孟蘭盆の前、七月七日の七夕祭が、かなり盛んに行はれる。七八歳の子供達は、七夕に關係のある俳句や和歌や漢詩の類を前々から習字しておいて、それを七夕の日の朝、普通の軸物くらゐの大きさに清書し、床の間に掛けて、いろんな果物や野菜類を供へる。その後で、女の子は色紙で小さ

孟蘭盆 梵語。倒懸の義。
陰曆七月十五日に父母並びに祖先の亡靈を供養して、倒懸の苦を救ふための典禮。
七夕祭 陰曆七月七日の夜牽牛・織女の二星を祭る祭典。

な衣服を裁ち、男の子は色紙の短冊に勝手な文字を書きちらし、それを青笹の枝に吊して、縁先の庭に立てる。そして、それらの文字のために用ひられる硯の水は、蓮の葉にたまつた露の雫を最もよしとしてある。子供達は早朝から起き上がったつて、夜のうちに蓮の葉にたまつてゐる水銀のやうにころりとした清い露の雫を、いそいで集めて出かける。さういふ話を、一昨々年の夏、私は或友人に向かつてした。すると十日ばかりたつて、見事な紅蓮の一鉢を植木屋から届けて来た。友人の名刺が附いてゐた。私の手蹟が餘り拙劣なので、蓮の葉の露を取つて習字でもせよといふ謎かも知れないが、併し私には非常に嬉しかつた。庭の眞中に据ゑさせて仕事に疲れた眼を慰めた。徑一尺餘りの小さな鉢だつ

紅蓮の鉢を植木屋から届けて来た。友人の名刺が附いてゐた。私の手蹟が餘り拙劣なので、蓮の葉の露を取つて習字でもせよといふ謎かも知れないが、併し私には非常に嬉しかつた。庭の眞中に据ゑさせて仕事に疲れた眼を慰めた。徑一尺餘りの小さな鉢だつ

たが、五六枚の葉をつけ、花を二つ開いてゐた。鉢の中の藻の間に絲蚯蚓が澤山ゐたので、それを食盡くさせるために、緋目高を四五匹放つたりした。そのうちに、淡紅色の花弁が散つてゆき、葉も一二枚黒ずんで枯れていつた。花の後の漏斗形の萼は實を結ぶ様子もなく、小さく萎びて立枯れてしまつた。残の葉もまだ霜を受けない先に枯れかゝつた。鉢の中を覗いてみると、彎曲したこち／＼の根が、土の中に痛ましく露出してゐた。恐らく蓮は徑一尺餘りの小さな鉢の中で、十分に伸びようとして伸びるこゝが出来ず、窮屈の餘りに窒息しかけたのであらう。さう思ふと、吾が愛するこの蓮のために、十分の泥と水とを與へてやりたくなつた。

絲蚯蚓 イトメ。環形動物
毛足類中貧毛類に屬する
動物。所在の溝川などに
生息す。

私は近くの瀬戸物屋へ出かけていつて、其處にある一番大きな蓮鉢を買求めた。徑三尺ばかりの分厚なもので、田舎の廣々とした蓮田には及びもつかないが、一二株の蓮の生長には十分らしかった。私はそれを日當りのよい處に据ゑて、庭の隅から掘起した土を盛り、それを水にこねて、蓮を移し植ゑようとした。

そこへ、叔父がひよつこりやつて來た。漢籍や盆栽に親しんで日を送つてゐる叔父は、私の柄にもない仕事を見て、長い鬚を撫でながら笑ひ出した。そしてこんなことをいつた。

蓮は秋に動かすものではない。春の彼岸頃、舊根が腐つて新芽が出だしたのを、逆様に移し植ゑるのを以て法とする。併し凡そ花卉のうちでも、水ものは最も栽培困難とし

彼岸 彼岸會を行ふ七日間。春分・秋分を中日と呼び、その前後各三日を合はせていふ。

である。素人流の育て方で、蓮の花を一つでも咲かせ得たら、それこそ園藝の天才である。

私はその天才にならうと欲した。そして叔父の意見を参考にして、蓮を移し植ゑるのを翌年の春まで延ばした。すると、圖らずも意外な便宜を得た。

私の家へ田舎から時々野菜物なんかを持つて來てくれる農家の老人があつた。その老人が蓮を育てたいといふ私の志望を聞いて、蓮には都會のこんな瘦せた土では駄目だから、上等の肥えた土を進上しようといふ好意を寄せてくれた。やがてその老人が車に積んで運んで來てくれた土は、荒川岸の泥土とかで、壁土に用ひても最上等なもので、色は少し灰色がかつて、ねつこりとした重みのある濃密なもの

荒川 秩父山脈中に發し、ほとんども東南流して東京灣に注ぐ。

だつた。私はそれに力を得た。春の彼岸になるのを待つて、小さな蓮鉢をひっくり返してみる。底の方にか細い白根が腐らずに残つてゐた。でも、それだけでは大きな鉢には足りないやうな氣がした。で、更に植木屋から白蓮と紅蓮との苗根を一株づつ取寄せ、その上田舎の老人に頼んで、普通の食用蓮の苗根をも取寄せ、それらを逆様に鉢の中へ植込んだ。そして植木屋から聞き知つた肥料として大豆と乾鰯を與へた。

ところが、春がたけていつても、蓮の芽はなか／＼出なかつた。その代りに鉢一面にぎら／＼とした油が浮き、青褐色の苔が泥の面に擴つていつた。そして六月の初頃になつて、

いちける 畏れて縮まる。
勇まじからず。畏縮。

小さな蓮の芽が出だしたけれど、その巻葉が開きかけるころ、しな／＼と横に倒れて、四五寸くらゐの大きさにしかならず、それもやがて縁の方から枯れていつた。そしてたゞ油と水苔とだけが、鉢の中一杯に漂ひ浮かび、泥の中からは泡が立ち、物の腐爛した臭氣が發散して、清淨な蓮の花も匂もその氣配だに見せないで、いぢけた小さな五六枚の葉だけが枯れ残つてゐるのみだつた。始め私は蓮を盛んに太らせるために、大豆を一合ばかりと乾鰯を七八本やつたのであるが、それが餘りに多過ぎて、蓮は肥料負けしてしまつたのである。餘り御馳走をやつたので、消化不良になつてしまつた。私は友人や叔父や田舎の老人などに答へた。そして鉢の中の泡や水苔をしきりに搦ひ出したけれど、また後から後

からと生じてくるし、鉢の中の泥全體が腐れ爛れたやうになつて、臭くて、穢くて手のつけようがなかつた。

植物の消化不良も、人間のそれと同じやうに、治療が甚だ困難なものである。自然の大地に於てならば、肥料はやがて地下深くへか四方へか次第に放散してしまふであらうが、瀬戸の鉢の中に於ては、放散すべき場處がなくて、いつまでも其處に残つてゐる。消化不良のいぢけた小さな蓮では、それをなかく、吸収しおほせるものではない。うつかりすれば、蓮の方が肥料の毒氣に窒息させられるかも知れない。こいつて、今更泥土を取換へるのは、夏の盛り時に猶更危険である。

私は悲しい氣持でぼんやり蓮鉢を見守るの外はなかつ

た。たゞ一つ私の心を慰めたことは、その蓮の葉を一枚、孟蘭盆の折、亡父と亡兒との位牌のある佛壇に供へることが出来たことである。

「どうせ駄目な蓮ですから、葉を一枚取つても宜しいでせう。」と妻はいつて、一番新しい綺麗な葉を切取つた。そして洗ひ清めたのを見るに、小さくはあるが瑞々してゐて、仄かな匂をも持つてゐた。八百屋から來た蓮の葉に比べると、新しいだけに色艶もよかつた。それだけのことを唯一の收穫にして、私はいつしか蓮鉢を忘れがちになつた。

年を越して、昨年ねんの春、鉢の泥を取換へてやらうかとも思つたが、つい不精から時期を過してしまつた。そして暖かくなるにつれて、鉢の中は油ぎつてねち／＼して來たが、それ

石精者 妙すきこそ
よしてはらふまの
あきりこそよむして
やうす色をかりかちん
なごころを 不相す文

と共に一つ二つ蓮の巻葉が出だして来た。強すぎる肥料の沁みた泥土の中にも、根だけは生残つてゐたものに見える。伸び出した葉は、前年と同じやうに、小さいいぢけたものだったが、それだけにまた可憐でもあつた。私はもう、花は勿論大きな葉をも期待せず、その小さな葉だけで満足した。

七月の末から、私は妻や子供と一緒に、房州の外海岸へ行つて、一夏を其處で過した。盛んに繁茂してゐる蓮田を見るに、自分の貧弱な蓮鉢が思ひ出された。そして九月の初め家に歸つて来て、私は少からず驚かされた。庭の蓮鉢からは、相當に大きな葉が七八本も眞直ぐに伸び出してゐた。

「花は……」留守の女中に私は尋ねた。咲かなかつたといふ答だつたが、別に失望もしなかつた。これほど葉が生ひ茂

房州 千葉縣安房郡の稱。
舊安房國。

るやうでは、來年あたり花をつけるかも知れないと、私は思つた。どうだい、——こいふ得意の眼付で、妻の顔を見返した。またやがて、友人や叔父の顔をも見返してやつた。

たゞ、悲しいことには、蓮の葉の裏面や柄に油蟲が澤山群つてゐた。鉢の上の方に桃の一枝が差出てゐて、それから傳播したものらしい。私は惜氣もなくその桃の枝を切去り、それから蓮の葉の油蟲を鑿殺してやつた。蓮の葉は勢を得たやうに、青々々茂つていつた。もう餘分の肥料も泥土に吸ひつくされたらしく、水がさつぱりと澄んで、青い藻まで生えてゐて、蓮池特有の匂も、氣のせむばかりでなく、實際に感ぜられた。それから霜時になるに、枯蓮の趣も十分に見られた。そして冬を越して、今年の春である。今日彼岸の入に藁の

覆を取去つてみる。鉢の泥は肥えて黒ずみ、水は冷たく澄返り、處々に枯葉の柄が残つてゐる。今に其處から青々とした卷葉が伸び出し、それが圓く大きく擴つて、露の雫を宿す頃には、更に花の蕾が伸び出して來て、夜明の光に音を立ててはつと開くであらう、なごご想像する。私は蓮の臺に坐するやうな清淨な心境を覺える。それにしても鉢の中に生き残つてゐるのは、紅蓮であらうか、白蓮であらうか、または普通の食用蓮であらうか、或はその三つともであらうか、それはこの夏花の開く折の楽しみとして、私はうららかな春日のさす縁側に蹲つて、庭の蓮の鉢の方へ眼をやりながら、フランスの友人が贈つてくれた蓮の花瓣で卷いた薫高い煙草を、靜かな心でくゆらすのである。(雜誌隨筆「豐島與志雄」)

蓮の臺 開きたる蓮華に象りたる臺座。極樂往生したるものは此の上に坐すといふ。

豐島與志雄 文學者。福岡縣に生まる。東京帝國大學の出身。

八 蜂

私の宅の庭は、割に背の高い四つ目垣で東西の二つの部分に仕切られて居る。東側の方のは應接間と書齋と其の上の二階の座敷とに面して居る。反對の西側の方のは子供部屋と自分の居間と隠居部屋とに三方を圍まれた中庭になつて居る。此の中庭の方は、垣に接近して小さな花壇があるだけで、方三間ばかりの空地は子供の遊び場處にもなり、又夏の夜の涼み場にもなつて居る。此の四つ目垣には野生の白薔薇を絡ませてあるが、夏が來ると、これに一面に朝顔や花豆を這はせる。其の上に自然に生える烏瓜も絡んで、殆ど隙間のないくらゐに色々の葉

が密生する。朝戸をあけると、赤紺水色、柿色、さまざまの朝顔が咲揃つて居るのがかなり美しい。夕方が來ると、烏瓜の煙のやうな淡い花が繁みの中から覗いて居るのを、蛾がせりに来る。薔薇の葉などは隠れて見えないくらゐであるが、垣根の頂上からは幾本もなく勢の好い新芽を伸ばして、これが眼に見えるやうに日々生長する。これに又朝顔や豆の蔓が絡み付いて、何處までも空へ空へと競つて居るやうに見える。此の盛んな勢で生長して居る植物の葉の茂りの中に、枯れかゝつたやうな薔薇の小枝から、煤けた色をした妙なものが一つぶら下がつて居る。それは蜂の巢である。

私が始めて此の蜂の巢を見付けたのは、五月の末頃、垣の白薔薇が散つてしまつて、朝顔や豆がやつと二葉の外の葉

を出し始めた頃であつたやうに記憶して居る。花の落ちた小枝を剪つて居る内に、氣が付いてよく見ると、大きさはやつと拇指の頭ぐらゐで、まだほんの造り始めのものであつた。これにしつかりしがみついて、黄色い強さうな蜂が一匹働いて居た。

蜂を見付けるに、私は中庭で遊んで居る子供達を呼んで見せてやつた。都會で育つた子供には、こんなものでも珍らしかつた。蜂の毒の恐ろしい事を學んだ長子等は、何も知らない幼い子にいろんな事をいつて、警めたりおごしたりした。自分は子供の時に蜂を怒らせて耳たぶを刺され、三七草の葉をもんですりつけた事を想ひ出したりした。あの時分はアムモニア水を塗るといふやうな事は誰も知らなかつ

三七草 菊科に屬する多年生の草木。莖の高さ一米ばかり、葉は大形にして、羽狀に分裂す。秋帯黄色の花を開く。葉の汁は毒蟲等の毒をいす効ありといはる。

たのである。

ごにかく、こんな處に蜂の巢があつてはあぶないから、落してしまはうと思つたが、蜂の居ない時の方が安全だと思つて、其の日は其のまゝにして置いた。

それから四五日はまるで忘れて居たが、或朝、子供等の學校へ行つた留守に、庭へおりた何かの序に思ひ出して覗いて見るご、蜂は前日と同じやうに、體を逆様にして、巢の下側に取付いて仕事をして居た。二十ぐらゐもあらうかと思ふ六角の蜂窩の一つの管に繼足しをして居る最中であつた。六稜柱形の壁の端を顎でくはへてぐるぐる廻つて行くご、壁は二ミリメートルぐらゐ長く延びて行つた。其の新たに延びた部分だけが際立つて生々しく見えて、上の方の煤

けた色ごは著しく違つて居るのであつた。

一廻り壁が繼足されたご思ふご、蜂は更にしつかりご體の構をなほして、そろそろ自分の頭を今造つた穴の中へ挿入れて行つた。如何にも用心深く、徐々ご體を曲げて、頭の見えなくなるまで挿入れたご思ふご、間もなく引出した。穴の大きさを確めて、始めて安心したごいつたやうに見えた。そしてすぐに隣の管に取りかゝつた。

私は此の歳になるまで、蜂の此のやうな舉動を詳しく見た事がなかつたので、強い好奇心に驅られて見て居る内に、此の小さな昆蟲の巧妙な仕事を無慚に破壊しようごいふ氣には、どうしてもなれなくなつてしまつた。

それから、時々庭へおりる度にわざ／＼覗いて見たが、

蜂の居ない時は寧ろ稀であつた。見る度に六稜柱の壁は段段に延びて行くやうであつた。或時は顎の間に灰色の泡立つた物質を一杯溜めて居る事が眼についた。そして壁を延ばす代りに、穴の中へ頭を挿しこんで内部の仕事をやつて居る事もあつた。しかしそれがどういふ目的で何をして居るのだから、自分には分らなかつた。

其の内に、私は何かの仕事にまぎれて、暫く蜂の事は忘れて居た。多分半月ほどたつてからと思ふが、或日ふと思ひ出して覗いて見るに、蜂は見えなかつたのみならず、巢の工事は前に見た時と比べて、ちつとも進んで居ないやうであつた。何だか豫想が外れたといふだけでなしに、一種の——ご

く軽い淋しさといつたやうな心持を感じた。それから後は、何時までたつても、もう蜂の姿が再び見えなかつた。私はどうしたのだらうと、色々な事を想像して見た。往來で近處の子供にでも捕へられたか、それとも私の知らないやうな自然界の敵に殺されたかとも考へて見た。しかし又此の蜂が、今現に何處か遠い處で、知らぬ家の庭の木立に迷つて、あてもなく飛んで居るやうな氣もした。私は親しい友達などが死んだ後に、一人で街の中を歩いて居ると、ふと其の友が、現に同じ東京の何處かの町を歩いて居る姿をあり／＼と想像して、いひ知れぬ淋しさを感じ、る事があるが、此の蜂の場合にも、これとよく似た幻を頭に描いた。そして強い眩しい日光の中にきら／＼して飛んで

居る蜂の幻影が、妙に淋しいものに思はれて仕方がなかつた。

今日覗いて見ると、蜂の巢のすぐ上には棚蜘蛛が網を張つて、其の上には枯葉や塵埃が一杯にきたなく溜つて居る。蜂の巢はいひながら、やつぱり住む人がなくては荒れはてた廢屋のやうな氣がする。此の巢のすぐ向う側に、眞紅のカンナの花が咲亂れて居るのが、一層蜂の巢をみじめなものにして見せるやうであつた。

私はごもかくも此の巢を來年の夏まで、此のまゝそつこして置かうと思つて居る。來年になつたら、此の古い巢にもしや何事が起りはしないかといふやうな豫感がある。

(吉村冬彦「冬彦集」)

幻影 思想または感覺の錯誤より、事實ならざるものを事實の如く認むる現象。

棚蜘蛛 蜘蛛類の一種。草木の枝葉の間に水平に細かき網を張る習性あり。

吉村冬彦 本名寺田寅彦。理學博士。東京市に生まる。東京帝國大學の出身。現に東京帝國大學教授たり。

九清 水

岩の窪に湛へられてゐる清水、そこには象牙細工のやうな白い美しい蟹が遊んでゐたりする。木の根からにじみ出る清水、そこには草の葉が水滴のために揺れて、休むことななくかぶりを振つてゐたりする。清水は淋しいものである。

大島から三宅島通ひの船に乗つたが、烈しい西風に吹立てられて、新島の本村へさへも船を寄せることが出来なかつた。小さな舢舨で漸く新島の或濱へ漕ぎつけられた時は、ほんごうに漂流した者のやうな頼りなさであつた。浪音に沿うてゐながら、椿の密樹のために薄暗く、齒朶の茂りの中についてゐる細い徑に、私は船暈のまだ癒えないふらく

大島・三宅島 共に東京府に屬す。伊豆七島の内。新島 同上。大島・三宅島の略中間に在り、其の距離各約四十軒。本村は同島の西海岸にあり、船舶の出入に便なり。

する身體を運んだ。咽喉は渴ききつてゐたがどうすることも出来ない。辛うじて、二里許りを來た頃、路傍に初めて清水を見出した嬉しさは、喩へやうがなかつた。其處にはお寺があつた。もう人里も近いと見える。私は全く救はれたといふ氣がした。

富士の裾野を旅した時、行けども行けども青い草原に、きりくすが淋しさうに鳴いてゐるばかりで、暑い日がじんじんと照り渡つて、日蔭を作る木立さへもない。人にも逢はない、鳥も鳴かない。さうした路に疲れきつた時、ふと學生らしい旅人に逢つた。「清水のある處はありますか。」私がかういつた言葉と、人穴村までどのくらゐありますか。」と向うで問ひかけた言葉とが、同時にぶつかつた。そこらは見

人穴村 静岡縣富士郡上井手村の字。富士山の西麓に當る。

渡す限りの平野で、大きな牧場にでもと思はれるが、水といふものが絶えてないために、生き物を飼ふ事は出来ないのであつた。清水のない處には生命がない。私達が汗を垂らしながら旅をしてゐる時は、生命の泉を尋ねるやうな氣持になりきる事がある。

夏の野の旅をした事のある人、又は山に登つた人は、清水の味を覺えない事はあるまい。暫く時を経てから其の旅の事を思ひ起して見るに、そこに清水のあつた邊の事が、一番鮮かな印象となつて残つてゐるものである。人里を離れてゐる處でも、路傍に清水があれば大抵一軒の人家があるものだ。大きな木を刳つた槽から惜しげもなくさらさらといふぼれる水が、不斷に生じて不斷に流れ去る「時」といふものを

思はせ、靜かな障子を開いた内には、老婆が一人絲車をわくわくと廻しながら、毎、日々々同じやうな「時」を繰つて繰つて倦まないでゐる。そこを通る旅の者は、軒先の清水を所望しながら、そこに住む淋しい人と何か言葉を交さないではゐられない。又は、深い山の中で、人家などは勿論なく、人の通る事も稀であるらしい處でも、ふと見出された路傍の清水に立寄つて見ると、誰か辨當を使つたらしい飯粒がこぼれてゐたり、手すさびに摘んで來たらしい花が挿してあつたりする。いつかこゝを通つた人が、こゝで休んで行つたのかと思ふと、同じ路を先に行く者、後から行く者の懐かしさも感じられる。

清水といふものは、實に幽邃な地境を思はせるものだが、

此處の地境は、
清水といふものは、
實に幽邃な地境を
思はせるものだが、

それでゐて又、不思議に人間生活の親愛を感じさせるものである。

昔、西行が吉野山に隠れて柴の庵を結んだ時も、彼はなるべく人里から遠い處を選ぶと共に、そこに清水の滴る處を選ばねばならなかつた。こゝこゝとおつる岩間の苔清水汲みほすひまもなき住居かなと詠んで、彼は此の清水を以て命を支へてゐた。それから五百年の後、芭蕉がそこに訪ねて來た時には、西行の庵は朽ちてゐたが、其の清水は苔にも隠されずにあつた。かのこゝこゝの清水は昔にかはらずと見えて、今もこゝこゝと雫落ちける。と、彼は感激の心を記してゐる。芭蕉は西行の歩んだ人生を慕つて、自分も亦其の道を歩かうとしてゐた。其の道は極めて幽かな、ほんごうの隱者

西行 俗名佐藤義清。歌僧。出家して四方に周遊し、建久元（一八五〇）年寂す。年七十三。「こゝこゝ」の歌、西行の作歌と傳へらる。

芭蕉 姓は松尾。俳人。伊賀の人。今日の俳句の祖と稱せらる。元祿七（一七〇二）年歿す。年五十一。此の文は「野晒紀行」の一節なり。

のみが行く岨しい路である。しかも、先人の足跡は「時」の力を以て湮滅せられることがないといふ眞實を、芭蕉は此の清水の昔に變らず湧いて滴つてゐることを以て實證し得たのであつた。

下野國蘆野といふ處に「清水流るゝの柳」といふのがあつた。私が持つてゐる昔の旅行案内には、柳の下に水が流れてゐる小さい圖がはひつてゐる。西行が此處に來た時、道のべの清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれと詠つたといふ。芭蕉は其の話を知つて懐かしくは思つてゐたが、奥の細道の旅の時に其處を通りかゝつて、此處の郡守戸部某の此の柳見せばやなご折々にのたまひ聞え給ふを、いづくのほごにやご思ひしを、けふ此の柳のかげにこそ立ちよ

蘆野 栃木縣那須郡の町。

道のべの 新古今集卷三夏の部に見えたる西行の歌「道のべに清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ」猶此の歌を此の地に附會せしは謡曲遊行柳の物語による。奥の細道 芭蕉の著。元祿二年奥羽・北陸を巡遊せしとき紀行なり。

り侍りつれ。と、彼は其の喜を筆にしてゐる。西行も、芭蕉も、一生を旅に過した人である。彼等は自分の先に行つた人が如何に此の行路に苦しむ、而して如何に此の清水の蔭で喜を見出したかといふ事を、實によく知つてゐたに違ない。

(荻原井泉水「山川行佳」)

花

花を活ける。——活かすのだ。生きてゐるものを切つて來て更により好くそれを活かさうとするのだ。花を活ける事はむづかしい。

水仙は首を垂れてゐる。それは深い物思ひに沈んでゐるのではなく、靜かに詩を案じてゐるのだ。

花を作る秘法は、先づ土を作る秘法からといふ。

私は花を好むが故に、何よりも造花を嫌ふ。(荻原井泉水)

荻原井泉水 名は藤吉。俳人。東京に生まる。東京帝國大學の出身。

一〇 沈黙

わが父致仕の後事にふれて宣ひたりしには、蘆澤さいひしものは、幼き時に父に遅れしを、其の父の遺領賜うて近く召使はれしに、それより廿歳ばかりに及びし比に、我を召す事ありて参りしに、戸部は物に腰かけて、打刀を横たへておはします。其の氣色常に變りぬと思ひしに、「近く参れ。」こありしかば、腰刀をこりて参らんこせしに、「そのまゝにて参れ。」こありしによりて、近く参りしに、「只今蘆澤を召出して手づから誅すべし。それに侍ふべし。」こ宣ひ出したり。答へ申すこもなくてありしに、やゝありて、「いらへ申す事もなきは、思ふ處やある。」こ仰せられしほごに、「さん候。かれが常々申し候ひ

戸部 コア。民部省の唐名。又民部省の官名を帯びたる人にいふ。こは久留利侯、民部少輔土屋利直。打刀 敵を打つに便ならしめたる刀。長さは普通さす。
腰刀 常に腰にさしおく刀。太刀などの如く従者に持たせ行くものに對していふ。

しは、稚き時に父に遅れし身の、莫大の主恩によりてかくまでは生長しぬ。此の恩に報いまるせん事、世の常の人々の如くしてはかなふべからずこ申す。天性不敵なるもの、しかも年なほ若くして、をこの振舞も多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候ひぬらん。但し若く候時に彼が如くなるものにあらずしては、年たけ候ひし後に、物の用には立たぬもの多く候か。これらの事を存じめぐらし候につきて、御答の遅く候ひしは、恐れ思ふ處に候。」こ申す。又宣ひ出す事もなく、我も亦申す事もなくして侍ふほご

青楓江上暮雲隈。萬里霜飛白雁催。
新井白石石筆蹟

新井白石石筆蹟

怪をか仕出して候ひぬらん。但し若く

をこ 笑ふべきほごに愚かなること。

青楓江上暮雲隈。萬里霜飛白雁催。

戊戌十月白石

に、やゝありて、面に蚊の集りぬるに、「逐ふべし。」と宣ひしほどに、顔を動かさなければ、血に飽きて胡頹子の如くになりし蚊の、六つ七つはらく、心地に墜ちしを、懐の紙を取出して、包みて袖にして侍らふ。又やゝありて、「罷り歸りて休み候へ。」と宣ひしかば、退出す。かの男は常に酒を好みて酔ひ亂れぬる事ごもありしかば、關さひし人のそれに親しかりしを語らひて、二人してまづ酒を断たしめて、常に諫めし事ごも怠らず。かくて年月経し後に、つひに父の職をも仰せ蒙りたりき。今は戸部も失せ給ひぬれど、始め我が申しし言葉の空しからざるやうに仕へまゐらせよと思ふなり。と宣ひたりき。これはかの人久しくして、また酏酒の事ありしが故なり。

(新井白石「折たく柴の記」)

胡頹子 グミ。胡頹子科に屬する植物にて、赤く熟したる實をもつ。

酏酒 クシユ。酒に狂ひて亂行すること。
新井白石 名は君美。儒者。筑後守に任ず。享保十(一二三八五)年歿す。年六十九。

一一 トロール船より

第一信

鮪の流し網を抛りこんでから、まだ一時間しかたちません。日はこつぷり暮れてしまひました。僕は闇の中にたゞ一人で見張をしてゐます。七號艇は今、江の島の沖十湊あたりを流れて居るのです。風はもの凄くマストに唸つてゐます。波は舷を打つたり、デッキを洗つたりしてゐます。

船長が突然、

「イナサだぞ。」といひました。南の風が南西に變つたのです。「イナサぢや今夜はしけますね。」と水夫長は笑ひました。變な風が吹きはじめました。雨も降つて來ました。合羽を

トロール船 海底の魚類を捕ふるため、特殊なる構造を持つ漁船。Trawler.

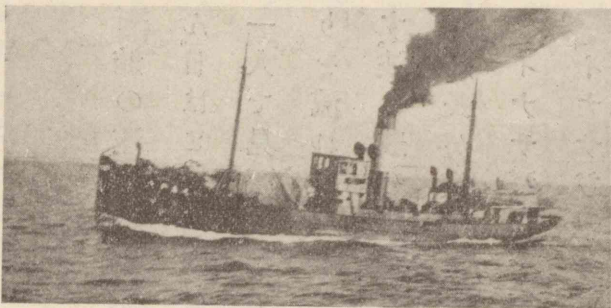
流し網 水流に任せて投入し、魚類を捕ふる網。使用する時は潮流を横断し魚をして網に入らしむ。

マスト 檣。帆柱。Mast.

デッキ 甲板。Deck.

イナサ 一舟五、六隻の船、東南風、二、三隻の船、南風、三、四隻の船、南風、四、五隻の船、南風

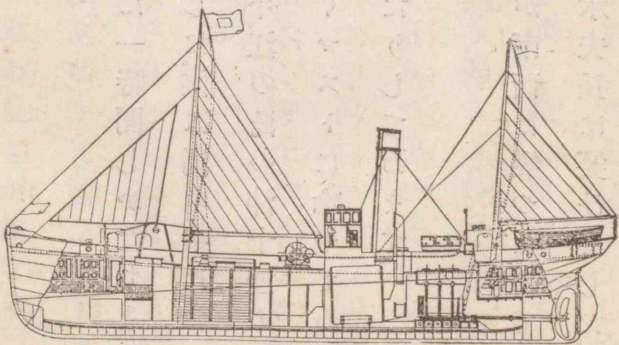
著てゐても雨が肌に透ります。首元から雫がほたりく



落ちる。それが脊筋を傳ふので、自然と身ぶるひがします。一夏でもこれでルすから、冬は船んなに寒いでせう。

雨は小やみ

になりました。星が二つ三つ見えて来ました。十二時半、總員デッキに出ました。皆合羽を著て、舳にしぱりつけてある流



面断横船ルーロト

し網を解いて、えんやトえトと引きはじめました。網は少しづつ近づいて來ます。

長さ六百間、幅三間の網を、えんやトえトと手繰込むごとに、夜光蟲がさつと光ります。實に見事です。まるで網全體にイルミネーションをしたやうです。美しいといふよりも凄いくらのです。

網を引上げてゐる茶色の合羽十五名のうち、半数は船に酔つて青い顔をしてゐます。たゞえんやトえトと調子を揃へて網を曳くばかりで、むだ口一つきくものもありません。ざろりとした眼結んだ口、男らしい決心があらはれてゐます。デッキを洗ふ波に足を浚はれないやうに踏みしめてゐます。航海ランプの青い光に照らされたこの作業の有様は、

夜光蟲 原生動物中鞭毛蟲類の一種。微細にして群棲し、水波の動搖に従ひ、夜間燐光を發す。
イルミネーション 電光飾。
Illumination.

航海ランプ 夜間航行中の船舶の點す橋燈及び舷燈をいふ。前者は前橋の前面に掲ぐるものにて白色、後者は兩舷に一個づつ掲ぐるものにて左紅右綠のもの。

どんな畫家にも書きあらはすことは出来まいと思ひました。

綱はずん／＼上がるやうに見えますが、一度に二尺ほど上がつて來ません。ローリングのひどいデッキで、この作業は實に苦しいものです。

「それたぞ……鯉が二十ばかり……」と舳の一人が叫びました。これに力を得て、綱は舳から中央へ、中央から艫へ、手繰込まれて行きます。

我慢がしきれなくなつたと見えて、誰かが、

「苦しいなあ。」といひました。その時、仲間の一人が、

「ばかつ。」と怒鳴りつけました。さうして、

「苦しいといつたつて苦しいのが直るかい。むだ口をた、

ローリング 横に搖るゝこと。
Rolling

くな。苦しくつても黙つて作業をするのが僕等の美しいところだ。」と附加へました。全くです。それが海に生きるもの意氣です。

「また降つて來やがつた。」と一人がいひました。すると、

「えー、雨はごんごよ、そりや舷た、くよー。心なやます西の風よ。そりやまつたくだよえーだよえー。」と誰かが歌ひはじめました。つゞいて、

「……激浪ごう／＼よ、元氣つのもよー。舷うち越す浪の山よー。」と歌ひました。この歌は陸で聞くのとは全く心持が違ひます。歌といふものは嬉しい時にのみ歌ふものではありません。苦しくても歌ひます。これが眞劍の歌でせう。

綱をすつかりあげてしまつたのが午前一時半。ちやうど

十二時から作業にかゝつたのですから、一時間半働いたわけです。網が全部艦に綺麗に積まれた時には、舷によりかゝつて吐いてゐる者もありました。……作業がすんでから、……「こんなに苦しんで僕等は船乗になるのだ。」と誰かがいひます。……「親に見せたら泣くだらうよ。」と妙な調子で、また誰かがいひました。……僕をはじめ海は美しい處さばかり思つてゐましたが、海に生きるには苦しいこともあります。しかし苦しい底から湧いて來た樂しさでなければ、眞の樂しいものではあるまいと思ひます。私の生きる處は海です。

船室に入つてぐつすり寐込んでしまひました。目が醒めて見ると、私は三崎の油壺の中にゐました。

第二信

鮪の流し網をあげてしまつて熱海の沖を出たのは、八月十八日の午前一時でした。目ざすは大島波浮の港です。しげようとする強い南風を眞つ向にうけて突進するのでした。僕は舵輪を握つてゐます。左には水夫長、右には春木君がゐました。船が進むにつれて波はだん／＼大きくなります。白波もまじつて來ました。常には水面から一間半も出てゐる舳を、波は樂に呑んで、船橋にゐる私等三人にぶつかつて來ます。身はびしよぬれになつてしまひます。ローリングもするがピッチングがひどい。舷が波の峰から谷にすべる時、

油壺 神奈川県三浦郡三崎町の西北方相模灣に面する小灣。

波浮 ハブ。伊豆の大島の南端にある小港。

船橋 船舶の運航に關して一切の命令を發する處。

ピッチング 縦に揺る、Pitching.

「また来た。」と思ふ間もなく、頭から潮を浴びる。それが目に沁みて開けてはゐられませんが、やつと腕でぬぐつて前方を見る。船の進路がいくらか狂つてゐます。それを直しては進みました。たゞ航海ランプが私ども三人に勇氣づけるやうに輝いてゐます。三人は一言も話しません。聞えるものは風と波と機關の音。實に凄いものでした。

「来たぞ、……今度のは大きい。……悪魔が大きな口を開けて笑つてゐるやうだ。」

僕がかういふと間もなく、黒い小山のやうな波がもくもくこ頭をもちあげて來ます。舳にぶつかつて左右兩舷に裂け、それが船橋の下で一緒になつて船橋に飛上がつて來ます。残のものは艦へ流れて、綱に碎けてしまひます。僅に十七

噸の七號艇航海してゐるといふよりは、潜航してゐるといつた方が適當です。時には波の峰に乗つてスクリュウのからまはりする音が聞えます。

交代する時が來ました。春木君が舵輪を握りました。この時始めて、

「えらいめにあひますねえ、今夜は。」と水夫長がいひました。僕は急に寒くなつたから、機關室に入つて、十分ばかり經つて出て來ました。見るに、航海ランプのせゐにしては、春木君の顔がいやに青い。

「ごうかしたのか。」と聞いてゐるうちに、春木君は舵輪を握つたまゝ、後に倒れて來ました。「しつかりしろ。」と、背活を一つ。

スクリュウ
Crew
推進器。

「腦貧血らしい。」といひます。

「待てつ、ブランデーを持つて來てやる。」

急いで行つて持つて來ました。一二杯飲ませると、少し元

氣が出ました。

「春木休めよ。……なあ。」と僕はいひました。

「春木さんお休みなさい。あさは三時間ぐらゐですから、仁

平さんと私で大丈夫です。」と水夫長がいひました。

けれども、春木君は「かまはないでくれ。」といつたきり、舵輪

を握つてゐます。

「無理をなすつちやいけません。からだをこはしてはだめ

です。寝ていらつしやい。」

水夫長はまた、かういひました。

ブランデー 洋酒の一。氣
付劑として用ひたるな
り。Brandy.

仁平 ニヒラ。本文に僕と
して現れたる人物の姓。

「ほんごだ、春木休んでゐろよ。」と僕が春木君の手をこつて、
寢室へ連れて行かうとしましたが、どうしても舵輪の手を
放しません。さうして、きつこして、しかも靜かにいひました。

「待て、おれには今ワッチといふ義務がある、責任がある。こ

の義務を捨てて眠れるか。死んでもかまはない。しかしおれ

は死にやしない。大丈夫だ。もう三十分舵をこつてから寝る。」

春木君の目には涙が光つてゐました。斷乎とした決心が

あつたのです。水夫長も僕も、今は何ともいふことが出來ま

せんでした。

僕は波の高い太平洋の闇の中で、春木君の偉大な心に觸
れました。また責任感のつよい春木君を私等の仲間を持つ
ことを心強く思ひました。

ワッチ 夜番。見張り。
Watch.

第三信

先生、トロール船は鋼鐵製で吃水が深いから、波浪がいかに高くとも難破の怖がありません。それ故、低氣壓の襲來を無電が報じて、また肩休めかこいつて氣にする者もありません。作業は四時間おきに綱の袋をあげて魚の始末をするのです。陸上の生活とは睡眠時間が全く違ひますから、乗船一週間ほどは頭が馬鹿のやうになりましたが、今では馴れて、もう何でもありません。或トロール船の船長が話してゐたといふ話に、

「ある時化の後で波のまだ高かつた時、水夫がデッキで作業をしてゐた。波がデッキを洗つて足を浚はれさうだから、大きな波が來るこ互に警戒して、前に引いてある綱に掴ま

吃水 船舶の水中にひたる深さ。ふなあし。

時化 シケ。暴風雨。

る。するこ、大波は腰から下を洗つて行く。行けばまた作業に従事する。こんな事をしてゐる時、遙かの波の峰に一抹の黒烟が見えた。それは驅逐艦だつた。水夫等は顧みて、

「今頃驅逐艦が何しに來たのか。」といつてゐるこ、無電がかつて來た。

「難破か」とトロールからは直ぐに、

「冗談いつちやこまる。作業中だ。」と返電した。といふことです。

私はこれを聞いて、海の痛快味はこゝだと思ひました。人はかうして痛快な一句を言ひきることを目的として働いてゐるのかとさへ思ひます。(第二讀方教授)

第二讀方教授 蘆田惠之助の編。

一二 蜃氣樓

唐土の詩文にも、多く作りてもてはやせる蜃樓といふことあり。又海市ともいふ。海上に雲の如くに氣立上りて、樓臺城郭の形を現し、其の中に人馬往來せるまでも、まのあたり見ゆるなり。唐土の書物にいへるは、これ大海の底にある大いなる蛤の氣を吐きて空中に樓閣の形を現すなりと、又蜃といふは、其の形龍の如きものにして、海中に住んで氣を吐きて樓臺を結ぶなりと。種々の説あり。蘇東坡なども南海に遊びし時、龍神に祈りて蜃氣樓を見、詩を作りし事あり。唐土にては甚だ珍らしがりて賞玩することぞ。

我が國は四方皆大海にて、いづれの國の人も海を見ざる

蜃樓 蜃氣樓に同じ。

蘇東坡 名は軾、字は子瞻。東坡はその號。宋の文人。(西紀一〇三六—一一〇一年)

者もなきに、此の蜃氣樓は甚だ稀なり。たゞ越中の魚津といふところに毎年三月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして風收り、海上霞み渡りて、一面の鏡の打曇れるが如き日に、此の蜃氣樓を結ぶ。毎年一兩度、或は多き年は三四度も結ぶことあり。誠に唐土の人のいへる如く、海上に烟の如く、雲の如く、次第に結び來りて、遂には樓臺の如く、或は城郭の如く、人馬往來せる如きも歴々として見ゆ。北地に我が親しく交はりし宮島式部太夫といふ社人は、折よく魚津にてこれを見たり。初は幕を引けるが如くなりしが、暫く見る間に、城郭の如く、矢倉高堀やうのものも見え、矢間などの如きものも見え、又暫くする間に、松原の如く、繪にかける天の橋立などのやうに見えけるが、夕暮に及び、風少し出でたれ

魚津 富山縣下新川郡の町。

宮島式部大夫 傳未詳。社人 神社に仕ふる人。

矢倉 城門・城壁などの上に高く構へたる建物。櫓。矢間 城壁・櫓などに設けて矢玉を射出せし窓・隙間。

ば、漸々に消失せて跡形も無くなりしとなり。富山よりは僅に六里隔てたるころなれば、城下の人々皆見物したく思へども、何時に結ぶかも知れ難く、又結びたる時、急に人して告げ知らずとも、其の間には消失せて見るべからず。此の故に、魚津近處の海邊の人は、例年見ることなれど、二三里を隔てたる地方の人は、一生涯遂に見ざる人多し。

余が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して蜃樓を見るべしと、人にも勧められ、余もまた年頃の望なりしかど、富山にありしころは、正月二月なれば、それより三四月まで越中に逗留せんことあまり長々しければ、残念なりしかども見ずして越後に越えたり。越後の糸魚川にて、松山茂肅に此の事を語りしに、此の人も、糸魚川の海中、遙かに山の

糸魚川 新潟縣西頸城郡の町。
松山茂肅 名は造。儒者。
糸魚川の素封家。父林喜

出で来るを見たり。漁人のいひしは、これは鹽山といふものにて、をり／＼見るこことなりといひし。と語られき。

余初め唐人の作れる詩などを見て思ひしは、蜃樓は大洋にあることにて、陸地近き入海にはなきやうに心得しが、魚津の地理を見るに、さにはあらず。魚津は北海に臨める地なるに、向ひの方七八里と思ふほどに、能登國の山を屏風の如くに見る東よりの入海なり。海中より蒸し登る陽氣、向ひの山に映じて、色々の形を見するなり。向ひに當なく、遙々見晴したる大海にては、陽氣登るこいへども、向ひの當無ければ映ずることなくして、人の目に見え難しと覺ゆ。奇を好む人は、三四月の頃越中に遊びて、此の樓臺を見るべきことなり。
(橋南翁「東遊記」)

に學ぶ。寛政六(二四五四)年歿す。

橋南翁 名は春暉。醫師。最も旅行を好み、足跡全國に通じ。文化二(二四六五)年歿す。年五十三。

一三 蜀山人の盆燈籠

文化元年の頃か、小石川に庄助と呼ぶ男住めり。日傭又は擔ぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ行燈々籠といふものを持行きて賣りけるこころ、如何にしけるにや、買ふもの更になく、賣れしはわづか十ばかり、残りしは多ければ、力を落し、情なき顔して擔ぎ歸りしが、太田南畝翁方へは常々出入るものゆゑ、歸りがけに立寄り、臺所の者に向かひ、

「儲々困るこころかな。この盆は如何にして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ残り候。この分にては明朝神樂阪の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もこより手

文化元年 光格天皇の御宇。二四六四年。
壽經寺 小石川表町にある淨土宗の寺。無量山傳通院と號す。

太田南畝 （あべのみなお） 名は覃。蜀山人と號す。狂文・狂歌に長ず。文政六（一四八三）年歿す。年七十五。

神樂阪 東京市牛込區神樂阪町。

細工にせしこころにはあれど、聊か資本もかゝりたり。この分にては水も吞まれ申さず。話しかこちけり。

南畝翁は座敷にてこれを聞かれ、手に持つ盃を下に置き、

「かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにや。」と問はるゝにぞ、傍のもの、



蜀山人筆蹟

「かやうくにて、またかのぐづ男が泣き申し候。」といひければ、翁は臺所へ出でられ、

「儲も氣の毒なるこころよ。願の下が乾きては誰も難儀ならん。我がいふ如くせば、少しは賣るゝ事もあるべし。」といはれ

一めんの花は春盤の上野
山くろもん前にかゝるじ
ら雲
蜀山

ければ、

「それは有り難きことに候。いかに致すべきか。」翁の顔を如何にも有り難げに仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し、これにてその燈籠を張替へよ。我それに何か書きてやらん。このここに、悦びて立歸りしが、忽ちに百ばかり張替へて持來たれば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらなくりつけて渡されしに、庄助は頭を搔き、一禮を述べて荷ひ歸りながらも、蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れざるに、いかに先生なればとて、かゝる冗書冗書の反古張にては買人はあるまじ。さりながら、あれほどに仰せられしものなれば、まづ明朝神樂阪の市へ持行き、賣れ残りたらば、そのことを申し、^{二百匹}て歎きつき、二百匹も借りて外商ひの種とせん。」と、工面顔に

て、足も重く二三町歩む向うより、來りし侍往きすぎしが、供のものに言ひつけ、

「その燈籠は賣物か。」と問はしむ。

「偕は悦び、

「いかにも賣物に候。やうく傳つとを求めて先生に書いてお貰ひ申したるにて、心あてもありて拵へ候なれども、このやうには入り申さず候ゆゑ、お望ならば差上げ申さん。」といふに、

「價はいかほごぞ。」と問ふ。幾許といひてよきことやら、庄助はたと行詰まりしが、思ひ切つて「五十文。」といふ。

「その値にて二つくれよ。」と百文渡して買行きたり。又後より通りかゝりし人、それ賣るならば買ひたし。」といふ。今度は

息を一杯に吹いて、六十四文。といふ。いふがまゝにまた買行きたり。後よりまた、此方へも二つ、我にも一つと、おのが家に歸るまでに二十ばかりも賣りて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、いきり立つて女房にかくと話せば、

「誠に寝惚様は生佛様なり。有り難きことなり。明日は早くより持出で給へ。我も参りて手傳ひ申さん。お前一人にては手が足るまじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。」と、女の智慧の慾が先なり。

夫婦にこゝく、七つ起して神樂阪へ行き、竝ぶる間もなく、蜀山人の書いたる燈籠は珍らしい。と立止りて價を問ふ。庄助思ひ切つて、百文。といへば、さうもあらうぞ。と百文にて買行く。女房夫の袖を引き、

寝惚様 蜀山人自ら寝惚先生と戲號したり。

七つ 今の午前四時。

「百でも値切らずに大勢買つて行かるゝからは、二百文といふことも賣れ申さん。二百文といひ給へ。」と、また智慧をつくるに、庄助額に手を加へ、二百文はあまり高からう。百五十文。といふ。それより百五十文にて六七十賣り、終には先見明かなるその妻の言の如く、

「二百文よりまかりませぬ。」と、肩を怒らし、まだ五つ半にもならぬに賣切りたり。

錢二十貫ほど、金にして三兩ばかりになりしゆゑ、夫婦こけつ轉びつ翁の宅へ來り、亭主をかきのけて女房まかり出で、有り難いと數千遍述べて、いかでも先生は生神様だ。と、今度は神あしらひにして悦び歸りしとぞ。翁が醉餘の戲、よく枯骨に膏すといふべし。(養庭篁村「雀躍」)

十文
二百文
三
南

五つ半 今の午前九時頃。

養庭篁村 名は與三郎。文學者。大正十一年歿す。年六十八。

一四 身邊涼味

ゆき

越後では眞夏でも眞つ白な雪をゐながら眺め楽しむことが出来る。長い冬の間以降積つた雪は、雪室とか雪小屋とか呼び慣はされてゐる貯藏處に集められて、いつまでも冬のまゝの白さを失はずに貯へられる。それらの雪の大部分は春夏秋を通じて生魚の貯藏に用ひられる。土地で獲れた魚類を遠方へ移出するにも、やはり此の眞つ白な雪が何よりのたよりになつてゐる。先づ箱の中に一はい眞つ白な雪が詰められる。そしてその中に獲れたばかりの生々した魚が埋められる。それはいかにも美しくいかにも旨さうに見える。ごりわけ鯛のやうな美しい色をした魚の雪漬にされ

たのは、見るから氣持のよいものである。

眞夏になるに、此の眞つ白な雪の塊の驚くべく大きなのを、私達風情でもさほご高い價を拂はずに部屋の中に溶けるまゝにして置くことが出来る。それによつて室内の空氣をどれほど冷すことが出来るかは別として、單にそれを眺めてゐるだけにでも、他では得難い涼味がある。私達の幼い頃までは此の「圍ひ雪」を食べることが許されてゐたものである。そして其の頃は夏中街上に雪賣の呼聲が絶えなかつた。

「雪や氷、雪や。」

子供達は競うてかうした呼聲を張りあげて町中を歩いた。雪小屋へ行つて雪を買つて来る。そしてそれを小さな箱

風情 おもむき。味ひ。轉じて、それらしきもの。如きもの。

や籠に入れて賣歩く。買手がある毎に小さな鋸で眞つ白な雪の塊を、呼賣の豆腐屋が豆腐を切るやうに、小さく幾つかに切つてやる。それは子供達にとつては一種の仕事であり、商賣の練習であつたと同時に、此の上なく愉快な銷夏法でもあるやうに考へられてゐた。

雪は氷——殊に人造食用氷——に比べると、その冷たさは柔かであり、齒ざはりも頗る快い。子供の頃夏の暑い日盛りに眞つ白な雪の塊を手につかんで、ざく／＼音を立てながら食べた快さは今でも忘れ難い。併し衛生上の取締が嚴重になつてから「圍ひ雪」を食用に供することが固く禁じられて、今日ではその代りに、私達の地方にすらも、夏になると何處からか人造氷が盛んに移入されるやうになつた。そし

てあの懐かしい、

「雪や氷、雪や。」といふ子供達の呼聲も、夏の街上に聞くことが出来なくなつた。

それにも拘らず雪を貯藏して置く場處、即ち雪小屋は次に數を増してゆく。それは魚類の移出が年々盛んになつて行くからである。

夏の夜の涼しさは、何といつても海際が第一である。日が暮れかゝる頃から避暑客などの來てゐない此のあたりの砂濱でさへ、さすがに賑やかになる。暗くなるに、人々はあちらに一團、こちらに一團といふ風に集つて焚火をする。そしてその焚火で茶を煮る。眞つ裸になつた老若男女がその焚

火の周圍に集つて茶を飲み、話をする。多く漁師の妻女達や老人達や子供達である。沖には烏賊釣船の漁火が幾百こなく竝んでゐる。海上の漁火、海濱の焚火、いづれにも原始的な味ひがある。

焚火の周圍に集つた子供達の間から、時々こんな問が母親に向かつて發しられたりする。

「沖の舟の火、みんなで幾つあるだらう。」

さうかと思ふと、

「あの中のどれがうちの父つあ達の火だらうなあ。」といふやうな情味の籠つた幼い疑問まで持出される。

暗い海の上の空には、仄白い銀河が夜の更けるにつれて鮮かさを増す。涼しい風が水のやうに流れる。おだやかな低

追分節 地方俚謡の一。

い波の音が單調なうちに限りない複雑を藏してゐるやうに聞える。時には廣い砂濱のごこかで、冴えた聲の追分節が謠はれたりする。冷たい砂の上に仰向けになつて、私達は夜の更けるのも知らずに、星空の神祕に魂を奪はれてゐる事がしばしばである。身内の冷えすぎたのに驚いて立上がる頃には、磯の焚火もいつの間にか消えてしまつてゐる。そして波の音が妙に淋しさをそゝる。沖の漁火だけは依然として燃え續けてゐるが、それさへも、

沖べなるいさををたちは夜をふかみさまぐのこ

と思ひてあるらむ

かうしたことを思はずにゐられないほどに、何となく淋しさうに見えるのである。(相馬御風「第二の自然」)

相馬御風 名は昌治。文學者。新潟縣に生まる。早稻田大學の出身。

る。それは全く和井内貞行氏の奮闘努力苦心經營の結果で、その功績は實に永久不滅の美談をなすものである。

和井内貞行氏は秋田縣鹿角郡毛馬内けまないの人で、一時土地の小學校に勤めてゐたが、後に轉じて小阪鑛山の支山たる十和田鑛山に奉職することとなり、日夕十和田湖に親しむやうになつた。然るに、湖中に少しも魚が居ないのを遺憾に思ひ、養魚池として十和田湖を利用することが出来ないものか、と考へるやうになつた。ところが、明治十七年、故松原新之助といふ水産學者が十和田湖を視察して、養鱒事業に適當なことを述べた。これに力を得て和井内氏は養魚事業を思ひ立ち、同年先づ鯉、鮒、嘉魚などを放流し始めた。かういふ場合によくあることだが、神罰を唱へて諫める人もあり、遂に

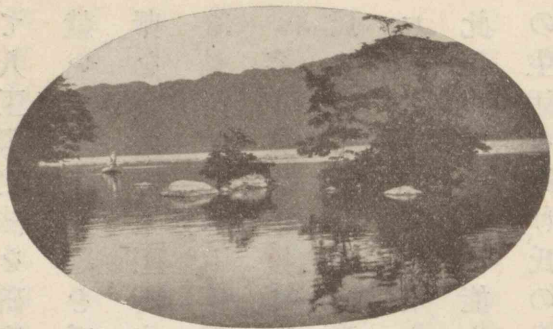
毛馬内 鹿角郡の町。

小阪鑛山 秋田縣鹿角郡小阪町にあり。
十和田鑛山 今は廢坑なる。

松原新之助 水産講習所長たり。大正五年歿す。年六十四。

嘉魚 イハナ。喉鯉類に屬する魚。

は迫害を加へる人もあつた。併し氏は少しも其の志を枉げ



十和田湖

ず、後には鑛山を辭し、家を湖畔に構へて、一意専心養魚に従事した。ために湖中に魚の姿を見るやうになつたが、思ひ通りこれを漁ることが出来ないから、收支が償はず、營利事業としては見込が立たなかつた。しかも氏は少しも屈せず、頻りに魚苗を放流して、世間から魚狂人と罵られ、親戚知人にも全く見離されるやうになつた。けれども、氏の決心は益々固く、日夜養魚に心を砕いて、殆ど寢食を忘れ、東奔西走、其の方法に苦心してゐたが、明

治三十年、神戸市に開かれた水産博覽會を觀て大いに得るところがあり、翌三十一年、長男貞時氏を日光中禪寺に遣つて人工孵化法を研究せしめ、更に農商務省の水産講習所に就いて其の指導を受けさせ、同三十三年、中禪寺湖から鱒の卵を買求め、人工孵化法を施して放流して見た。然るに、これも結果が思はしくなかつた。

多年、資本を投ずるばかりで、一向収入が無かつたために、氏は殆ど數萬の財産を失ひ、非常に苦しい境遇に陥つた。外に援助を與へる者もなく、又同情を寄せる人も無かつたが、此の間にあつて、能く家計を治め、子女を教育し、湖畔の住民の生活を助け、氏の全力を養魚事業に注がせたのは、たゞ内助者勝子夫人のみであつた。多年失敗つゞきの夫の事業に

愛想も盡かさずして、能く内助の責任を盡くし、飽くまで夫の素志を貫かせようとした勝子夫人の態度は、實に見上げたもので、世に珍しい賢夫人であつた。

さて和井内氏は、明治三十五年、青森縣の水産試験所を訪うた際、圖らずも、信州の或寒天製造會社の支配人から北海道支笏湖産の姫鱒即ちカバチエツポの移殖を勧められた。物は試しといふ譯で、氏は翌三十六年五月、其の魚苗三萬尾を十和田湖に放流した。元來カバチエツポは放流後三年経てば最初の放流處に泳ぎ歸つて來る回歸性の魚である。これぞ運試しと成功するかしないかを氣遣ひながらも、待つこと三年。其の頃氏の信用は全く無くなり、資力も亦盡きて、生みの親にも見離されてゐたのである。然るに、氏の至誠が

支笏湖 ショッコ。北海道石狩國千歲郡の南端。江別川(石狩川の支流)の水源をなす北海道第一の深湖。
カバチエツポ 北海道釧路國阿寒郡なる阿寒湖に産する鱒の一種。此の名は土人の名稱なりしが明治四十二年北海道廳は之に姫鱒と命名せり。後支笏湖に移殖せられたり。

天に通じたものか、同三十八年十月一日、カバチエツポの大群が湖水の色も變るばかりに頭尾相接して、初めての放流處に泳ぎ歸つて來た。

「あ、嬉しや、大願成就！」

氏はこれを見て跳り上がらんばかりに打喜び、早速、勝子夫人を湖岸に伴なひ、共に姫鱒の大群を眺めながら、我が事成れり。」と歡喜の涙を浮かべたのである。話がそれからそれへと傳はつて、忽ち大評判となり、昨日までの悪口雜言が、今日は賞讚の聲に變つてしまつた。實に痛快極るこゝである。其の後、湖水の西南岸なる追手おびてにある孵化所では、人工孵化法によつてカバチエツポの魚苗を養ひ、毎年少くも三萬尾の苗を湖中に放流し、年々尺大の姫鱒約を百萬尾を漁

つて、奥羽地方は勿論、東京邊にも供給し、其の燻製は遠く米國にまで送られるやうになつて居る。カバチエツポは姫鱒とも十和田鱒とも呼ばれるが、氏の姓を取つて和井内鱒とも稱へられて居る。かくて和井内氏多年の努力は、能く幾千年來の廢湖十和田をして、全國屈指の鱒の養魚池たらしめ、一時全く失つた家財を恢復したばかりでなく、湖畔數百の住民の生活を安定ならしめて、明治四十年四月二十五日、綠綬褒章御下賜の名譽を得た。事ここに至つては、湖神青龍大權現も湖の主といはれて居る南祖坊も全く顔色なしである。

惜しいかな、勝子夫人は綠綬褒章御下賜の前月病歿せられた。湖畔の住民は其の婦徳を敬慕し、湖水の西岸なる大川

綠綬褒章 褒章の一。徳行の卓絶なるもの又は實業に精勵し衆民の模範たるものに賜る。綠色の綬を以て之を佩用す。
南祖坊 十和田湖の傳説中の僧。

岱たいの麓ふもとに神社を建て、これを勝魚しょうぎょ神社と名づけて其の靈を祀つて居る。貞行氏は功成り名遂げて大正十一年五月歿せられたが、病氣危篤のことが天聽に達するや、特旨を以て正七位に叙せられた。今は氏の長男貞時氏が遺業を繼いで居られる。

想ふに、雄大なる十和田の風景は自然に備はる天與の誇である。若し國立公園になるならば、其の裏書をして貰ふやうなもので、確に十和田湖の名譽に相違ないが、和井内氏の養魚事業は人間の努力によつて得た偉大な誇で、これを教育上から眺めるならば、天與の誇に更に光彩を添へて居る人性の輝きである。(北垣恭次郎「日本の誇」)

北垣恭次郎 教育家。兵庫縣に生まる。東京高等師範學校の出身。

一六 海金剛

内外金剛の怪奇は陸で盡きず、餘脈が海に入つて、更に海金剛と呼ばれる秀拔な岩礁の一部を作つて居る。

温井里から見える日本海の紺碧は、近いやうでまだ遠い。狭い峽谷で、蹙められた眼は、はやく廣い眺で暢びようとする。

「そりやあ綺麗ですよ。岩の間に海草がゆら／＼と生えて、大きな魚がつい／＼と泳ぐのが、残らず見えるのですからなあ。」と永井君が手眞似までしていふ。その人を案内者として、ホテルから自動車を走らせる。

外金剛の跋涉が案外早く済んだので、まだ日が高い。夕方

金剛 朝鮮江原道なる名山。巖石の秀麗を以て知らる。内金剛・外金剛・海金剛の三景観に分る。海抜一六三八米。温井里 外金剛の北麓に當る。

までには、十分見て歸れるといふので、車中いづれも悠々として居る。

元山街道から右に曲つて、平野の間を車は飛ぶ。左手に金剛一帯が見えるが、これが何の峰だか分らない。彩霞峰といふのだと説明されるが、初めて見る特別な巍然たる形をしてゐる。

朝鮮特有の赤禿山が處々に見える。その下から平蕪が連なつて居る。道はその間を殆ど眞直ぐに通ずる。一列の松林が見える。その邊を赤壁江が流れてゐるのだといふ。

三里ばかりを疾驅するといよ、日本海の碧波が目に見え、満ちて来る。陸が窮まるころで車を棄てる。高城といふ村である。

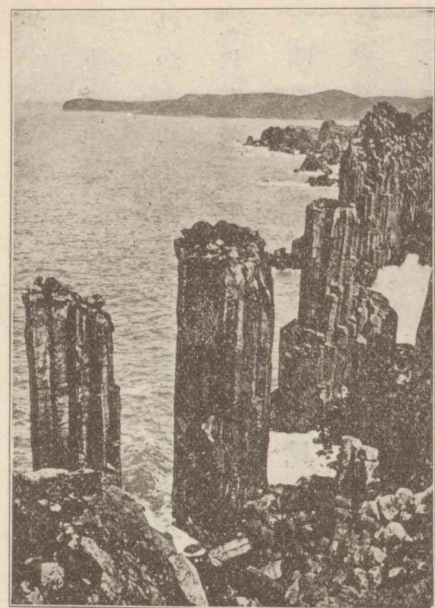
元山 咸鏡南道元山府。

平蕪 ヘイブ。荒れたる平地。蕪は雑草の生ひしげれる地。

赤壁江 金剛山中より發して海金剛の邊にて日本海に注ぐ。

高城 赤壁江の河口に近き村。

一帯の砂濱、ここに海金剛なごといふ奇岩の群があるのかと訝らしめるほどに、平坦な沙濱がさゝやかな入江を抱いてゐる。



海 茶店に入つて、舟の用意の出来るのを待つ。沖の方には、大うねりがあつて、白い波頭が大魚の腹を返すやうに立

ちしきつてゐる。風があるらしい。舟に弱い自分には、禁物の日だと一寸困る。舟の用意が出来たので、みんな乗る。自分も勢よく乗る。ゆ

らくくこ出るが、入江の中だから、驚くこことはない。

左手に奇礁の屏風が見え出す。海金剛はこれかこ見るが、内外の奇趣に馴れた目には、なんだこんなものは、「こいふ氣がする。」

舟は沖へ沖へこ向かふ。水の色が藍碧になる。波が白く折れかへる。舟の動搖が強くなる。行手の大うねりが、此處まで烈しく影響する。

「ゆらくも、ついくも見えないではありませんか。」こ誰かが、永井君を責める。

「今日は、どうしたのですかなあ。」こ永井君も見當のちがつた顔をする。

舟路は一轉する。岩の屏風の向側に進まうこするのであ

る。波がすこしく静かになる。

一廻り廻ると、舟は岩壁に近づく。見るこ筈のやうな直立した大岩の集りである。色が代赭を帯びてゐるので、明る過ぎて昨日のやうな凄味を感じさせないが、多くの陰影を保ちつゝ、竝列したこころは、確に一奇觀である。

岩壁に沿うて進んだ舟が、壁こ壁この罅間からはひるこ、こ、は四周皆新たな岩壁である。

「これが金剛門といふのです。」

「方々に金剛門があるのですな。」

「その中で、こ、のが一番門らしいですな。」

屹立幾十尺であらう。あまり高くはないが、垂直であるので、上までは仰ぐ目遙かな心持がする。代赭色は強いが、こ、

では雄偉の姿に壓せられて、すでに目に著かない。その下に竝ぶ岩も猶凡ではない。

隈おほき岩間々々にさしいりて白く騒立つ午後

夏汐

舟が岩の陰になると、代赭は薄紫にかはる。波の白さも暗さを帯びる。また舟が廻る。紫は明るさを加へる。波は喜ぶやうに岩に戯れる。かゝつては落ちる音が、笑ひさゞめくやうである。

ふこ呼ぶ聲がする。見ると前方に舟から岩の上に上がつてゐる一群がある。

「これはお珍らしい、先日は。」と答へる。京城で自分らを歓迎せられた醫學博士夫人の一行である。

騒立つ サワグツ。騒ぐ状になる。さわがしくなる。

岩に上がらうとするこ、

「そのまゝ、でいらつしやい。寫しますから。」と、寫眞機を向けられる。

舟の上で一齊にふり向く。すぐ濟む。

「また温井里で御目にかゝりませう。」と、一行は舟に乗る。それが見る／＼遠くなる。

舟から上がつて、平たい岩の面で休む。岩の水に及ぶころに、貝類が多く附いてゐる。それを凝視すると、おひく／＼底の海藻が見え出す。波が靜まつて、午後の日は殆ど底までさし透す。昆布か若布か、根までも見える。と波が来る。光が細かく碎けて、藻は一齊に揺れる。白い腹を見せて、何の魚かその間を横になりつゝ、通り抜ける。また来る。また抜ける。

「ゆらく、つい／＼」がありますな。」と注意する。永井君の顔色がうれしさうに變る。

岩壁の間の入海は廣くはないが、景趣に變化がある。一昨日昨日と異なつて、優麗と瀟灑とを帯びてゐる。

岩壁の間を離れた舟は、更に沖の方へ出る。波がまた荒くなる。沖の白さは強くなつて、無数の白鳥が飛ぶやうである。舟の動搖が烈しい。

一つの島を舟は廻る。島は花崗岩の磊塊たる累積であつて、木も草もない。人を脅すやうに、碧浪の中に峙つて怪奇な顔を向けて居る。

「恐ろしい岩ですな。」といひつゝ、見上げる。ふと岩頭に立つたものがある。鶴である。二羽である。雄と雌とが、岩が高い

瀟灑 セウサイ。セウシヤ。さつぱりとして清らかなること。瀟灑。

磊塊 ライクワイ。石のかたまれる状。

ので、鶏の脚の殊に長いくらゐにしか見えない。

一羽は飛ぼうとするらしい。翼を擴げた。一羽は留つてゐたいらしい。應じようとしなない躊躇しつゝ、一羽は遂に飛ぶ。翩然として翼をかへして、岩の上の空を一廻りする。誘はうとするらしいが、まだ應ぜぬ。思ひ切つて高く上がる。さつと下つて、羽を緩やかに動かしながら、然しながら、速度は早く、はてもない波の上を飛んで行く。一羽は嘴を揚げた。高鳴きするらしい。呼返さうとするのか。波の音が高いので、何も聞えない。飛ぶものは遠く遠く行く。

蒼波に翼を染めていづこまで行くらむ鶴か大海のうへを

(尾上柴舟「行きつゝ、歌ひつゝ」)

尾上柴舟 名は八郎。文學博士。岡山縣に生まる。東京帝國大學の出身。現に東京女子高等師範學校教授たり。

一七 先生への通信

ヴェニスから

お寺の鳩に豆を買つて遣ることは、日本に限ることと思つて居ましたが、此處のサンマルコのお寺の前でも、同じことをやつて居ます。但し豆ではなくて、玉蜀黍を細長い圓錐形の紙袋につめたのを賣つて居ます。

大道で鍋を煮立たせて、茹章魚を賣つて居る男が居ました。

ヴェニスの町は朽ち汚れて居るが、それは美しく朽ち汚れて居るので、壁の剝がれたのも、乃至は窓からぶら下げた洗濯物までも、悉くいふにいはいはれぬ美しくくすんだ好い色

ヴェニス 伊太利北部、アドリア海に臨む港。
Venice
サンマルコ 西紀八三〇年に創建せる。St. Mark.

彩を示して居ます。霜枯れ時だのに美しい常磐木の緑と、青玉のやうな水の色とが古びた家の黄や赤や茶によく映ります。

ローマから

ローマへ来て累々たる廢墟の間を彷徨して居ます。今日は市街を離れて、アルバノの湖からロツカーデーパ、の方へ古い火山の跡を見に参りました。到る處の山腹にはオリヴの實が熟して、其の下には羊の群が遊んで居ます。山路で、大原女のやうに、頭の上へ枯枝と蝙蝠



ローマの廢墟

青玉 セイギョク。鋼玉の一種。青色透明なる寶石。

ローマ イタリアの首府。Rome.

アルバノの湖 ローマの東南約二十軒にある湖。

Albano.

ロツカーデーパ、アルバノ湖の東方約一軒。
Rocca di Papa.

オリヴ 橄欖樹。Olive.

大原女 京都府愛宕郡大原村邊の婦人の風俗。

幅傘を一緒に束ねたのを載つけて、靴下を編みながら歩いて来る女に會ひました。角の長い牛に材木車を牽かせて来るのもあれば、驢馬に炭俵を積んで来るのもありました。蜜柑の木もあれば、竹もあります。眼と髪の黒い女が水溜りのまはりに集つて洗濯をして居る傍には、雞が群れ遊び、豚が路傍で鳴いて居ます。ワチカンも一部見ましたが、此處の名物は旨い物ばかりのやうであります。

伯林から

今度の旅行中は天氣の悪い日が多くて、殊に瑞西では雨や霧のためにアルプスの雪も見えず、割合に詰りませんでした。それでもモンブランの氷河を見に行つた日は天氣が好くて面白うございました。寒暖計一本提げて、氣温を測つ

ワチカン ローマ法皇の宮殿。ローマ市にあり。
Vatican.

モンブラン アルプス山脈中の最高峰。佛伊兩國の境にあり。海拔四八二〇米。Mont Blanc.

たりして歩きました。鶴嘴のやうな杖をさげて、繩を肩に擔いだ案内者が、英語で案内者は入らぬかといふから、お前は英語を話すかとい訊く。いゝえ。といひました。迂らない用心に靴の上に靴下を穿いて、一人で氷河を渡りました。好い心持でした。氷河の向側はモーヴェーバーといふ嶮路で、高山植物が岩の間に花を綴り、處々に瀧がありました。此處から谷へおりる途中、小さな飲食店といつたやうな家の前を通つたら、後から一人追つかけて来て、お前は日本人ではないか。とい訊きますから、さうだ。と答へたら、私は英人でウェストンといふものだが、日本には八年間も居て、あらゆる高山へ登り、富士へは六回登つたことがある。と話しました。其の妻君は宿屋の前の草原で靴下を編んで居ました。

其處から谷底へおりて、シャモニの村まで歩きましたが、道端の牧場には、頸に鈴をつけた牛が放し飼にしてあつて、其の鈴の音が非常に音楽的に聞えました。又番人の子供や婆さんも本當に繪のやうで、愉快でした。日本にもあるやうな秋草が咲いて居たり、踏切番の小屋に菊が咲いて居たりして居ました。路傍のマリヤの御堂に花が供へてあるのも見ました。シャモニの町へはひる頃には、もう日が暮れかゝつて、眞紅な夕陽がブゾンの氷河の頂を染めた時は、實に綺麗でした。村の街には、名物の瑪瑙細工やら牛の角細工を並べた店ばかり連なつて、かういふ處にはお極りの活動寫眞が自動ピアノで客を呼んで居ました。(吉村冬彦「藪柑子」)

シャモニ 佛蘭西の東隅。
モンブラン山麓。Chamo-
nix.

マリヤ キリストの母。聖
母。Maria.

ブゾン モンブランの山中
にあり。Hoison.

ピアノ 洋琴。Piano.

一八 二百十日

「あの音は壯烈だな。」

「足の下が、もう揺れて居るやうだ。……おい、一寸地面へ耳をつけて聽いて見給へ。」

「ごんなだい。」

「非常な音だ。確に足の下が唸つてる。」

「其の割に烟が來ないな。」

「風の所爲だ。北風だから右へ吹きつけるんだ。」

「樹が多いから、方角が分らない。もう少し登つたら見當がつくだらう。」

しばらくは雜木林の間を行く。道幅は三尺に足らぬ。いく

ら仲が善くても、竝んで歩く譯には行かぬ。圭さんは大きな足を悠々と振つて、先へ行く。碌さんは小さな體軀をすぼめて、小股に後から跟いて行く。跟いて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心して居る。感心しながら歩いて行くこ



石 澈 目 夏

段々後れてしまふ。

路は左右に曲折して爪先上りだから、三十分も立たぬうちに、圭さんの影を見失つた。樹と樹の間をすかして見ても、何も見えぬ。山をおりる人は一人もない。上るものにも全く出會はない。たゞ處々に馬の足跡がある。たまに草鞋の切が茨にかゝつてゐる。其の外に、人の氣色は更に無い。饅餚腹の碌さんは少々心細くなつた。

昨日の澄切つた空に引換へて、今朝宿を立つ時からの霧模様には少し懸念もあつたが、晴れさへすればと、好い加減な事を頼みにして、さうく阿蘇の社までは漕附けた。白木の宮に禰宜の鳴らす拍手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空からほつりと何やら額に落ちた。饅餚を煮る湯氣が障子の破れから吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過ぎは雨かなとも思はれた。

雑木林を小半里ほど來たら、怪しい空がさうく、持切れなくなつたと見えて、梢に滴る雨の音が、さあさ北の方へ走る。後から、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻る木の葉と共に、又北の方へ走る。碌さんは首を縮めて、「ちえつ」と舌打をした。一時間ほどで林は盡きる。盡きるこいはうよりは、一度に

阿蘇の社 阿蘇神社をいふ。熊本縣阿蘇郡宮地町に在る官幣大社。神武天皇の御孫健甕龍命・阿蘇比咩命・速瓶玉命を祀る。禰宜 神社に奉仕して、神事を掌る人。

白木の宮

浴びて濡れながら靡く。

「なるほど。」

「困つたな、こりや。」

「なあに、大丈夫だ。ついそこだもの。あの烟の出る處を目當にして行けば、譯はない。」

「譯はなささうだが、これぢや路が分らないぜ。」

「だから、さつきから待つて居たのさ。こゝを左へ行くか、右へ行くかといふ、丁度股の處なんだ。」

「なるほど、兩方とも路になつてゐるね。……併し、烟の見當からいふと、左へ曲る方が好ささうだ。」

「君はさう思ふか。僕は右へ行く積りだ。」

「どうして。」

「どうしてつて、右の方には馬の足跡があるが、左の方には少しもない。」

「さうかい。」と、碌さんは身體を前に曲げながら、蔽ひかゝる草を押分けて、五六歩左の方へ進んだが、すぐに取つて返して、

「駄目のやうだ。足跡は一つも見當らない。」といつた。

「ないだらう。」

「そつちにはあるかい。」

「うん、たつた二つある。」

「二つぎりかい。」

「さうさ、たつた二つだ。そら此處と此處に。」と、圭さんは繻子張の蝙蝠傘の先で、かぶさる薄の下に、幽かに残る馬の足跡

を見せる。

「これだけかい。心細いな。」

「なに、大丈夫だ。」

「天佑ぢやないか。君の天佑はあてにならないこと夥しいよ。」

「なにこれが天佑さ。」と圭さんがいひ終らぬうちに、雨を捲いて颯とおろす一陣の風が、碌さんの麥稈帽を遠慮なく吹込めて、五六間先まで飛ばして行く。眼に餘る青草は、風を受けて一度に向うへ靡いて、見るうちに色が變ると思ふと、又靡き返して故の態に戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見給へ。」と、圭さんが幾重となく起伏する青い草の海を指す。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んぢまつた。」

「帽子が飛んだ？ いゝぢやないか、帽子が飛んだつて、取つて來るさ。取つて來てやらうか。」

圭さんは、いきなり、自分の帽子の上に蝙蝠傘を重しに置いて、颯と薄の中へ跳び込んだ。

「おい、此の見當か。」

「もう少し左だ。」

圭さんの身體は次第に青いものの中に、深くはまつて行く。しまひには首だけになつた。あとに残つた碌さんは、又心配になる。

「おうい、大丈夫か。」

「何だあ。」と、向うの首から聲が出る。

「大丈夫かよう。」の首が見えなくなつた。
やがて圭さんの首が見えなくなつた。

「おうい。」

鼻の先から出る黒煙は、鼠色の圓柱の各部が絶間なく蠕動を起しつゝある如く、むくく〜と捲上がつて半空から大氣の裡に溶込んで、碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然として首の消えた方角を見詰めて居る。

暫くすると、まるで見當の違つた半町ほど先に、圭さんの首が忽然と現れた。

「帽子はないぞう。」

「帽子は入らないよう。早く歸つてこようい。」

蠕動 センドウ。微動する
こわ。

「おい、何處へ飛ばしたんだい。」

「何處だか相談が纏らないうちに飛ばしちまつたんだ。帽子はいゝが、歩くのは厭になつたよ。」

「もう厭になつたのか。まだ歩かないぢやないか。」

「あの煙と、この雨を見ると、何だか物凄くつて、歩く元氣がなくなるね。」

「圭さんは坊主頭を振立てながら、薄の中を泳いで来る。今から駄々を捏ねちや仕方がない。」

「あのもく〜煙の出てるところは。」

「そのむく〜が氣味が悪いんだ。」

「冗談いぢやいけな。あの煙の側へ行くんだよ。さうして、あの中を覗き込むんだよ。」

「考へると全く餘計な事だね。さうして覗き込んだ上に、跳び込めば世話はない。」

「兎も角も歩かう。」

濛々と天地を鎖す秋雨を突抜いて、百里の底から沸騰る濃いものが渦を捲き渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立騰る。其の幾百噸の烟の分子が、悉く震動して爆發するかと思はるゝほどの音が、遠い、奥の方から、濃いものと共に頭の上へ躍り上がつて来る。

雨と風のなかに、毛蟲のやうな眉を攢めて、餘念もなく眺めて居た圭さんが、非常な落付いた調子で、

「雄大だらう、君。」といった。

「全く雄大だ。」と碌さんも眞面目で答へた。

「恐ろしいくらゐだ。」

暫く時をきつて、碌さんが附加へた言葉はこれである。

圭さんはのつそりと踵を廻らした。碌さんは默然として跟いて行く。空にあるものは、烟と雨と風と雲である。地にあるものは、青い薄と女郎花と處々にわびしく交る桔梗のみである。

二人は犛々として無人の境を行く。(夏目漱石「漱石全集」)

朝寒み白木の宮に詣でけり
灰に濡れて立つや薄と萩の中
行けど萩行けど薄の原廣し

(夏目漱石)

夏目漱石 名は金之助。文學者。江戸に生まる。東京帝國大學の出身。大正五年歿す。年五十。

一九 翼

私は小高い丘の上に立つてゐた。

澄切つた秋の夜の空は紫紺の色をたへて、無数の星がちら／＼光つてゐた。大空の半圓は遠く野の果てを限つて、ほの暗い野の面には、低く風が流れて行くのか、藪や枯草がかさ／＼鳴つてゐた。大空は胸をあらはして冷たい夜氣に慄へてゐるからだ。

私は丘の上の草の中へ腰をおろして、ぢつ／＼して居た。すう／＼と草の葉が擦合つて、下の野の方からは蟲の聲が聞えて來た。

月の昇る前の東の空には、淡青い光が漂つて、榎の樹の葉

の落ちた枝が、細い幾本もの指を伸ばして、その光を掴むやうにしてゐた。

何處か頭の上で、さあつさあつと空氣を切つて飛ぶ物音がする。はつ／＼と思つて私は頸をすくめて見上げた。はつ／＼見極められないが、薄黒い鳥の影が列をなして行くのが目にはひつた。さあつさあつと翼の音がする。空氣が揺れて顔へ頸へ冷たく當ると思つてゐる。心が妙に跳るやうで、胸の動悸が高く打ちだした。體軀中に波立つて血が廻る。どつきどつき鼓動する心臓の響き。さあつさあつと空氣を切る翼の音。それは、調子を合はせて鳴つてゐた。翼の音が少し遠くなり、微かになつて、その物音の中心が空を滑つて先へ先へ移つて行く。冷たい空氣は幾重に

も幾重にも輪を描いて波動を起し、その波動は次第に大きくなつて、丘の上にも、野の草の葉先の末にも及んで行く。蟲の聲はその波動につれて調子をこり、草の葉は同じく波立つて揺れた。黒い空氣の波の震動、私の心臓もその中に包まれてゆるく鼓動を立ててゐた。

ぼうつこ野は明るくなつた。森の影が長く黒く、黄枯れた草の上へ敷かれて、蟲は今日を醒したやうに争つて聲を立てた。

月が昇つたのだ。

私は月の方へ向かつて、胸へ深く光を吸込んだ。月の光の下に瓦の屋根の竝んでゐる都會が見え出して來た。いつもは騒がしい響の聞えてゐる都會が、その夜に限つて何の物

音も立てなかつた。たゞ黒く長く見えてゐるばかりで、燒跡か何かのやうだ。

淡青い光を空にひろげて、次第に月は昇つて來た。丘の下の野も一層廣く明るくなつて、草藪がほつり／＼立つてゐるのも見えた。慄へるやうな水溜りも見えた。光の波が今度は空にも地上にも漲り溢れてゐた。私の體軀の細い血管の中までもその波がくゞり入つて、體軀全體がすすきり透きこほりでもするやうな氣がする。

私は暫くぢつとして立つてゐた。

さあつさあつこまだ物音が空に聞えてゐた。私はまた、ばつこ思ふこ、動悸が強く打出した。何物かの襲來を受けたやうに、頭を仰向けたが、その物音の姿は見えない。が、前よりも

一層近くその音は聞えて來た。一層低く、私の體軀よりも一層低く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。私の體軀よりも一層低く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。私はその音の來る方へ鋭く視線を向けた。雁の群だ。十羽ばかりの雁が横に竝んで、緩く羽を搏たせながら翔つて行く。右の端にゐる一羽の鳥が他のものよりも少し先へ出て、時々頸を左右に動かして、頭を高く昂げて、勢好く舞つて行く。群鳥の背を滑つて視線が少し先の草原へ落ちると、そこには舞行く鳥の影が、草原の上を斜に流れて行くのが見える。野の果ての低い空には、大きな星が澄んだ光できら／＼してゐるのも見える。

大きな鳥の一隊の群、荒い羽搏き、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖ろしささ不思議さに

思はず聲を立てようとした。我が生が、形の異なつた羽を持ち翼を持つた我が生が、いま目の前を翔つて行く。周囲が暗くなつて、たゞ暗い音の波動だけが、空にも地にも充ちてゐるやうな氣がした。暫くたつた。見ると、雁の群はもう稍遠く隔つて、羽搏いてゐることも思はれない。たゞ薄黒いものだけが、空を流れて行くやうだ。光の波を搔亂し、音と光とが空に亂れて不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や人家の屋根に、奇妙な旋律を響かせて行くのだ。鳥の過ぎた後の野原は、またひっそりとして、月の光が枯草の根元までも、根元の土の小さな塊團にまでも射し込んで、大地の胸は冷たいその光を飽くまでも吸つてゐた。

(吉江喬松「若き自然」)

ついでし

吉江喬松 文學博士。長野縣に生まる。早稻田大學の出身。現に同大學教授にして文學部長たり。

二〇 廢れたる園

廢れたる園に踏入りたんほゝの、白きをふめば春たけにける

北原 白秋

何といふ上品な、美しい歌であらう。つゞきある庭園に踏入れば、そこらいつは、いたんほゝが咲亂れてゐた。その花を踏みつゝ立つてゐると、嗚呼もう春も暮れるのだといふ暮春の感じが油然として胸の底から湧上がつて來るといふのである。

例によつて言葉に一分のたるみもない。踏入れば「なごこいふ」のも決して不用意に使はれたものではない。單に「入り行き」なごこいふのでなく、「踏入り」とあるので、その時の作者

以下の短歌は皆北原白秋の作なり。

神話（これは）所定の讀みかた
（さき）に「なごこいふ」を
こゝに「踏入り」を添へた
（たゞ）

の心が何かしら思ひ昂つて、いら／＼してゐたらしく感ぜられる。白きをふめば春たけにける「こいふ」でもそのやゝ硬い古風ないひかたのなかに、いひ知れぬ緊張した、しいんとした氣持が含まれてゐるではないか。

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬ、もろこし畑の黄なる月の出

もろこし畑には、青い幹と葉を思ふさま生ひ伸ばして、あの植物が高々と茂り合つてゐる。夏の初めの靜かな夕方、その葉さきにはもう露でも宿りさうだ。折しも月はこの廣漠たる平原のはての低い空に漸く黄な色を鮮かにして照りそめようとしてゐる。そこに一人の少年が佇んでゐる。

ハモニカ 玩具に類する單純なる管樂器。 Harmonica

頭や兩眼のみ徒らに大きい、手足の細い、色の蒼い病兒である。晝間からたつた獨りで、しきりにほそく、こハモニカに吹き入つてゐたのであつたが、もう夜にならうとするのに一向氣もつかぬげに、なほしんみりと幼い單調な樂器を唇頭から離さうともしないといふ、絞景の歌、同じこでもたつぷりと新味が湛へて歌はれてゐる。

太葱の、一莖ごとに、蜻蛉ゐてなにか恐るゝあかき夕

暮

葱がさかんに生ひ伸びて、廣い畑はまるで箱庭の林のやうになつてゐる。その葱の青い穂さきに殆ど必ずのやうにそれごとく、蜻蛉がごまつてゐる。人もゐず風も吹かぬのに、何

蜻蛉 あきん

夕景をききしつて、
蜻蛉のしるしをうたへ

ものをか恐るゝごこく、ふい／＼と皆が互にその穂さきから舞立つては、また來て止る。赤い夕陽は今しもその畑に油のやうに濃密な光線を溢るゝばかりに投げてゐる。

青き果のかげに椅子よせ春の日を友と惜しめば薄

雲のゆく

木立の深い庭園に、青い果實をつけた一もこの樹があつた。そのかげに椅子をよせて、親しい友と共に言葉も少く暮れゆく春を惜しみかなしんでゐる。木の間に透いて薄い雲がしら／＼と盡きず／＼流れてゐる。

啄木鳥の木つゝきおへて去りし時黄なる夕日に音

啄木鳥 キツ、キ。攀木類に屬する鳥。多くは山里に棲み、嘴鋭く、舌は嘴より長くして、その先に逆鉤あり、嘴にて立木の皮を破りて、舌にてその中に居る蟲をさして食ふ。

を絶ちしとき

とある一瞬の印象が甚だ鮮かに歌はれてある。

大きな老木の幹の皮さへ朽ちかゝつたのに、一羽の啄木鳥が来て、しきりこそその木肌をつゝいてゐた。そしてもう十分にお腹も満ちたのか、或ははやその蟲を啄み盡くしたのか、ふいこそその幹から飛立つた。飛立ちながら一聲或は二聲、短く鋭い聲をふり立てて啼去つた。折しも其處ら老木の立竝んだ木立には、今しも沈まうとする夕日が一面に黄色く散りしいてゐたといふのである。

單に其の場の景色や出來事を、短くありのままに述べただけで、靜かだとも、寂しいとも、美しいともいつてゐないところに、却つてそれら色々の複雑した情趣が力強く浮かん

旅歌

で來てゐると思ふ。さういふ場合だけに少しも冗漫な口調を用ひてない。きつゝきの木つゝきおへて「といひ、去りし時」絶ちし時「といやに重複してゐるやうではあるが、うまく疊みかけていつてゐるので、却つて緊張を覚えしめてゐる。

草わかば、色鉛筆の赤き粉の、ちるが、いさしく寝て削るなり

萌えたつた若草の上に寝ころんで赤鉛筆を削りだした。ほろ／＼こそその柔かな草の上に散つてゆく赤い粉末のあまりにも美しいのに心を惹かれて、今はもうたゞそのためにのみせつせと鉛筆を削つてゐるといふ一首。

うつゝなく、その草に、その粉に心をこられて、ぢつとして

はあられないやうな氣持になつた時の作であらう。序詞のやうにしてこの歌の始に作者自ら、
草に寝ころべ
草に寝ころべ
としてゐる。

干葡萄ひさり摘みさりかみくだく食後のほごをおもひさびしむ

卓に獨り食事を終つた。たべることもなく摘みさつて干葡萄を噛碎いてゐる間に、故知らぬさびしさが早ひそとく身に萌えそめて來るといふ、若き日のさびしさを歌つたものであらう。

序詞 枕詞に似て、或歌を詠出さんがために前置として用ふる修飾の語。一句以上數句に及ぶ。

カステラ

カステラの黄なるやはらみ新しき味ひもよし春の暮れゆく
この作者は今まであまり他人の歌つてゐなかつた食物についてよく歌つてゐる。そして何れも新味に富んでゐる。新しいカステラ、やはらかなカステラ、うまい美しいカステラ、獨り、断つてはないが、そんな氣がする。しみじみ春の菓子を愛で味はつてゐる若者、うつさしむく春の暮れて行かうとする折からの季節、それらを噛みしめてこの一首を味はつてほしい。

いつしかに春の名残りなりにけり昆布干場のたん

カステラ 一種の菓子。葡萄牙語。もさ西班牙のカステリヤといふところにて製せしによりていふこいはる。

ほゝの花

或海邊にての作。

ぶら／＼と散歩の途か何かに、とある荒磯の昆布干場に行きあつた。ふと見るに、そこらに一つ二つたんほゝの花が咲いてゐた。おゝもういつかこれが春のなごりとなつたのかなあといふ意味であらう。單純な歌ではあるが、「桐の花」の中でもこれなどは最も私の愛誦する一首である。

昆布の採れる處といへば、どうせ荒磯である。その干場の砂の上か、岩の上か、いづれにせよとげ／＼しい荒砂か、眞黒な岩かを見ていゝであらう。其の時昆布が干してあつたか、どうかはとにかく、いづれ昆布のきれや貝がらがそこらに散亂してゐる處に相違ない。渚にはかなりな浪が斷えず碎

桐の花 北原白秋の歌集。

けて居り、霞みながらも沖の方には大きなうねりが動いてゐる。其處へぼんやりと立入つて見るに、これはまた思ひがけなく黄な花が砂をあびてそこに咲いてゐた。過去つた春を思ふ心に燃えてゐる眼に、その二三の可憐な花がほんごにこんな強く映つたことであらう。いや／＼、かういふくごい説明は不要として、何といふしんみりした、底さびしいこの一首の調子であることぞ！ (若山牧水「和歌講話」)

ひむがしの朝焼雲はわが庭の黍の葉すゑのつゆにうつれり (若山牧水)

幾山河越えさりゆかばさびしさのはてなむ國ぞけふも旅

ゆく

若山牧水 名は繁。歌人。宮崎縣に生まる。早稻田大學の出身。昭和三年歿す。年四十四。

二 雲のいろく

夜の雲

夏より秋にかけての夜、美しさ言ふばかりなき雲を見る
 ことあり。都會の人多くは心づかぬなるべし。舟に乗りて灘
 を行く折、天暗く水黒くして、月星の光も洩れず、舷を打つ浪
 のみ青白く騒ぎ立ちて心細く覺ゆる沖中に、夜は丑三つこ
 も想はるゝ頃、艙上に一人立ちて、海風の面を吹くがまゝ、衣
 袂濕りて重きをも問はず、寝られぬ旅の情を遣らんと、詩な
 ご吟ずる時、いなづま忽として起りて、水天一齊に凄じき色
 に明るくなり、千疊萬疊の濤の頭は白銀の簪したる如く輝
 き立つかと思れば、怪しき岩の如く、獸の如く、山の如く、鬼の

丑三つ 今の午前三時頃。
 丑の時の最初(丑一つ)は
 午前二時、丑二つは二時
 半、丑四つは三時半、寅
 一つは四時といふ順序な
 り。

如く空に峙ち蟠り居し雲の、皆黄金色の笹縁つけて、いと嚴
 かに人の眼を驚かしたる、言はんかたなく美し。

雨後の雲

雨後の雲の美しさは、山にてこそ見るべけれ。低き山に居
 たらんには、なほかひなかるべし。名ある山々をも眼の前脚
 の下に見るほどの山に在りて、夏の日の夕なご風少し有る
 時、谿にのぞみて遠近の雲の往來を觀る、いと興あり。前山の
 色の翠ひとしほ増して、裾野の風情も見處多く、一郭なせる
 山村の寺など、それかとも見ゆるに、濃く白き雲の足疾く風
 に乗りて空を翔くるが、自己の形をも、かつ龍の如く、かつ虎
 の如く、翻りたる布の如く、張りたる傘の如く、さまざまに變
 へつゝ、山を蝕み、裾野を被ひ、山村を呑みつ吐きつして、前な

笹縁 衣服その他のもの
 に、細く縁どりたるもの。

るは這ふやうに去るかと思れば、後なるは飛ぶ如くに來り
なんどする狀觀て飽くといふことを覺えず。小山の峰通り
に立てる松の竝木の遠見には馬の鬣のやうなるが、現れつ
隠れつする、金字形したる山の嶺の、心あてに見しあたりな
らぬ處に、突として面出す、殊に面白し。

蝶々雲

風吹く時、離れぬになりたる大きからぬ雲の色白き、或
は薄黒きが、蝶の如くひらく、風下へ舞ひつ飛びつして
行くあり、これを蝶々雲とは面白くも名づけたるものかな。

ゐのこ雲

蝶々雲は古き歌に見えたりや否や知らず。ゐのこ雲とい
へるは仲正の歌に見えたり。夏の夜、秋の夜など、雨もたぬ空

心あてに 村田春海の歌
に「心あてに見し白雲は
麓にて思はぬ空に晴る、
富士の嶺」

仲正 源賴綱の子。賴政の

の晴れたるに、一叢の雲の、冢の如く丸く肥えて見ゆるが、月
のあたり走り行くは、人々の知るどころなるが、これも亦風
情ある雲なり。

雲はらふ月の光に追ひにけり走り散りぬるゐのこ

雲かな

こ詠める歌は、面白しとも思へねど、ゐのこ雲といふ名を傳
へたる功は、この歌にあるべきにや。

雲のわざ

雲のするわざも多きが中に、いこ面白きは、冬の日の朝早
く平らかにわたれる雲の、谷を籠め、麓を蓋ひて、世の何物を
も山の上の人には見せぬことなり。日輪未だ出で給はず、月
落ち、星の光薄れながら、天なほ一しきり暗き頃、山高き處に

父に當る。兵庫頭たり。
保元の亂に黨し、京都七
條に死す。

雲はらふ 未木抄卷十九雜
一に見えたる 源仲正の
歌。

西雲海の景色

宿りたる身のよろづの物珍らしきに、例になく夙く起出でて、戸なごをも自ら繰り、心縮むるやうなる寒さを忍びて、眼を放つて見渡せば、昨日は脚の下に麓路の村も晝の如く小さく見え、川の流の白きが絲ほごに細くそれご知られ、深き谿を隔てて、かれこれご名ある山々の數多く連なり立ちたるが眼に入りしに、今は我が立てる處を去る幾許もあらぬ下より遙かに向うの方、際涯知らぬあたりまで平らかにして、大江の水の如くなる白雲、たな引き渡り、村も隠し、川も隠し、山々谿々も隠しはてて、下界を海の底に沈め盡くしたるが如くに見せたる、雲のわざごは知りながら、さすがに馴れぬ眼には驚かるゝものなり。(幸田露伴上譯言)

ま、い、い、の

幸田露伴 名は成行。文學博士。江戸に生まる。曾て京都帝國大學講師たり。

二二 荒城の月

荒城の月

春高樓の花の宴、
廻ぐる盃蔭さして、
千代の松が枝
分けいでし、
昔の光今いづこ。

幸田露伴

荒城の月

春高樓の花の宴

廻ぐる盃蔭さして

千代の松が枝

分けいでし

昔の光今いづこ

秋陣營の霜の色、
鳴きゆく雁の
數見せて、

うゝる劍に照りをひし、

荒城の月

二二 荒城の月

昔の光今いづこ。

今荒城の夜半の月、

かはらぬ光

誰がためぞ。

垣に残るはたゞ桂、

松に歌ふはたゞ嵐。

天上かげは

かはらねど、

榮枯は移る世の姿。

移さんごとか今もなほ、

あゝ荒城の夜半の月。

Handwritten notes in cursive script, likely commentary or a related poem.

Handwritten notes in cursive script, likely commentary or a related poem.

Handwritten vertical text, possibly a title or reference.

助 船

烈しき雨風天地暗く、

山なす荒浪猛り狂ふ。

見よく、かしこに

あはれ小舟、

生死の境と救もとむ。

救を求むる聲はすれど、

この風この波誰も行かず。

見よく、漕出づる

救ひ小舟、

健氣の男の子ら守れ神よ。

牛おふ童

夕日山にかくれたり。

野邊の花よいざさらば、

なれし小道今日も又

牛と共にいそがまし。

星は空に見えそめぬ。

いそげ牛よ、わが友よ。

森の木蔭くれはてて、

松のあらし身にぞしむ。

故郷を離るゝ歌

吉れ一風
にいそげ

園の小百合、撫子、垣根の千草、

今日は汝を眺むる終の日なり。

思へば涙膝を浸す。

さらば故郷、

さらば故郷、

さらば故郷、

故郷さらば。

土筆摘みし丘邊よ、社の森よ、

小鮒釣りし小川よ、柳の土手よ。

別るゝ吾をあはれと見よ。

さらば故郷、

さらば故郷、
さらば故郷、
故郷さらば。

此處に立ちてさらばと別を告げん。

山の蔭の故郷靜かに眠れ。

夕日は落ちて黄昏たり。

さらば故郷、

さらば故郷、

さらば故郷、

故郷さらば。

(小學唱歌)

〔標註〕小學校小歌

二三 箱根路

國府津・小田原は一所懸命にかけぬけて、はや箱根路へか
かれば、何もなく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮
れながら、谷川の音耳を洗うて、烟霧模糊の間に、白露光あり。

白露の中にほつかり夜の山

湯本に辿り著けば、一人のをのこ袖をひかへて、いざ給へ、
善き宿まゐらせんといふ引かるゝまゝに行けば、いこむさ
くろしき家なり。前日來の病もまだ全くは癒えぬに、此の旅
亭に一夜の寒氣を受けんこゝ氣遣はしく、やゝ落膽したる
が、まゝよ、これこそ風流のはじめ、行脚の眞面目なれ。
だまされてわるい宿さる夜寒かな

國府津・小田原 神奈川縣
足柄下郡の町。

行脚 アンギヤ(宋音)。徒
歩にて諸方を遊歴するこ
こ。

湯本 足柄下郡の町。

次の日まだき起出でつ。板屋根の上の滴るばかりに沾ひたるは、昨夜の雲のやごりにやあらん。よもすがら雨と聞きしも、笈の音、谷川の響なりしものを、はや山深き心地ぞすなる。けふは一天晴渡りて、瀧の水朝日にきらつくに、鶺鴒の小岩づたひに飛びありくは、逃ぐるにやあらん、はたこなたへこしるべするにやあらん、草鞋のはこび自ら軽らかに、箱根街道のぼり行けば、鶺鴒の聲左右にかしましく、

我がなりを見かけて鶺鴒の啼くらしき

秋の雲瀧をはなれて山の

病みつかれたる身の、一足のぼりては一息ほつとつき、一阪のぼりては巖端に尻をやすむ。駕籠昇の頻りに駕籠をすすむるを耳にもかけず、

鶺鴒 燕雀類に屬する小鳥。燕に似て色は灰味を帯び、腹部は白く、頸の下に黒き筋あり。

鶺鴒 燕雀類に屬する鳥。體長二十釐餘。尾長く頭上の羽毛亂れたち、全體黒褐色にして、腹部は赤褐色を呈す。

山路の菊野菊もまた違ひけり
と吟じつゝ、行けば、

どつさり山駕籠おろす野菊かな

石原に瘦せて倒るゝ野菊かな

なごおのづから口に浮かみて、はや二子山鼻先に近し。谷に臨めるかたばかりの茶屋に腰掛ければ、秋に枯れたる婆様の挨拶、何となく物寂びて面白く覺ゆ。見あぐれば千仞の谷間より木を負うており來る樵夫二人三人のそりくゝ、こものもえ言はで、汗を滴らすさま、いさあはれなり。

樵夫二人だまつて霧をあらはるゝ

樵夫も馬子も皆足を茶屋にやすむれば、それぐゝにいたはる婆様のなさけ、一碗の澁茶よりも猶濃し。

二子山 双兒山とも書く。箱根中央火山の東南端なる峰にして、双峰相並ぶ。海拔一〇九〇米。

犬蓼の花喰ふ馬や茶の煙
店先の柿の實つゝく烏かな

名物ありやと問へば、力餅といふものなりとて、大きな餅の焼きたるを、二つ三つ盆に盛り來る。

山姥の力餅賣る薄かな
など戯れつゝ、力餅の力を借りて登ること一里餘、杉樅の大木道を夾み、元箱根の一村目の下に見えて、秋さびたるけしき仙源に入りたるが如し。

紅葉する木立もなしに山深し

千里の山嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏みくだきて登り著きたる山の頂に、鏡を磨ぎ出だせる蘆の湖を見そめし時の心ひろさよ。餘りの絶景に、恍惚として立ちもえ去らず、木のく

大蓼 蓼の一種。野生にして形は小さく、食用に供すべからず。

元箱根 モトハコネ。神奈川県足柄下郡元箱根村。

くひぜ 杓。切株。

ひぜに坐して、つくづく見れば、山更にしんくくとして、風吹かねども、冷氣冬の如く足もこよりのぼりて、腦天にしみ渡るこゝちなり、波の上に飛びかふ鶺鴒は忽ち來り、忽ち去る。秋風に吹きなやまされて、力なく水にすれつあがりつ、胡蝶のひらくゝと舞出でたる、箱根の頂も知らずてや、いこ心づよし。遙かの空に白雲このみ見つるが上に、兀然として現れ出でたる富士、こゝからも猶三千仞はあるべしと思ふに、更に其の影を幾許の深さに沈めて、さゞ波にちゞめ寄せられたる、またなくをかし。

箱根驛にて午餉したゝむるに、皿の上に尺にも近かるべき魚一尾あり。主人誇りかに、こは湖水の産にして、こゝの名物なりといふ。名を問へば、赤腹となん答へける。面白き魚の

箱根驛 神奈川県足柄下郡箱根町。

赤腹、うぐひの俗稱。うぐひ(石斑魚)は喉鱈類に屬

名なりけり。これより山を下るに、見渡すかぎり皆薄なり。箱根の關はいづちなりけんと思ふものから、問ふに人なく、探るに跡なし。これらや歌人の歌枕なるべきこと、

關守の招くやそれこ來

て見れば尾花が末に風

わたるなり

薄の匂を得たり。

大方はすゝきなりけり

山の上

伊豆相模境もわかず花すゝき



昔の箱根路

する淡水産の魚。箱根の關、今箱根町の東方にあたりてその址あり。

歌枕 古來、歌の中に詠みこまれたる名所。

二十餘年前までは金紋さき箱の行列整々として、鳥毛片鎌など威勢よく振立て、行きかひし街道の繁昌も、あはれ物の本にのみ残りて、草刈るわらべの小道一筋を除きて、外は草の生ひ出でぬ處もなく、僅に行列のおもかげを薄の穂にこゝめたり。

槍立てて通る人なし花薄 (正岡子規「子規全集」)

われ浮世の旅の首途してよりこゝに二十五年、南海の故郷をさまよひ出でしよりこゝに十年、東都の假住居を見捨てしよりこゝに十日、身は今旅の旅に在りながら、風雲の念猶已み難く、頻りに道祖神にさわがされて、霖雨の晴間を窺ひ、草鞋よ脚絆よと身を繕ひつゝ、一個の袱包を浮世のかたみに擔うて、颯然と大磯の客舎を出でたる後は、天下は股の下、杖一本が命なり。(正岡子規)

二十餘年前 此の文を書きたるは明治二十二年なり。

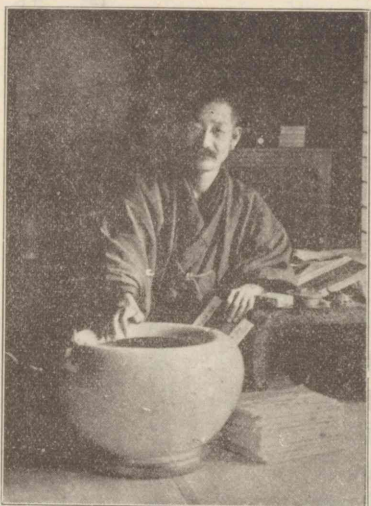
金紋さき箱 金の定紋をつけたる先箱。先箱は諸大名などの行列の先頭に正服を納れて擔はじめたる挾箱。

鳥毛 鳥の毛をつけて飾したる槍の鞘。片鎌 槍の身の一方にのみ枝のあるもの。

正岡子規 名は常規。俳人、歌人。松山の人。東京帝國大學に學ぶ。明治三十五年歿す。年三十六。

二四 田園雜興

みづから世を避けて門を鎖すこにはあらねど、片田舎に



住めば、來り訪ふものお
大のづから稀なり。東京の
町 西郊、花園神社の傍、市街
桂を離れて一字の茅屋建
月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
てり。屋外凡そ千坪前に
葡萄棚あり、後に竹林あ

り。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、
その間に簇生す。四顧たゞ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、
何となくわが心に適する處なり。

花園神社 東京市四谷區三
光町にある郷社。

環堵 家の周圍を廻らす
垣。

われ生來病軀を抱けり。わが志を伸ばさんには、まづわが
體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街
上の塵埃到りおよばず。啻にわが心に適するのみならず、ま
たわが體に適するを以て、居をこゝに定めぬ。都門より歸り
來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒跳び來りてわが手
の風呂敷包に取りすがる。例として土産の菓子あらんこと
を期するなり。ざるにても、わが志業未だ緒に就かざるに、早
くも三人の子の父となりぬること恥づかしけれ。

蒸しあつき夏の夕、涼臺を無花果樹下に移して、一家晚餐
に團欒すれば、竹葉をよぎて涼氣自ら盤上に迸る。一鉢の飯、
母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分ち。いま一つ、
一匹の犬いつも食時をたがへず來りてかしこまる。これ近

隣の家に飼へるものなり。その主人、近頃妻子を殘して病死せり。喪家の狗の警思ひ出されてあはれなるまゝに、殘肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨、魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、たゞ鼻先にて嗅ぎたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

喪家の狗 新たに死人ありし家の犬。孔子家語に、「鬻然若喪家之狗。」

一泓の池水、二間四方に足らざるばかりなれど、清水涌出でて、流れて田に注ぐ。もとは朽木、中に満ちて、蛙や蝶蝮の棲處となり、岸には雜草おひ茂りて見るかげもなかりしが、草を刈り、朽木を取りのけ、蝶蝮を捕へ出すこと七八十に及び、水はじめ澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、蛙蝶蝮のみと思ひの外、長さ一尺ばかりの鯉魚ありて泳ぎめぐり、人の足音聞きては穴深く潜みゆく。大兒と中兒とこ

一泓 泓は水清き貌。又水深き貌。

れを見て興がり、今少し鯉を入れよと言ふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黒や、碧水に一種の模様を描き、或は集り、或は散じ、時には水面に唵喁し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋の上に立ちて、これを眺め、これに餌をやること、兒にこりてはこの上もなき慰みなり。

唵喁 魚の水面に浮かびてばくくさ呼吸すること。

おぼつかなげに、こゝこゝと呼びて、雞に餌を與ふること、も亦小兒が慰みの一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで來り集り、先を争うて食ふ。雄三羽、雌七羽あり、種類も一ならず。就中、鬪雞の雌一羽、最も慄悍なり。餌を食ふること最も甚しく、近寄るものの頭を嘴にてつゝくさま、如何にも憎さげにて、他の雞恐れて敢へて近寄らず。されど最

も大にして好き卵を産むはこの鬪雞なり。
 われ平生物累ひなきことを期す。身には惜しき物を帶び
 ず、家にも惜しき物を置かず。身邊の物品、すべて用を便ずる
 を以て足れりとす。一室の中、粗末なる机と書物との外には、
 又他の物なし。雞、遠慮なくも座に上がり來り、机上に立ちて
 鳴くことあり。護謨靴はきて庭に遊べる小兒、いつの間、や
 ら靴のまゝ上がり來ることもあり。されど、雞上がらば逐ふ
 べきものご心得て、おのれは靴のまゝ上がり居りながら、兩
 手ひろげて雞を逐出すもいごあごけなし。末の兒は未だろ
 く、口もきかれぬばかりの年頃なり。母の乳に飽けば、をり
 をりわが机邊に來る。われ坐すれば兒も坐し、われ横になれ
 ば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執

れば兒も筆を執る。あまりにおこなしき、不圖心づきて見
 れば、折角わが書きたる原稿を塗抹せることあり。
 夕闇の端居に、裏の田より竹林を越して、二つ三つの螢飛
 來るを見て、あれ捕へてよと兒の請ふまゝに、これを捕ふれ
 ば、蜀を望むのならばし、田に行きて多く捕へてよと請ふ。田
 に行けば螢多し。忽ちの間に數十匹捕へつ。俄作りの螢籠に
 入れて打興じたる兒等も、やがて蚊帳の中に入り、枕邊の螢
 光いよ／＼涼し。

園中、兒を喜ばしむるものは梅の實なり、葡萄なり、柿なり、
 栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。此
 等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見ればたゞ嬉しきなり。慾も
 なし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、始はその愛

蜀を望む 食りて足ること
 を知らざるの喩。後漢書
 に、「人苦無足、既得
 隴望蜀。」

すべきを覚え、終にその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等かの神異の潜めるが如く思はる。而して、小兒は人類の中に最も自然に近きものなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、ものあはれは自ら知らるべくや。

樂しきわが團欒にも、なほ一朵の愁雲たなびく。そはわが胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、われと相住むことも前後僅に十餘年に過ぎず。末年、われと相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日和の如きか。然るに、わが病弱の身は、その小春日和をさへ時雨の空に變ぜしめんことす。母は常にわが病身なるを氣づかひ、わが食少きを心配す。さればこそ、親を思ふ心にまさる親心と詠じけめ。世に子の病ばかり親の心を痛ましむるものなし。

子を持つて、俚諺に、「子を持つて知る親の恩。」

古稀 七十歳をいふ。苦楚 艱難すること。

親を思ふ心に 吉田松陰の歌に、「親を思ふ心にまさる親心今日のおまつれ何ぞ聞くらむ」

罪深きかな、抑、不幸の子なるかな。昔は廉頗老いてなほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名ゆゑ、われは親ゆゑに強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし晝食さへものするに到りぬ。食進むやうになりて嬉しめて、母の喜ぶさまを見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。

(大町桂月「桂月全集」)

いで湯わく、鳶のやまみちさよふけて月のみわたる猿の空橋 (大町桂月)

一里來て追ひてやうやくわかれけり半年慣れし湯の宿の犬

廉頗 レンバ。趙の名将。史記に、「一飯斗米、肉十斤、被甲上馬、以示尚可用。」

大町桂月 名は芳衛。文學者。高知縣の人。東京帝國大學の出身。大正十四年歿す。年五十七。

二五 萩の家

萩の家

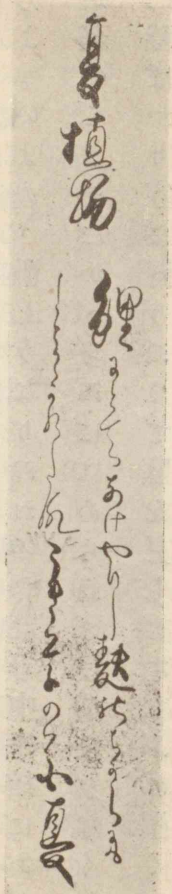
おのが庭に一もこの萩あり。秋ごとにその色いと深く、枝なごの茂れるさま、いみじううるはし。朝に起きてそを眺め、夕にたち出でてそれにうち向かひたる心地、譬ふべきものなし。おのれ家の名を萩の家と呼べるも、この萩のためのみ。他にまた何の心かあらん。一年飯田町に住みけるに、枝いたく生ひ茂りて、花もや、ほころびそめたり。明日明後日は咲きの盛りならんといひあへりしに、俄に野分の風吹きたちぬ。雨さへ降り添はりぬ。おのれは妹を語らひ、共に庭におり立ちて、そを防ぎぬ。竹もてこ。その戸はづせ。なご、うちごよめ

飯田町 東京市麴町區。

野分の風 ノワキのカセ。
野の草を分きて吹く風の義。秋冬の際に吹く荒き風。

きたるその聲、今なほ耳にあり。その後ほごなく、妹は世に亡き人となれり。

定めなき旅のならひ、家を移すこゝ、一年に二たび三たびは常のこゝなり。佐土原町・拂方町・大門町など、幾度か移りた



蹟筆文直合落

り。されごその萩ははなたず。今の掃除町の庭にあるも、やがてその萩なり。その萩は秋ごとに花咲けり。その花、その色は舊時に變ることなし。たゞその萩にうち向かふおのが心は、舊時にくらぶれば、いたく異なれり。そは妹のこの世にありしほごは、萩の花はおのが心を喜ばしめしに、妹の亡せにし

佐土原町・拂方町 東京市牛込區。
大門町 同市小石川區。

夏植物
鯉にさてなげやり、萩のちからにもたちわかれたるうき草の花 直文ノ

掃除町 小石川區。今は八千代町といふ。

後は、おのが心を悲しましむるが如し、さきの萩も今の萩も
變りあるか。いかでかその萩に變りあらん。さては喜ばしこ
いひ、悲しこいふは皆わが心からなん。

九月三十日、午前九時ごろより、空のけしきたゞならずこ
思ひしに、雨降出で、風吹來りて、その勢おごろくしく、晝つ
方より、いよく、激しうなりぬ。おのれ高等中學校にありし
が、萩のこころ心にかゝらぬにはあらねど、授業ひまなく、午後
二時ばかり家に歸りぬ。さて庭を見しに、垣たふれ、壁くづれ、
例の萩なご目もあてられず。あはれ妹の世にありし頃は、風
も防ぎ雨も防ぎてありしに、けふかくはかなくなしたるは、
げに口惜しきかぎりなりて、その夜は寝もやらず。さはい
へ風に吹折られたりて、その萩の幾部分は、必ずうるはし

高等中學校 今の第一高等
學校。

う咲くならん。また今年の秋は咲かずとも、また來ん秋は必
ず咲くならん。たゞ悲しきはかの歸らぬ人の上にこそ。次の
日、この文を書きてありしに、例の下枝のあたり、朝露こぼれ
たり。萩もまた心なきにはあらざらん。

綠蔭垂釣

一の宮川といふは、一の宮の北の方を流るゝ水なり。おの
れこの夏は、暑さをそのほごりに避けたり。寒村のならひ、見
るべきものなければ、聞くべきものなし。朝夕たゞその川
に出でて、釣を垂るゝを樂しみさせり。はじめの日は鮒一つ
と、鮒二つを獲たり。その獲物いこ少かりければ、宿の翁は
いたく笑へり。次の日もまた行きしが、こたびは鮒一つ獲た
るのみ。また翁のために笑はれたり。はや釣はやめんとも思

一の宮 千葉縣長生郡の
町。

ひしかど、あまりの口惜しさに、また明くる日も出で行きぬ。単衣一枚に兵兒帶をしめ、尻をからげ、編笠を被り、片手に菴アサをさげ、片手に竿を持てるさま、われながらあやしげなり。川のかなたの岸づたひに、村のものごもの通ふ道あり。そのなかほごに老いたる柳一もご茂れり。いと涼しげなれば、今日もその蔭に座を占めたり。今日はあまた釣り得て、かの翁を驚かしてんご、まづ鉤を投入れたるに、ほごなく鮒かゝれり。また投入れたるに、またかゝれるなご、僅に二時間ばかりの中に、八尾まで釣り得たり。ごかくするほごに、堤の上に人の聲す。顧みれば乳母ごおぼしきものが、三四歳ばかりなる、愛らしき小兒を伴なへるなり。小兒のすがた、乳母のこごば、このあたりのものごも思はれず。しばし堤の上に立ちて見て

ありしが、かの小兒は乳母ご共におりきて、わが菴の中をのぞきぬ。鮒よ鮒よごいひて、そこを離れざるは欲しきなめり。乳母は頻りに歸らんごすゝむれご聞かず。乳母はよその叔父君のなれば、思ひごまり給へごいふに、聞かざるのみならず、はては泣きいだしぬ。おのれ小兒に向かひ、わ子はこの鮒の欲しきにやごいへば、さなりごうなづく。さらば與ふべしごて、柳の枝を折り、それにこの鮒八尾を貫きて贈りしに、乳母は厚く禮を述べ、小兒もいと喜ばしげに、この鮒を手にごさげてもご來し方へご行きぬ。あはれ翁を驚かしてんご釣りたる鮒は、かの愛らしき小兒に悉く取られたり。今日もまた歸り來て、翁の笑を受くべけれど、今はたいかにせん。

〔落合直文〕落合直文集

落合直文 國文學者。舊姓鮎貝氏。陸前の人。帝國大學古典科の出身。第一高等學校教授たり。明治三十六年歿す。年四十三。

二六 丘の上

小松と薄と、矮い灌木の藪との續いてゐる丘の上へ來て、私はその藪の茂みの中に身を置いた。

丘は幾つかの巒をなして、背後に繞る連嶺の中軸から分れて、平野の上へ迫つてゐる。その巒と巒との間には小さな幾つかの谿が出來てゐて、その中には、蒼黒い藪疊の下をくぐつて行く小流や、急な傾斜をした桑畑や、小松の原や、焼痕の草原などが續いてゐて、農夫の作小屋の一つ二つが目にはひる。一つの丘の上へ來て見ると、谿を隔てて幾つかの丘の頂が脊比べでもしてゐるやうに立つてゐる。

八月下旬の日の光が、眞晝頃のこゝで、焙りつけるくらゐ

に暑さうだが、その光を亂して、折々谿の中から冷たい大氣の流が、ひそかに肌膚へ忍びよる。

縁の狭い帽子は顔へ當る日の光を遮るけれど、背から肩から胸からかけて、一面容赦なく照附けるのをそのまゝに、私は藪の中へ足を投出して、ちつと身を縮め、胸を抑へて、心臓の鼓動の靜まるのを待った。

耳もこ近くで、すういゝと薄の葉が擦れあつて、微かな音を立ててゐる。藪の根本で、何處かで蟲の聲が時々起つて、また細く消えて行く。

俯向いてゐる頸元から、日がぢり／＼喰入つて、痛いくらいにも思はれるけれど、その光が私の皮膚の細かな毛穴の一つ／＼から奥深く射し込んで行くのではないかと思ふ

と、疲れて濁つた私の血は、それがために鮮かな紅にかはつて勢よく運行し出すやうに思はれる。寧ろ胸を開いて、この光を胸臆へ吸込みたい。兩手を開いてこの光を抱きたい。たぎり落つる日の光の力を、血管の中へ呼入れたい。明るい光が體の中を照らしたらば、ぼろ紙のやうな私の皮膚には弾力が増して來はしまいか。生々とした活力が欲しい。爽かな山地の空氣と日光とは、疲勞した私をまた生かしてくれるのではあるまいか。

ごう／＼といふものの響が、ふと私の背後に起つた。消えるでもなく始るでもなく、空中にたゆたつてゐる。振返つて見ると、それは赤松の林だ。樹上に高く風がからんで吹去らない。薄紅の鱗をつけたやうな松の樹幹が、幾本

たゆたふ ためらふ。躊躇す。

も眞直ぐに立つてゐて、頭だけを動かしてゐる。日は上からその葉の茂みを洩れて、地上に縞を織る。樹の根を繞つて、薄紫の草花が微かに咲いてゐる。ごう／＼と互つて來る風につれて、微かではあるが松の香が漂ふ。眞晝の日の光を受けて、樹幹から洩れる松脂の匂——山地の健康を思はせるその香が空中に漂つてゐる。

平原地の林の中を、いかにさまよひ求めても聞くことが出來ない幽久の響、松の樹の、この單純林の奏する樂の音の中には、遠い昔からの山地の歴史が織込まれてゐる。一簇の老樹の林のある中には、必ずいくつかの古墳がある。苔のさびた匂と松脂の香とは一つになつて、その風の中に漂つてゐる。

單純林 その森林を構成する樹木の種類が單一なるものの稱。

細長い薄の葉と鼠さしの細かい針のやうな葉とが入亂れて、影を私の手の上へ落して、折々揺れてゐる。私は自分の手の上へ描き出されたこの微細畫を壊すまいと、ぢつと其の影の亂れつ寄りつするのを見つめてゐた。じつ／＼と思ひ出したやうに、蟲がまた薄の根元で鳴きだす。冷たい風が藪の中を爬ふやうに寄せて來る。

ふと藪の中から顔を上げて向うを見渡した。谿を隔てて桑畑が稻田と同じ綠色をしながらも、濃淡のけぢめをつけて近く輝いてゐる。その中に鎮守の森と地主の家の森とが島のやうに點在してゐる。——見渡しのきく野は四五里を隔てて、そのさきに、國境の連嶺が鐵壁のやうに空を劃して立ちつゞいてゐる。

鼠さし 杜松(むろ)の一名。松杉科に屬する常綠喬木。高さ十數米に達す。葉は針狀にして鋭く尖れり。

穂高の群峯が、他よりも秀でて連嶺の上に高く聳えてゐる。鋼鐵でも張つたやうな八月空を突裂いて立つてゐる連峯、その峯の間に消え残る雪の條は白く閃いてゐて、中空に反射してゐる。それより北に續いて幾多の連山、果てなき山の深さを見せて遠く走つてゐる。幾度見ても目醒めんばかりの山の姿だ。亂れた志を靜め、動ずることなき深さを胸に据著けてくれる。山と空とを劃する、力の籠つた、併しなだらかな微妙な一線、それをぢつと見つめてゐると、斷えず一種の微動がそこから起つて、四方へ散るやうに思はれる。その波動は雲無き空の碧綠を動かして、私の居る頭の上まで反んで來るやうに思はれる。日の光と物の響と、そしてこの音なき山頂の波動とは、一つの混成した旋律^{リズム}をなして、山地の

穂高 松本市の西方、長野・岐阜兩縣界に聳つ山。前穂高嶽三〇九〇米を始めとして、奥穂高・西穂高・唐澤・北穂高等の諸峯に分たる。

旋律 調子・韻律・律などの意。

晝に爽かな生々とした調子を與へてゐる。

私の身内の血は、今こそ順潮に動いてゐるぞといふやうな感じが、強く胸をめぐる。はつきりした明るい心持、生々とした感じが五體を引締める。

びいつく／＼と鋭い啼聲を立てて渡鳥の一群が、丘の出鼻の櫟林の一角から、下の平らな桑畑の上を横切つて、向うの丘の上の一端へ消えて行つた。幾千羽群れて行く小鳥の羽は、光の波を翻し、煽り立て、光と蔭とを隈ごつて、われ遅れじと争つて舞つて行く。はつと高く丘の上を乗越えたかと思ふと、もうその群の姿は向うへ見えなくなつた。鴨の一群だ。蒔いたばかりの大根の種子をあさり、出初めたばかりの粟の穂を求めて歩く旅鳥の群だ。身を隠す林があれば、忙はし

げにその中へむぐり込み、畑の獲物を見付ける。競つて舞ひおりの漂泊者の群集だ。光の中にくゞり入つてゐる冷たい大氣の流動に促されて、惶しい姿をして、彼等は丘を越え畑をあさつて舞つて行く。

頭上の松の響も、谿の中の流の音も、藪疊の上を走る冷たい風も、次第に高くなつて來た。靜かな山地の眞晝は今一時、秋來る前に、その鮮かな働を見せてゐるのだ。

私はいつまでもいつまでも、丘の頂に身を埋めてゐた。

(吉江喬松「若き自然」)

我々の生活を取りまいて、不斷の暗黙の生を營んでゐるのが自然である。我々が感ずると感ぜざるとに論なく、自然は常に我々の生活に交渉して來る。(吉江喬松)

二七 茶話三題

一

マアクトエンといへば米國切つての滑稽作家で、この人の著作は、日本では學校の教科書にも使はれて居るし、また翻譯もかなり澤山出來てゐる。この滑稽作家が、或時政治家のデピユウ氏と同じ船に乗つて英國へ渡つたことがあつた。デピユウ氏は一八六六年頃駐日公使として日本にも來た。ここのある人で、紐育埠頭の自由の像の除幕式には、わざわざ選ばれてすばらしい演説をした。ここもあるし、また自分の演説集をも出版してゐるし、お喋りの多い米國の政治家仲間でも、演説のうまいので聞えた男である。こ

マアクトエン 米國の滑稽小説家（一八三五—一九一〇年）Mark Twain.

デピユウ 米國の政治家。Depew.

の二人の評判男が乗合はせてゐるといふことは、船出の初からお客達の噂になつてゐたが、船が海へ乗出して二三日するに、誰が言出したものか、この二人を招いて一つ、お話でも承らうぢやないかといふ相談が持上がった。會はずぐに開かれた。滑稽作家と雄辯な政治家とは主賓として招かれた。主人側の肝煎役が言葉丁寧二人の卓上演説を促すに、マアクトエンはやをら起ち上がつて、持前の皮肉や諧謔やを取りまぜて二十分ばかり喋つた。演説はすばらしい出來だつた。皆は手を拍つて笑ひ崩れた。そして口にくそ出さないが、こんな感興の後では、デピユウ氏のやうな場慣れた演説家でも、さぞやりにくいに相違あるまいと思つた。デピユウ氏は起ち上がった。

「御主人役を初め淑女紳士諸君、……」この名代の演説家は落著き拂つた態度で口を開いた。今日お招きにあづかつてこの席に参りまする少し前、私とマアクトエン君とは、一つお互に演説の取換へつこをしてみようぢやないかと申し合せを致しました。只今マアクトエン君が申し上げましたのが、紛れもない私の演説でございますが、それに對して皆様から過分な御拍手をいたゞいて、私身に餘る光榮だと存じて居ります。さてこれからお聴きに達しまするのが、實は名譽ある文學者マアクトエン君の演説なのでございます。

かう言つて、デピエウ氏は演説の草稿を取出さうとするらしく、ポケットへ手をやつたが、急にあわてたやうな素振

を見せた。

「甚だ粗忽千萬な次第で申し上げにくいわけで御座います。實はマアクトエン氏から戴いてゐた演説の草稿を、この隠しに入れたまゝ、つい紛失してしまひましたので、この場合何一つ申し上げることの出来ないのは、皆様に對して、また友人に對して、甚だ申譯のないことで御座います。」

かう結んで、この雄辯家は腰をおろした。皆は一度にぞつと笑ひ崩れた。この滑稽作家は、その場の模様を見て呆氣に取られて、目をばはちくりさせてゐた。

次の日マアクトエン氏が甲板を歩いてゐると、一人の英國人がつか／＼と近寄つて來た。

その人は昨夜の席で、一番大きな聲で噴飯してゐた男だ

つた。

「先生、昨夜はお氣の毒でしたな。」

その男はこの滑稽作家をいたはるやうに言つた。ですが評判と事實とは違ふもので、私はあのデピユウさんがえらい雄辯家だとはかね／＼聞いてゐましたが、先生のなすつたあの人の演説を聞いて、すつかり失望してしまひました。奴さん、よつほごこゝが悪いやうですね。」

かう言つて、その英國人は太い指で自分の頭を指して見せた。それを見てマアクトエンは厭世家のやうに悲しうな顔をした。そして又しても眼ばかりはちくりさせてゐた。

二

先般の歐洲戦争で、聯合軍側の大立者は、何といつても英

國首相ロイド・ジョージ氏を第一に推さなければならぬ。その大立者のロイド・ジョージ氏が威爾斯生れの身長の低い、やつと五尺そこ／＼の小男だとは、知らぬ人が多い。

或年の春、ロイド・ジョージ氏が南威爾斯のある都市へ演説に出掛けた事があつた。無論戦争に關する演説で、自惚好きな英國人が、首相の口から直接、獨逸文明の、安物の外套のやうに、裏は襤褸の片であることを聽くための催しであつた。

その演説會の司會者といふのは、大のロイド・ジョージ崇拜者で、この政治家の試みた演説は、どんな詰らぬものでも、みんな新聞を切抜いて手文庫へしまつて置くといふ風の男であつた。だが、これまでに一度も自分の崇拜する人に出會

ロイド・ジョージ 英國の政治家。(一八六三年) Lloyd George, 威爾斯 英國の西部の稱。 Wales.

つた事がなかつたので、其の日は朝から胸をわく／＼させて待つてゐた。

会場には聴衆がぎつしり詰つてゐた。當日の演説家を案内して、会場へ入つて來た脊の高い司會者は、先づ起つて、この名高い政治家を聴衆に紹介したが、其の中に次のやうな言葉があつた。

「私はふだんから此の偉人を崇拜して居りましたが、正直に申しますと、身體のもつと大きい、見掛の堂々たるお方ださばかし思つてゐましたので、今日初めてお目にかゝつて、實は驚いたやうな始末で、……」

次いで起つたロイド・ジョージ氏は、小さいが、併し胡桃のやうなかつちりした體軀を演壇に運んだ。

「只今承りますと、今日の司會者は、私にお會ひになつて、甚だ失望せられたやうな御容子で、誠にお氣の毒に堪へません。」首相は脊高の司會者の方へ皮肉な目つきを投げた。

「だが、今承つて始めて氣づいたのは、我々の生まれた北威爾斯と此方では、人間を測るのに標準が異なつてゐるさ。いふことで、南威爾斯では、人間を頤から下の大きさを測るらしいが、私共の北威爾斯では、反對に頤から上の大きさを大小を定める事になつてゐるのです。」

かう言つて、ロイド・ジョージ氏は、自慢の大きな頭を肩の上で振つて見せた。聴衆は譯もなく嬉しがつて、頤の下の馬鹿に大きい體軀を揺ぶつて喝采した。

三

詰込み主義だとか、鸚鵡流の教育だとか、日本の教育界でもよく論議されることだが、何事にも自由な米國では、教育だけは別だと思えて、近頃かういふ話があつた。

ある小學校の校長は、毎朝課業の始る前に、極つたやうに生徒を講堂に集めた。そして小高い教壇の上に、鉛筆のやうに眞直ぐに突つ立ちながら、咽喉一杯の聲を張りあげて訊いた。

「皆さん、あなた方はかうやつて大勢講堂に集つてゐますが、萬一ひよつとした事で、この建物から火が出たときにはどうしますかね。」

成程學校の建物は、校長が火を氣遣ふやうに粗末な木普請で、そこの柱などは、儂麻質斯でも患つてゐるらしく、イ

儂麻質斯 リョウマチス。
冷濕又は風邪に胃されな

ヒチオールのやうな茶色の藥で塗りくつてあつた。

それを聞くと、生徒は讚美歌でも唱ふ折のやうに、一齊に聲を揃へて返辭をした。

「先生、私どもは皆腰掛から立上がります。そして一先づ廊下に出て、遽でないで順々に外へ逃出します。」

校長は満足さうに、ぐつと顎をしやくつた。彼はかういふ風に教へて置けば、いつごんな事が起つても、生徒は満足に避難出来るものと信じてゐた。

ある日の事、その學校へヴァンダイク博士が訪ねて來た。博士は聞えた著述家だといふので、校長は生徒のために一寸したお話を頼んだ。

ヴァンダイク博士は、いつも校長が鉛筆のやうに突つ立

ごして、關節又は筋肉に
疼痛・硬直を來す病氣。
イヒチオール 石腦油より
製したる褐色の濃液。鎮
痛等に用ひらる。
Ichthyl.

ヴァン・ダイク 米國の學
者・政治家。(一八五二年
—) Henry Van-Dyke.

つてゐる教壇に立つた。そして落ちつきのある聲で言つた。
「皆さん、私は博士ヘンリヴァンダイクといふ者です。私が
今こゝに立つて皆さんのためにお話をするといつたら、皆
さんはどうしますか。」

博士はかう言ひさして、慈悲の籠つた眼で、ぢつと生徒を
見おろした。

生徒は家鴨のやうにぎやあくゝと聲を揃へて言つた。

「先生、私どもはみんな腰掛から立上がりまゝ。そして一先
づ廊下に出て、遠でないで順々に逃出します。」

ヴァンダイク博士はそれを聞くと、僕麻質斯に懼つたや
うに痛さうに顔をしかめた。教壇の下では、校長が火事に出
會はしたやうに、眞赤になつて顫へてゐた。(薄田泣壺「茶話」)

薄田泣壺 名は淳介。文學
者。詩人。岡山縣に生まる。
長く大阪毎日新聞社客員た
り。

二八 童 心

聖心せいしんは童わらわの心こころである。

越後の良寛りやうかん禪師は、殊に此の童心わらわこころの持主であつた。かうい
ふお話がある。

一に童男童女、二に手毬、三にお弾き、これが禪師の三好み
といふ。これで見ても、良寛様りやうかんさまがごんなに子供が好このきで、子供
達こどもと遊ぶ事が、またごんなに嬉うれしかつたかが思はれる。

その良寛様も、子供達には随分馬鹿にせられて、盛んにな
ぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平
氣で一所懸命に遊び惚れてゐた良寛様りやうかんさまがありがたい。

或時、例の通り、子供達と隠れんぼをして居られた。鬼にな

良寛禪師 越後出雲崎の
僧。詩歌を能くし、尤も
草書に巧なりき。天保二
(二四九一)年歿す。年七
十四。

つた良寛様が目を瞑つて、「もういゝよ。」といふ可愛い聲を一心に待受けて居られる。と、丁度日の暮れ時で、子供心の何かな欲しくなる時である。家々の燈がちら／＼と點きだすと、子供達は急に遊をやめて、一人残らずこそ／＼と歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛様も何もうつちやらかしてある。無論幾ら待つても、「もういゝよ。」と言ふものは無い。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうして、さう／＼夜が明けてしまつた。良寛様はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿をしたまゝ、「もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つて居られた。

その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

それから、また或時のことである。良寛様が今度は隠れる

事になつた。そこで見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻叢の中にもぐり込んで、それは可愛らしい事だ、それは／＼小さくなつて、まるで二十日鼠のやうに、頭からすつほりと稻藁を被つて、おど／＼して居られた。すると子供達は、また例の通り一人残らずこそ／＼と歸つてしまつたのである。それを良寛様は少しも御存じない。また日が暮れて、夜が來て、また夜が明けた。稻叢には霜が眞白に置き、朝の日が登りはじめると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稻束をやにはにはづすと、「おやつ」と驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつて居る。おや良寛様が、「といふと、慌てて、そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」

その心のあざけなさ、ありがたさ、まるで子供である。

又、或日のことである。その良寛様が、男の兒や女の兒達とお弾きをして居られた。沙門良寛全傳に、禪師頗る大勝を博して、賭物の熬豆を多く得。と書いてあるから、餘ほどの乗氣であつたらしい。丁度その時に誰かが入つて來た。そして、「おやく、良寛様、なか、あなた様はお弾きがお上手で。」と褒める。罪がないこと、良寛様はほうつと面を赤くすること、まるでおぼこ娘見たいに、さも、恥づかしさうに、そつとその熬豆を膝の下におし隠したといふ。その心の初々しさ、そのきまりのわるさ耻づかしさは、全く佛の前に子供らしくおこなしく身を謙る心である。尊い聖心はすべて此の童心を源とする。

禪師がいかに天真爛漫であつたかといふことをもう一

沙門良寛全傳 西郡久吾の
編述したる良寛の傳記。
賭物 トアツ。かけもの。

つお話する。

或時、赤々と實が熟れて鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供が一人泣いてゐた。良寛様を通りかゝつて、どうしたんだと圓い頭をさすつてやる。あの柿が食べたいと言ふ。よし、それではわしが取つてあげる。泣くのではないぞ。と言ひながら、やつとこさこ木の上に匍ひあがつた。杖につかまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全くうまさうな柿の實だ。一つ取つて口をつける。それがおいしいのなんの、良寛様は夢中になつて、噛るは噛るは、まるで猿蟹合戦の赤いお猿のやうに、むしやく、と食べ惚れてゐる。下にゐる子供こそ哀である。それを見て火のやうに泣叫ぶ。と、始めて良寛様も氣がついた。さあ、しまつた。これはこい

ふので、慌てて枝を揺つたといふ話。思うてもその慌て方を
をかしさ、罪のなさ、真正直さ、その子供らしさ、全く涙が零れ
るほど嬉しいではないか。

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔から
そのまゝである。それは何物にも代へ難い、二つこない尊い
天稟うまれつきである。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日、父親から
酷く叩かれたので、つい上目をした。そこでまたく、叩かれ
た。親を睨むやうな奴は鰈になるぞ。これを聞いた良寛様の
榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ
家内中大心配で、あちらこちらと捜し索める。或濱邊の岩
の上に悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めてゐた。榮坊どうし

た。と言ふと、榮坊曰く「おら、まだ鰈にならねいか。」

鰈になると言はれたので、ほんこに鰈になると思つて、一
心に海を諦視あきらめて顛へてゐた童心の正直さ、これをこそ生
一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。(北原白秋「洗心雜話」)

北原白秋 名は隆吉。詩人。
福岡縣に生まる。早稻田大
學の出身。

冬籠り春さりくれば飯乞ふと草の庵を立出でて里にい
ゆけば玉鉾の路の巻に子供等が今は春べと手毬つくひふ
みよいむな汝がつけば吾は唱ひ吾がつけば汝は唱ひつき
て唱ひて霞立つ長き春日を暮しつるかも
かすみ立つながき春日を子どもらと手まりつきつ
つ今日もくらしつ

(良寛)

二九 畫師の苦心

ある人予がもこに來りて、繪に魂を入れる、と申すことは、いかやうなることをしてゑがき侍れば、魂は入り候ことぞ。」と問ふ。予答へていふ。すべて繪にはかぎらず、何ごこにても、實心をこめてさへ致さば、魂の入らずといふものあるべからず。他のことはいざ知らず、繪に魂の入りたりと思ふは、諸國にて種々名畫も多かる中に、我が見し泉州堺の一國寺といふ精舎は、千の利休もしばらく居られしことありて、物數寄を盡くしたる座敷五間ほごもあり。一間には檜の木一樹をゑがき、一間には臥したる鶴二十五羽ばかりをゑがきてあり。いづれも彩色ありて、古法眼元信の筆といひ傳へたり。

□尋常小學國語讀本十一
畫師の苦心參照

泉州 和泉國。今大阪府の一部。
一國寺 堺市にある臨濟宗の大安寺を古く一國寺といひたり。

元信 同寺に現存するは狩野永徳の筆になる。此の文の作者の思ひ誤りなるべし。

そのかみ此の繪をゑがける畫師、この寺に寓居すること三年ばかりの中に、何一つゑがきたることなく、碁を好みて、只それのみ日ごこの楽しみとして、あるはこゝかしこ遊びあるくには、やく三ごせを経たり。一たびだに筆を取りしこともなきはいかにも心得ざる者かなと思ひて、ある時住持の申されけるは、「その許畫をもて一家をなせりといひながら、筆を取りたることもなく、圍碁にのみ年月を過ぐさるゝはいかにや、われ衣食の費えを厭ふにはあらねど、何處へなりとも遊び給へ。愚老も所用ありて京へのぼり、ここによりは一年も在京せんもはかりがたし。」といふに、彼の畫師聞きて、「それこそいご名殘をしきここに候へ。さあらば年來の恩謝に何か少しの畫をのこしまゐらすべし。」とて、心がまへ

のみにて又四五日ほど経るに、住持は何をゑがくご、見たくて待てごも、絶えて筆をこらず。ある夜小坊主の住持が居間に夜更けて來り、ひそかに申すやう、「かしこに行き給ひて、ご覗きて畫師のありさまを見給へ。」ごさ、やきけるに、やがて小坊主にいざなはれて畫師が居間をうかゞふに、明障子の腰板に身をよせて、さまぐに姿をかへつゝ、寢起するありさまを見るより、小坊主を引寄せ、「ごよかし、覗くべからず。はやく臥せよ。」ごて、その身も寢間に入りたり。明くれば畫師まだきに起出で一間なる障子にゑがくを見れば、みな臥したる鶴なり。畫勢不凡にして、丹青の妙いふべからず。さあるに、又の夜はいかにごうかゞふに、前の如く夜もすがら寢ずして、明けなばかくやゑがかん、ごやせん、かくやあらましな

明障子の腰板 明障子とは今の障子のこご。但し同寺に現存せる繪は襖に描かれたり。

ご獨りつぶやきつゝ、臥しぬれば、住持も知らぬ顔にて過ししが、十日餘りにしてその鶴およそ二十四五羽をゑがけり。またも夜更けて覗き見るに、こたびは肘をはり足をのべ、手を口にあてつゝ、鶴の臥したるさまを見て臥しけるに、夜明けて彼の畫師がもごに、住持來りて、「けふゑがき給ふ鶴の姿はかやうにやそめぬらん。」ごよべ覗き見たる姿のさまして見せければ、打驚き「禪師には我がゑがかんご思ひ構へし心を早くも悟り給ふは、いかに知り給へるにか。」ご問ふに、「いやごよ、昨夜その許の様子を、ごうかゞひて知りたり。」ごいへば、畫師それよりして二枚はゑがかずして、杉戸の畫に檜の木一樹をゑがきて出立ちぬるごぞ。

杉戸 現存せる繪は襖に描かれたり。

根の山中にて、檜の木の枝の心に協ひたるがありければ、東國へは下らずして、再び泉州一國寺へ立越えしかば、住持見て大いに驚き、「東國へ行き給ふと聞きしに、又もや來られしはいかなることにか。」といふに、「さきにゑがきし檜の木の枝一枝足らぬところあり。箱根にてその意を得たれば、わざわざ立戻りたり。」とて、一枝をかきそへ、暇乞していで去りぬ。さぞ。晝に魂を入るゝ、こいへるは、かゝるたぐひを思ひぬ。こいへば、ある人も感じてかへりぬ。(柳澤淇園「雲萍雜志」)

柳澤淇園 名は里恭。大和郡山藩士。文筆に達し、又繪をよくす。寶曆八(二四一八)年歿す。年五十三。

人の善をもいふべからず。況んや其の惡をや。(格言)

善に従ふこと流るゝが如し。

善に従ふは登るが如く、惡に従ふは崩るゝが如し。

三〇 名工柿右衛門の村を訪ふ

長崎線の有田驛に降りたのは朝の九時過でありました。そゝり立つた岩山と岩山の懷につゝまれたやうな古い町は、まだ岩山のために日光を遮られてゐるので、何となしに、濕つほい空氣が低い軒のあたりに漂うてゐるやうな感じがしました。

迫つた山と山との間を縫うて、狭い川が谿をなして流れてゐます。川床が細かな白い砂であるためかして、一つ一つの小石でも數へられるほど水は澄んでゐました。黒い岩山の上には、赤松が恰も繪のやうな恰好に轟々と聳えて繁つてゐました。

□尋常小學國語讀本卷十 陶工柿右衛門參照

柿右衛門 酒井田氏。肥前國伊萬利の陶工。江戸時代初期の人。肥前國南河原山に生まる。白磁器に五彩並びに金銀泥を以て著色することに成功す。有田 佐賀縣西松浦郡の町。

此の町を取圍んでゐる黝ずんだ岩山や松や流の具合は、
 どう見ても南畫式だと思ひます。京都附近のあの美しい曲
 線を描いた女性的な山の形が光琳風なのに對して、此の附
 近の山や水はいかにも素寂な墨繪を聯想させます。私は有
 田町の香蘭社に行つて花瓶などを購つてから、香蘭社の人
 に柿右衛門の家を訊ねました。

有田町の南の町外れから左に行けば、大村長崎道になり
 ますから、そつちに曲らないやうに、ごく／＼までも眞直ぐ
 に、おいでなさい。南川原と云ふ山の中のごく小仕掛の家で
 す。といつて教へてくれた香蘭社の人の言葉を思ひ出しな
 がら、私は有田の町を南の方へ下つて行きました。

私はまだ中學時代に、此の町に一度泊つたことがあつた

光琳風 尾形光琳を祖さす
 る畫風。

香蘭社 有田焼の輸出品を
 重に製造する會社。

南川原 同郡曲川村の内。

ので、其の時泊つた金ヶ江といふ古風な旅籠屋を想ひ出し
 ながら、それらしい家を見て歩きましたが、ごう／＼探し出
 すことはできませんでした。ちよつと寂しいやうな氣もし
 ました。

黒い岩山の懷には段々畑があつて、畑の周圍には樅紅葉
 や柿の葉が紅く燃えてゐました。緩い勾配の丘には、古い墓
 地があつて、そこには大抵白い山茶花が咲いてゐました。町
 はづれの掛茶屋に腰をおろして南川原へ行く道を訊ねま
 した。

丁度收穫の時ですから、店の前には、稻扱器械を買つて荷
 車に積んで行く夫婦の若い百姓が憩うてゐたりしました。
 日はかん／＼とまるるで夏のやうに烈しく道に照りかへし

てゐました。陶土が白く道の面を埋めてゐますので、ごもすれば眩しくてたまらないやうなごももありました。

道は右手に岩山の黒髪山を眺めて、西ヶ岳だの國見峠だのいふ、高い樹の繁つた山の下を、伊萬里の方へ坦々として走つてゐるのでした。ごの田にもごの田にも、若い男や女たちが稲をこいたり、連枷で稲を打つたりしてゐました。空はごこまでも秋らしく澄んでゐました。

私は此の道を、小學時代に七八人の友人と夜つびで伊萬里まで歩いて行つたごがありました。其の時は霧が一面に山も川の面もつゝんでゐました。二十三夜ごろの月が光を投げてゐたごも、まだ記憶してゐます。黒髪山を右に見ながら、私は西の方へ白い道を歩いて行きました。黒く繁つ

黒髪山 有田町の北方に聳ゆる山。海拔五一八米。伊萬里 西松浦郡の町。

た山の腰には紅葉がちらほらご見えました。

私は柿右衛門が錦彩の色を工夫しながら、秋になれば、此のあたりの山の色や柿の色をつくごご感に打たれて眺めてゐたであらうなごご想ひながら、美しい白い流に沿うた道を歩いて行きました。

埃の多い道を歩いてゐる間に鐵道線路を踏切つて、なほ伊萬里の方へずんご歩いてゐました。私は五六歩先に歩いてゐる籠をかついだ女に南川原への道を訊ねました。私は南川原へ行かなければならない道を、既にかなり遠く通り過ぎてしまつてゐたのでした。

再び鐵道線路まで立歸つて、それから南の方へ小さな山

道にはひるこ、そこに古い石の道標があつて、それには南川原道といふ文字がおぼろげに讀まれるのでした。

道は緩勾配をなして、低い小山と小山との間を登つて行くのでした。こゝにも美しい小川がせゝらぎの音をなして流れてゐました。小川に沿うて草葺の小舎があつて、そこには水車ではないが、小川の水を受けて陶土を搗く仕掛がしつらへてあるものでした。ざあつと水が落ちるたんびに、ごしんと小春日和の長閑な感じをよび起すやうな杵の音が聞えて來るのでした。私はちよつと伊豆の修善寺あたりの山里を聯想しました。恐らく柿右衛門が使つた陶土も此の小川の水で搗かれたのでせう。また此の小川の縁に、彼は幾度か呆然として立ちすくんでゐたこゝもあつたでせう。

修善寺 静岡縣田方郡の町。

こゝも畑や家のまはりには丁度赤く熟した柿の實がたわゝになつてゐました。柿右衛門だの澁右衛門だのといふ名が出て來たのも、極めて自然なこゝのやうに思はれます。極めて平凡な小山につゝ、まれた、極めて平和な感じを抱かせられる山里が、名工柿右衛門の南川原といふ村です。赤い柿の實につゝ、まれた秋の村には、二十戸か三十戸ぐらゐの古びた家が、爪先上りの道に沿うて一かたまりになつて集つてゐます。家々の前には、美しい小川が溝ぐらゐの大きさになつて流れてゐます。大抵は農家だと思えて、稲なごが土間にも庭にも一面に干してありました。柿のほかには或古い家の庭に美しい石榴が塀の外に枝を垂れてゐるのを見ました。

大抵は同じ家から出たものか、同じ姓の家が幾軒も幾軒も並んでゐました。

「柿右衛門の家は、……」と、私は乳を飲ませてゐた百姓のおかみさんに訊ねました。

「柿右衛門さんの家ですかんた？……」と言つて、若い女は山の上を指して見せました。

此の山里の村の一番高地にある家が、柿右衛門の屋敷でした。黒い垣根があつたり、硝子窓の長い新しい建物が鍵形に並んでゐたりしてゐるのは、ちよつと小學校といふ感じをあたへました。

門の突當りには昔風の随分大きな構の家がありました。私はそこにはひつて行つて、主婦らしい三十ばかりの女の



（作門衛右柿）器磁彩錦

人に、名刺を出して來意を告げました。廣い土間一面に皿だの鉢だの、白い土のまゝの磁器が列べられてゐました。大きな柱も、天井も、よほご古い時代に建てられたまゝだ。と見えて、黒く煤けてゐました。

若い女は子供を抱いたまゝ、私の名刺を握つて門の外へ走つて行きました。私は其の間庭に出てあたりを見ました。表座敷の右手寄りには倉があつて、倉の前には一本の柿があります。小春日和の日光を浴びた柿の木

には、枝も垂れるくらゐに赤い柿の實がなつてゐました。私は後に聞いたのでした。それが柿右衛門と最もゆかりの深い柿の木であつたのでした。柿の木の傍には碑がありました。それには柿右衛門が元和三年、豊公の臣高原五郎七に京焼の方法を傳授せられたこと、京焼の質の脆弱なのを不満に思つて、色々な工夫をしたこと、正保三年苦心の後錦彩磁器を發明したことなどが記されておりました。

蛇が多いと見えて、碑の下に黒い蛇がのたくつてゐました。碑の前には口を裂かれたまゝの蛇が一匹死んでゐました。間もなく品のよい若い男が見えましたが、折角お出で下されましたが、主人が他出中で、何分詳しいことは私には分りませんが、と言つて、私を工場の方へ案内してくれました。

元和三年 後水尾天皇の御宇。二二七年。

正保三年 後光明天皇の御宇。二三〇六年。

「今、丁度勞銀問題で職人の方が休んでゐますので、……」と言ひながら、若い男は仕事場の中へ歩いて行きました。

なるほど、広い仕事場の中はがらんとしてゐて、たゞ二人の男が白い土を捏ねたり、土を入れた水甕を掻きまはしてゐたりしました。

疊を敷いた隅の部屋では、二三人の女が筆を握つて繪を描いてゐました。そのすぐ傍では蒼い顔色の男が轆轤を廻して壺のやうなものを拵へてゐました。

勞働問題の餘波といふものが、この山間の小さな仕事場までも及んでゐるかと思ふと、私は妙な氣になりました。殊に、名工柿右衛門と勞働問題といふやうなことを考へてゐる。今まで描いてゐた幻想の幾部分が地上に叩きつけら

れたやうな暗い心になつたりしました。あの柿の木の下でお考へになつたさうです、幾年も幾年も柿の木さへ時が來ればあのやうに色づくのに、どうして人間の力で焼物に赤い色が附けられないだらうか、其の事ばかりお考へになりましたさうで、……」言つて、若い男は仕事場の窓から表座敷の前の柿の木を指さして見せました。

赤く熟した柿の木の實の下に終日黙々としてゐたであらう名匠の倂を、私は胸に描いて見ました。私の心には、神の力に對して人間の力を試みようとしたレオナルド・ダ・ヴィンチの事が想ひ出されました。赤い柿の實の下には、小犬がけだるさうに秋の陽を浴び

レオナルド・ダ・ヴィンチ 伊
太利の畫家、彫刻家、建築
家。(一四五二—一五一九
年) Leonardo da Vinci.

て眠つてゐました。

私は小さな盃を手にとつて見ました。燃えるやうな朱の色が美しく、白い盃底に輝いてゐました。私は庭の土竈と柿の實とを見比べました。私は土竈を開いて呆然として涙ぐみながら佇んだであらう柿右衛門の姿を想像しました。次の刹那に、私は一枚の磁器を抱へて狂喜しつゝ、廣い庭の中を飛びまはつたであらう柿右衛門の姿を想像しました。その折の彼の喜の聲がそこいらの建物の間に、まだ響いてゐるやうにさへ思はれるのでした。盃の底に描かれた小さな花の朱の色を見つめてゐる間に、私は涙ぐましいやうな敬虔な心にならずには居られませんでした。

隠れたる山里に苦しみ悩んでゐた恩惠者！それはたゞ一條の朱の色を磁器の面に刻みつけるだけの發明であつた。しかしそれはいかにも多くの苦惱に値する仕事でありました。彼は少くとも私たちの世界に、美の要素を一つ多く殖してくれたのでした。

人間の世界の美、人間の世界の幸福は、いつでも此のやうな隠れた苦惱者によりて與へられるといふことを、私は尊い心を抱いて考へずには居られませんでした。

柿右衛門が實際に住んでゐた家は、現在の家の裏で、やゝ上手の丘の上にあつたといふことでした。今では木が一面に繁つてゐます。其の頃は今の座敷の前の例の柿の木と松の木との間に土竈があつたといふことです。松もやはり當

時からあつたのださうですが、かなり大きな松です。

その松の下では、鑄掛屋が頻りに鑄掛をしてゐました。奥の座敷で茶でも飲んで行つてくれるやうに頻りに勧められました。が、何分汽車の時間が氣がかりになつて仕方がなかつたものですから、茶も飲まないで歸ることにしました。柿右衛門の遺物でもあつたら見せて貰はうと思つてゐましたが、時間がないので、それも果さずに歸路につきましました。

柿右衛門の墓は上の山と下の山にあるさうですが、初代の柿右衛門の墓は下の山にあるといふことを聞きましたので、山を下ることにしました。門を出る時、例の柿の葉があまり美しく紅葉してゐましたので、せめて一枚の葉でもこ

初代 柿右衛門の名を名乗りしものは初代以下数人あり。錦彩磁器の製作に成功せしは初代柿右衛門なり。

思つて所望しましたら、家の人は大きな柿の實が二つ附いた枝を手折つてくれました。

門を出てから、私は再び同じ道を下つて、蕎麥畑の間を通りながら、村の小娘や畑の中に働いてゐる男たちに訊ねて見ましたが、柿右衛門の墓には行きつきませんでした。

振りかへつて見ると、北も南もゆるやかな傾斜の秋の小山につゝまれた南川原は、ほんごうに平和な感じをあたへました。東には高い木の繁つた山が聳えてゐました。西の一方だけが開いて、そこからは遙かに伊萬里の背後の山が青く煙つてゐるのが見えました。

そこには富豪らしい大きな邸もなく、又貧家らしい小さな家も見えません。どれもこれも同じくらゐの大きさの農

家が、平和な谿の懷に、黄金のやうな柿の實につゝまれて、怠惰な日向ぼつこをしてゐるやうに思はれました。

學校から歸つて行く子供たちの顔は、大抵整つた正しい輪郭を持つてゐました。

私は丘の上の墓場にながつて行きました。そこには御堂があつて、胸に茜木綿の涎掛を掛けた地藏尊の像が一基立つてゐました。隣の堂には、葬ひの折に村の人たちが使ふ輿がしまはれてありました。

私はしばらくその堂のまはりを探して歩きましたが、酒井田柿右衛門の墓らしい墓は、さうく見出しませんでした。小さな龕のやうな形の墓があつて、其の墓の上や周圍には、眞つ白な陶土の粉が振りかけられてありましたが、或は

それが名工の墓であつたかも知れません。

ともかく汽車の時間が切迫して來たので、私はそこ／＼にして墓地の横から粟畑に出ました。そして其處に粟を刈つてゐる老人に、今一度柿右衛門の墓を訊ねて見ましたが、「柿右衛門さんのお墓は上の山にあります。」と言ひました。私はつひに名工の墓を見ずして歸つて來ました。

伊萬里街道に出たから、私は南川原の東の方に聳えてゐる美しい山の名を學校歸りの子供に訊ねて見ました。

「あの山はなんごらんやま！」といふやうに聞えましたので、「どう書くの。」と訊ねましたが、少年は含羞^{はにか}みながら笑つて駈けて行つてしまひました。(吉田絃次郎「麥の丘」)

吉田絃次郎 名は源次郎。文學者。佐賀縣に生まる。早稻田大學の出身。

三一 春の鳥

一

今より六七年前、私は或地方に、英語と數學の教師をして居たことがございます。其の町に城山といふのがあつて、大木が暗く繁つた山で、餘り高くはないが甚だ風景に富んで居ましたゆゑ、私は散歩がてら、何時も此の山に登りました。頂上には城址が残つて居ます。高い石垣に蔦葛がからみ附いて、それが眞紅に染まつて居る鹽梅など、えも言はれぬ趣でした。昔は天主閣の建つて居た處が平地になつて、何時しか姫小松が疎らに生ひたち、夏草が隙間なく茂り、見るからに昔を偲ばせる哀な様となつて居ました。

或地方 大分縣佐伯町か。

城山 佐伯城址。

私は草を敷いて身を横たへ、數百年斧を入れたこのない鬱蒼たる深林の上を見越しに、近郊の田園を望んで楽しんで、だこも幾度であるか解りませんほどでした。

或日曜の午後と覺えて居ます。時は秋の末で、大空は水の如く澄んで居ながら、野分が吹きすさんで、城山の林は烈しく鳴つて居ました。私は例の如く頂上に登つて、やゝ西に傾いた日影の遠村近郊を明く染めて居るのを見ながら、持つて來た書物を讀んで居ます。突然人の話聲が聞えました。から、石垣の端に出て下を見おろしました。別に怪しい者でなく、三人の小娘が枯枝を拾つて居るのでした。風が烈しいので得物も多いかして、澤山背に負つたまゝ、猶も四邊をあさつて居る様子です。むつまじげに話しながら、楽しげに歌

ひながら拾つて居ます。それが何れも十二三、多分何村あたりの農家の子供でせう。

私は暫く見おろして居ましたが、又もや書物の方に眼を移して、何時か小娘のこゝは忘れてしまひました。するど、きやつこいふ女の聲驚いて下を見ます。三人の子供は何に懼れたのか、枯木を背負つたまゝ、あたふたと逃出して、忽ち石垣の彼方に其の姿を隠してしまひました。をかしたこゝと、私は其の近處を注意して見おろして居ると、薄暗い森の奥から、下草を分けながら、道もない處を此方へやつて來る者があります。初は何者とも知れませんでした。が、森を出て石垣の下に現れたところを見ると、十一か十二と思はれる男の兒です。紺の筒袖を著て、白木綿の兵兒帶をしめて居る

様子は、農家の兒でも町家の者でもなささうでした。

手に太い棒切を持つて、四圍あたりをきよろ／＼見廻して居ましたが、ふと石垣の上を見上げた時、思はず二人は顔を見合はせました。子供はちつと私の顔を見つめて居ましたが、やがてにやりと笑ひました。其の笑が尋常でないのです。生白



國木田獨歩

い丸顔の、眼のぎよろりとした様子
までが、唯の子供でない。私は直ぐ
見て取りました。

「先生、何をして居るの。」と、私に呼掛けましたので、私も一寸驚きました。が、元來、私のその頃教師を務めて居た町は、ごく小さな城下ですから、私の方では自分の教へ兒の外の人を餘り知らないでも、土地の者は都か

ら來た年若い先生を大概知つて居るので、今此の子供が私に呼掛けても、實は不思議はなかつたのです。其處へ氣がつくや、私も聲を優しくして、書物を讀んで居るのだよ。此處へ來ませんか。」と言ひました。すると兒童は、いきなり石垣に手をかけて猿のやうに登り始めました。高さ五間以上もある壁のやうな石垣ですから、私は驚いて止めようと思つて居る内に、早くも中ほごまで來て、手近の葛に手が届くと、すらすらとこれを手繰つて、忽ち私の傍に突つ立ちました。そしてにや／＼と笑つて居ます。

「名前は何といふの？」と私は問ひました。「六。」六？六さんといふのかね。」と問ひますと、兒童は點頭いたま、例の怪しい笑を洩して、口を少し開けたま、私の顔を氣味の悪いほ

ご見つめて居るのです。

「いくつかね、歳は？」と私が問ひますと、怪訝な顔をして居ますから、今一度問返しました。すると、妙な口つきをして唇を動かして居ましたが、急に兩手を開いて、指を折つて、一つ、二つ、三つと讀んで、十、十一と飛ばし、顔をあげて眞面目に、「十一だ。」といひました。その様子はやつと五つぐらゐの兒の、やうく、數を覺えたのと少しも變らないのです。そこで私も思はず、能く知つて居ますね。」母さんに教はつたのだ。」學校へ往きますか。「往かない。」何故往かないの？」兒童は頭を傾げて向うを見て居ますから、考へて居るのだと私は思つて待つて居ました。すると突然、兒童はわあく、と啞のやうな聲を出して駈出しました。六さん、六さん。」と驚いて私が呼止め

ますと、鳥、鳥。」と叫びながら、後も振りむかないで、天主臺を駈けおりて、忽ち其の姿を隠してしまひました。

二

私は其の頃、下宿屋住ひでしたが、何分不自由で困りますから、色々人に頼んで、遂に田口といふ人の二階二間を借り、衣食一切のこゝを任せることにしました。

田口といふは、昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のままに構へて、裕福に暮して居ましたもので、その二階を貸して、私を世話してくれたのは少からぬ好意であつたのです。

ところで、驚いたのは田口に移つた日の翌日、朝早く起きて散歩に出ようとするに、城山で逢つた兒童が庭を掃いて

天主臺 天主のありし丘の意。天主は城の本丸の中
央又は一隅にて、最も高く幾層にも構へたる物見櫓。

家老職 大名の家臣の長。

居たことです。私は、「六さん、お早う。」と聲をかけましたが、児童は私の顔を見てにやり笑つたまゝ、草箒で落葉を掃いてゐて、言葉を出しませんでした。

日のたつ中に、此の怪しい児童の身の上が次第に解つて來ました。と言ふのは、畢竟私が氣をつけて見たり聞いたりしたからでせう。

児童は名を六藏と呼びまして、田口の主人には甥に當り、生まれついで白痴であつたのです。母親といふは四十五六、早く夫に別れて實家に歸り、二人の兒を連れて兄の世話になつて居たのです。六藏の姉はおしげといつて、其の時十七歳、私の見るころでは、これも亦白痴と言つてよいほど哀な女でした。

田口の主人も、初のほどは白痴のこゝを隠して居るやうでしたが、何をいふにも、隠し得るこゝで無いのですから、つひに或夜のこゝ、私の室に來て、教育の話の末に、甥と姪の白痴であるこゝを話しだし、どうにかしてこれに幾分の教育を加へるこゝは出来ないものか、私に相談をしました。

主人の語るこゝろに依るこゝ、此の哀な姉弟の父親といふのは、非常な大酒家で、其のために生命をも縮め、家産をも蕩盡したのださうです。そして姉も弟も初の中は小學校に出して居たが、二人とも何一つ學び得ず、いくら教師が骨を折つても無益で、到底他の生徒と同時に教へるこゝは出來ず、徒らに他の腕白生徒の嘲弄の道具になるばかりですから、學校でも却つて氣の毒に思つて退學させたのださうです。

蕩盡 タウジン。のこらす
つかひはたす。

成程、詳しく聞いて見ると、姉も弟も全くの白痴であることがいよく、明白になりました。然るに主人の口からは言ひませんが、主人の妹、即ち姉弟の母親といふのも、普通から見ると、餘ほど抜けて居る人で、二人の子供の白痴の原因は父の大酒にも因るでせうが、母の遺傳にも因ることを、私は直ぐ看破しました。

白痴教育といふが有ることは私も知つて居ますが、これには特別の知識の必要であることですから、私も田口の主人の相談にはうかご乗りませんでした。たゞ其の容易でないことを話しただけでよしました。

けれども、其の後だん／＼おしげと六藏の様子を見ると、如何にも氣の毒でたまりません。不具の中にも、これほど哀

なものはないと思ひました。啞聾盲などは不幸には相違ありません。言ふ能はざるもの、聞く能はざるもの、見る能はざるものも、なほ思ふことは出来ず、思うて感ずることは出来ず。白痴となること、心の啞聾盲ですから、殆ど禽獸に類して居るのです。兎も角、人の形をして居るので、全くとく感じがない譯ではないが、普通の人と比べては十の一にも及びません。また不完全ながらも心の調子が整うてゐればまだしもですが、更に歪になつて出来て居るので、様子から見ると、調子が狂つて居るのだから、なほ哀です。

おしげは兎も角、六藏の方は兒童だけに無邪氣なところが有りますから、私は一倍哀に感じて、人の力で出来ること

ならば、ごうにかして、少しでも其の智能の働を増してやりたいと思ふやうになりました。

すると、田口の主人と話してから二週間もたった後のこと、夜の十時ごろでした。最早床に就かうかと思つて居るところへ、「先生、お寝みですか。」と言ひながら、私の室に入つて来たのは、六藏の母親でした。背の低い、瘦形の、頭の小さい、中高の顔、何時も齒を染めて居る昔風の婦人。口を少し開けて人のよささうな、たわいのない笑を何時も其の眼尻と口元に現して居るのが、此の人の癖でした。

「そろ／＼寝ようかと思つて居るところです。」と、私が言ふ中、婦人は火鉢の傍に坐つて、先生、私は少しお願が有るのですが。」といつて、いひ出しにくい様子。何ですか。「六藏のことで

ございます。あのやうな馬鹿ですから、將來のことも案じられて、それを思ふと、私は自分の馬鹿を棚に上げて、六藏のことが氣にかゝつてならないので御座います。」御尤もです。けれどもさうお案じなさるほどのことも有りますまい。「と、つい私も慰めの文句を言ひましたが、これも矢張人情でせう。

三

私は其の夜だん／＼と母親の言ふところを聞きました。が、何よりも感じたのは、親子の情といふことでした。前にも言つた通り、此の婦人とても、餘ほど抜けて居ることは一見して解るほどですが、それが我が子の白痴を心配することは、普通の親と少しも變らないのです。

そして母親もまた白痴に近いだけ、私は益、哀を催しまし

た。思はず私も貰ひ泣きをしたくらゐでした。そこで私は六藏の教育に骨を折つて見る約束をして、氣の毒な婦人を歸し、その夜は遅くまでいろく、こ工夫を凝らしました。さて其の翌日からは、散歩ごとに六藏を伴ふことにして、機に應じて幾分かづつ智能の働を加へることに致しました。

第一に感じたのは、六藏に數の觀念が缺けて居ることです。一から十までの數がどうしても讀めません。幾度も繰返して教へれば、二つ、三つと十まで口で讀上げるだけのことはしますが、路傍の石塊を拾うて三個竝べて、幾個だこ聞きますと、考へてばかり居て返事をしないのです。無理に聞くと、初は例の怪しげな笑ひ方をして居ますが、後には泣きだしさうになるのです。

私も苦心に苦心を積み、根氣よく務めて居ました。或時は八幡宮の石段を數へて昇り、一つ、二つ、三つと進んで七つで止り、七つだよ。と言ひ聞かせて、さて今の石段は幾個だこ聞きますと、大きな聲で十と答へる始末です。松の竝木を數へても、菓子を褒美に其の數を數へさせても、結果は同じことです。一つ、二つ、三つといふ言葉と、其の言葉が示す數の觀念とは、此の兒童の頭に何の關係をも持つて居ないのです。白痴に數の觀念の缺けて居ることは聞いては居ましたが、これほどまでとは思ひもよらず、私も或時は泣きたいほどに思ひ、兒童の顔を見つめたまゝ、涙が自然に落ちたこともありました。

然るに六藏はなかくの腕白者で、惡戯をするときは、隨

分人を驚かすことがあるのです。山登りが上手で、城山を駆廻るなどは、まるで平地を歩くやうに、道のある處も無い處も、さつさと跳んで行くのです。ですから、いつも田口の者が、六藏は何處へ行つたか、心配して居ると、晝飯を食つたまゝ出て、日の暮方になつて、城山の畦から田口の奥庭にひよつくり跳びおりて歸つて來るのださうです。木拾ひの娘が六藏の姿を見て逃出したのは、きつここれまで幾度もなく此の白痴の腕白者に嚇されたもの、私も思ひ當つたのです。

けれども又、六藏はぢきに泣きます。母親が兄の手前を兼ねて、をり／＼痛く叱ることがあり、手の平で打つこともあります。其の時は頭をかゝ、へ身を縮めて泣叫びます。しかし

すぐと笑つて居る様は、打たれたことを全然忘れてしまつたらしくて、これを見て、私は猶更此の白痴の痛ましいことを感じました。

かゝる有様ですから、六藏が歌など知つて居る筈も無ささうですが、知つて居ます。木拾ひの唄ふやうな俗歌を諳んじて、をり／＼低い聲でやつて居ます。

或日、私は一人で城山に登りました。六藏を連れてと思ひましたが、姿が見えなかつたのです。

冬ながら九州は暖國ゆゑ、天氣さへよければ極く暖かで、空氣は澄んで居るし、山のぼりには却つて冬がよいのです。

落葉を踏んで頂に達し、例の天主臺の下まで往くと、寂々として満山聲なき中に、何者か優しい聲で歌ふのが聞えま

す。見ると、天主臺の石垣の角に、六藏が馬乗に跨がつて、兩足をふらく、動かしながら、眼を遠く放つて、俗歌を歌つて居るのでした。

空の色、日の光、古い城址、そして少年、まるで畫です。少年は天使です。此の時私の眼には、六藏が白痴とは如何しても見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀な對照でせう。しかし私は、此の時、白痴ながらも少年はやはり自然の兒であるか、つくづく感じました。

今一つ六藏の妙な癖をいひますと、此の兒童は鳥が好きで、鳥さへ見れば眼の色を變へて騒ぐことです。けれども、何を見ても鳥このみいひ、いくら名を教へても憶えませんが、何を見ても「ひよごり」を見ても、鳥といひます。可笑しいのは

或時白鷺を見て鳥といつたことで、鷺を鳥にいひ黒めるといふ俗諺が、此の兒だけには普通なものでした。

高い木の頂邊で百舌鳥が鳴いて居るのを見ると、六藏は口をあんぐり開けて、びつと眺めて居ます。そして百舌鳥の飛立つてゆく後を茫然と見送る様は、頗る妙で、この兒童には空を自由に飛ぶ鳥が餘ほど不思議らしく思はれるやうでした。

四

さて私も、この哀な兒のためには随分骨を折つて見ましたが、眼に見えるほどの效能は少しも有りませんでした。

彼此するうちに、翌年の春になり、六藏の身の上に不慮の災難が起りました。三月の末でありました。或日朝から六藏

鷺を鳥に、鷺は白く、鳥は黒くして、一見その別明かなるに、詭辯を以て、鷺を鳥といひなすといふ義。非を理に説き又は理を非に言ひなすことにたさへていふ諺。

の姿が見えませんが。晝過になつても歸りません。遂に日暮になつても歸つて来ませんから、田口の家では非常に心配し、殊に母親は居ても起つても居られない様子でした。

其處で私は、先づ城山を探すがよからうと、田口の僕を一人連れて、提灯の用意をして、心に怪しい痛ましい想を懷きながら、平常の慣れた徑を登つて城址に達しました。

俗に蟲が知らずといふやうな心持で、天主臺の下に来て、「六さん……六さん……」と呼びました。そして私に僕に、申し合はせたやうに耳を敬てました。場處が城址であるだけに、又捜す人が普通の兒童でないだけ、何とも知れない物すごさを感じました。

天主臺の上に出て、石垣の端から下をのぞいて行くうち

に、北の最も高い角の眞下に、六藏の死骸が墜ちてゐるのを發見しました。

怪談でも話すやうですが、實際私は六藏の歸りの餘り遅いこと知つてからは、どうも此の高い石垣の上から六藏は墜落して死んだやうに感じたのであります。餘り空想だと思はれるかも知れませんが、白状しますと、六藏は鳥のやうに空を翔け廻る積りで、石垣の角から身を躍らしたものと私には思はれるのです。鳥が木の枝に来て、六藏の眼の前で枝から枝へご自在に飛んで見せたら、六藏はきつと、自分も其の枝に飛びつかうとしたに相違ありません。

死骸を葬つた翌々日、私は一人天主臺に登りました。そして六藏のことを思ふと、いろ／＼ご人生の不思議の思に堪

へなかつたのです。人類と他の動物との相違、人類と自然との關係、生命と死なごいふ問題が、年若い私の心に深い深い哀を催しました。

英國の有名な詩人の詩に「童なりけり」といふのがあります。それは一人の兒童が、夕毎に淋しい湖水の畔に立つて、兩手の指を組合はせて、鼻の啼くまねをする、湖水の向うの山の鼻がこれに返事をする、これを其の童は楽しみにして居ましたが、遂に死んで靜かな墓に葬られ、其の靈は自然の懷に返つたといふ意を詠じたものであります。

私はこの詩が好きで常に讀んで居ましたが、六藏の死を見て、其の生涯を思つて、其の白痴を思ふ時、この詩よりも、六藏のことは更に意味のあるやうに私は感じました。

英國の有名な詩人 ワーズワースのこゝ。(一七七〇—一八五〇年)
W. Wordsworth.
童なりけり "There was a boy."

石垣の上に立つて見てゐると、春の鳥は自在に飛んで居ます。其の一つは六藏ではありますまいか。よし六藏でないにせよ、六藏は其の鳥とごれだけ違つて居ましたらう。
哀な母親は其の兒の死を、却つて兒のために幸福だといひながらも泣いて居ました。

或日のことでした。私は六藏の新しい墓にお詣りする積りで、城山の北にある墓地に往きますと、母親が先に來て居て、頻りに墓の周圍をぐるぐると廻りながら、何か獨語を言つて居る様子でした。私の近づくのを少しも知らないと思つて、

「何だつてお前は鳥の眞似なんぞしたえ。何だつて石垣から飛んだの？……」だつて先生がさう言つたよ、六さんは空

を飛ぶ積りで天主臺の上から飛んだのだつて。いくら白痴でも鳥の眞似をする人がありますかね。」と言つて、少し考へて、

「けれどもね、お前は死んだ方がいゝよ。死んだ方が幸福だよ。……」私に氣がつくこゝね、先生、六は死んだ方が幸福でございますよ。」と言つて、涙をはらくこゝぼしました。

「さういふ事も有りませんが、何しろ不慮の災難だからあきらめるより致し方がありませんよ。」けれども何故鳥の眞似なんぞしたのでございませう。」それは私の想像ですよ。六さんがきつこ鳥の眞似をして死んだのだから、解るものぢやありません。」だつて先生は、さう言つたぢや有りませんか。」母親は眼をすゑて私の顔を見つめました。

「六さんは大變鳥が好きであつたから、さうかも知れないと私が思つただけですよ。」はい、六は鳥が好きでしたよ。鳥を見るご自分の兩手をかう廣げて、かうして。」母親は鳥の羽ばたきの眞似をして、かうして其處らを跳び歩きましたよ。はい、さうして鳥の啼く眞似が上手でした。」と、眼の色を變へて話す様子を見て居て、私は思はず眼をふさぎました。

城山の森から一羽の鳥が翼をゆるやかに、二聲三聲啼きながら飛んで、濱の方へゆくや、白痴の親は急に話を止めて、茫然と我をも忘れて見送つて居ました。

この一羽の鳥を、六歳の母親が何と見たでせう。

(國木田獨歩「獨歩全集」)

國木田獨歩 名は哲夫。文學者。千葉縣の人。東京專門學校に學ぶ。明治四十一年歿す。年三十八。

三二 幼稚といふこと

幼稚といふ言葉は普通價値の低小を意味して用ひられてゐる。併し「幼稚であること」それ自身は果して悪いか。

人は一躍して老熟するわけには行かない。従つて少年は少年らしい幼稚さを、青年は青年らしい幼稚さを脱れ得ぬものである。それは自然であつて、些かも嘲ふべきことではない。併しこの自然の幼稚さが少年らしい、或は青年らしい猛烈な成長を示唆して居ない限り、それは命の停滯として、見る者を不愉快にする。この場合の幼稚は恥づべきものである。「幼稚であること」が悪いためではなく、成長すべきものが成長して行かないために。

示唆 示すこと。暗示。

人はまた成長の速度の速いものに比べて遅いものを幼稚と呼ぶ。これは穩當でない。人がその性質に従つて歩度を異にするのは極めて自然だからである。遅い者もその力強い歩調を生涯續けて行けば、遂にその標的に達し得るだらう。速い者は幾何も駈けない内に疲れて動けなくなる危険がある。精神的勞作を職とする日本人の内には後者に屬するものが頗る多い。我々は寧ろ歩度の遅かるべき性質を有するものが、強ひて速く駈けようとするところに、著しい幼稚さの現れることを注意しなければならぬ。こゝでも悪いのはその幼稚さではなくて、自分に許されない無理をするところである。

併し幼稚として嘲けられる最も悪いことは他にある。そ

勞作 勞働。仕事。主として文筆的なる仕事に對し
いふ。

れは自分の幼稚さを知らないことである。特にその結果として自分を實際「ある」以上に考へ、また振舞ふことである。(これも亦無智と盲目とから出る態度が悪いのであつて、幼稚そのものが悪いのではない。)

自分の幼稚さを知らない者は、屢、他の優越を看過して自分をその優れたものの上に置かうとする。これによつて彼自身の價値は低くはならない。併し彼の成長は著しく害せられるだらう。

例へば自欺によつて自分の價値を過言したものは、自分の眞の位置を知らない。彼は或事を發見して人類に新しい寶を與へるやうな氣持になる。――併しその事は更に優れた深い形で既に人類の寶になつてゐるのである。彼がその

自欺 自ら自己を欺くこと。

事を自分の道の上で發見したのはいゝ事に相違ないが、併し彼はそれを以て自己の獨創と優越を誇る代りに、人生の大きい流の深さに驚異し、自己の在來の幼稚を恥づべき筈であつた。この自覺によつて彼は自己の位置を知り、誇の代りに苦しみを得、更に突進むべく追立てられるのである。しかも彼にはこの事が無い。従つて彼の幼稚は何時までも乗越されないのである。

自分の幼稚さを知らない者は、また自分の長處に眩惑して、何處に自分の研ぐべき處があるかを見ようとしなない。たゞへ時に不安を感じても、自分の長處の故に自分を慰め、強ひて自分を安心させる。

例へば自分の内生の優越を信じて、自分の藝術家的な性

内生 自己の内部に存する本性。

質(形様式・リズム・調和)などに對する敏感の幼稚に氣付かないものがある。たゞ彼の内生の優越を彼の信ずる通りに許すとしても、彼の作品が彼の信ずる如く價值高きものである事に同意する事は出來ない。藝術はその手段に制約せられる。手段の拙劣は現すべきものを十分に現し得なかつた事の表示である。如何に優れた内生を現さうとしてゐても、それが現れてゐない以上、その藝術は無價値である。彼がその幼稚さの何處にあるかを知らない内は、彼の成長を期待するわけには行かない。

また自分の藝術家的性質の優越の故に、敢て自分の幼稚さを見まいとするものがある。彼はその現さうとするところのものを巧妙に現し得る。併し彼はその巧妙に自足して、

リズム 調子・旋律。
Rhythm.

制約 制限。

その現さうとするものがあまりに小さくあまりに少い事には心を配らない。彼は益々巧妙な奇警な藝術を作り得るだらう。併し遂に大きい高い藝術は、彼からは生まれまい。

私は、若々しい大望と溢れるやうな情熱の持主である筈の青年たちが、たゞ巧妙と奇警とを狙つて、骨の乾いた冷たい老人にふさはしい手さきの器用さを見せようとする努めてゐるのを見るに、何ともいへず慘ましい氣持がする。彼等にはその幼稚を自覺するのは苦痛かも知れない。此のまゝで進んで行くのが一番いゝ道だと抗辯したいかも知れない。併し私は彼等の天分の豊かさを思へば思ふほど、彼等がついに本當に苦勞しようとしなないのを残念に思ふ。

幼稚を脱する第一の道は幼稚を自覺するところである。それは人を不安にし、苦しめる。併し彼の本能が頹廢してゐない限り、彼を成長させないでは措かない。

自分の幼稚を自覺するには、偉大なものが何故偉大であるかを出来るだけ深く、自分の心臓によつて理解しようとするのが最善の方法である。(和辻哲郎「偶像再興」)

諺

教ふるは學ぶの半分。

矯めるなら若木のうち。

千日の勤學より一日の名匠。

錆に腐らせんより砥で減らせ。

一寸の蟲にも五分の魂。

和辻哲郎 哲學者。兵庫縣に生まる。東京帝國大學の出身。現に京都帝國大學教授。

三三 早春の賦

余は一年の中のあらゆる季節を愛する。光と生命とに溢るゝ夏も、靜かに澄渡りつゝ、鎮まり行く秋も、自然の生命の墓の中に温かに雪に籠る冬も、盛んなるにつけ、寂しきにつけ、靜かなるにつけ、悲しきにつけ、愁を含むにつけ、快活なるにつけ、漲り溢るゝにつけて、余は一年の中のあらゆる季節を愛する。

併しかくいふは、余の容易に同化し難き季節と、余と最も調子の合ふ季節との差別があることを否定する意味ではない。梅雨の美しさや、東京の冬の美しさを感じずには、余にとつては、身心の特に強健で、調節された状態が必要である。

余の心の痛み易く感じ易き時、葉蔭に熟する梅の實の美しさよりも、灰色の空に肌を襲ふ濕潤の氣の厭はしさによつて、凜然たる霜晨の勇ましさよりも、裸なる土に梢を揺る風の音の烈しさによつて、余の心は容易にかき亂される。之に反し、一年の中最もよく余の心と調を等しくするのは、春の微かに動き始める頃、吹く風に遠山の雪の冷たさを傳へながらも、日の光の肌に親しき頃、ぬくみ始めた細流のほごりに青き物の漸く芽ぐむ頃である。その時自然の生命の營みは、なほ半ば大地の下に行はれて、中に籠る力はたゆたひつゝ、羞らひつゝ、然も怠るところなき伸張を續けて行く。生命の車は未だ全力を盡くして急轉することをせず、前途の遙けさを豫想しつゝ、その靜かに暖かな廻轉を開始

伸張のびあがりみなぎりはること。

懶惰 ランダ。ものうくして、物事を怠ること。

する。外に發するよりも内に籠ることを愛する余は、懶惰にして急調の旋轉に堪へざる余は、然も内より温むる力を自覺せずには生きがひを感じることを得ざる余は、一年中この季節に於て最も自己の持前にあることを感ずるのである。かくて余は、晴れたる日は獨り野を行き、岡を行き、春淺き雜木林の下蔭を行きつゝ、頬に冷たき風と、背に温かき日の光を貪り味はふ。書を読みつゝ、夢みるものは旅である。雨に籠りて夢みるものも亦旅である。余は又早春に當つて、特に幼年の時を回想する。土の下に黒くなつて氷つてゐた雪もいつしか融けて、温かに日の光を吸ふ大地の面の日毎に廣がり行く時、久しぶりに草履を穿いて外出する喜に溢れつゝ、街道を過ぎる雪解の水の小

流をまたいで、獨樂を廻した時分のこゝ。雪の下に芽を出す
笹筍の赤い頭や、露の臺の青い頭を捜しまはる心のこきめ
き。遠山の雪を眺めながら雪解の水の碧く勢よく流れ行く
山川のほそりに腰をおろして、人生に對する目ざめを思つ
た少年の頃。思へば此等の人生の早春も、自分には既に流れ
過ぎてしまつたのである。

やがて桃が咲き、櫻が咲き、霞が流れ、又櫻が散る。さうして
自然は又余の特に愛する第二の季節、即ち晚春初夏の節に
入るのである。(阿部次郎「北郊雜記」)

朝な朝な湖^{うみ}べにむすぶうすごほり晝間はとけて日和つゞ
くも(島木赤彦)

露の臺 フキのタウ。露は
菊科に屬する多年生の
草。初春、地下莖より花
蕾を生ず、これを露の臺
さいふ。

阿部次郎 哲學者。山形縣
に生まる。東京帝國大學の
出身。現に東北帝國大學教
授たり。

島木赤彦 本名久保田俊
彦。歌人。伊藤左千夫に師
事して歌道に進む。大正十
五年歿す。年五十一。

三四 否の一語

人の此の世に處するや、事の次第によりては、否の一語を
言ふの勇なかるべからず。何となれば、誘惑の事及び罪惡の
事、その始に當りては、甚だ些少なるが如くなれども、その中
に陥るに及んでは、遂にその圈套を脱出する能はざるに至
る。故に始より毅然として「否」と言ひて之を拒むべし。否、我は
之を爲す能はず。」と言ふべし。然るに、世人を觀るに、よく此の
否の一語を言ふの勇氣あるもの少し。

否の一語を言ふ能はざる一種の人あり。他の心に違ふを
怖るゝに由るや、他人の心に順ふを欲するに由るや、確に知
り難し。雖も、此の人は他人に頼まるゝ、ここを辭せず、或は

圈套 ケンタウ。こゝにて
は人を惡しき方面に引入
るゝわな。

金錢を貸し、手形に裏書し、或は證人に立ち、遂に之がために累を受け、其の身、其の家を傾くるに至るなり。人、當然の時に於て、否の一語を言ふは安全の道なり。蓋し許多の人、否の一語を言ふ能はざるに由りて、其の身、其の家を傾くるに至るなり。否の一語を言ふの勇氣あらざれば、罪惡に地歩を占めらるゝなり。

歡樂の事、我を誘引せんとして我を試みる時は、直ちに否といふ決心を有せざるべからず。此の決心は徳行をして益堅固ならしむ。若し始に於て一步を譲り、否といふことを怠らば、自己に信賴するの力これよりして退き減ずべし。然るに、否の一語を言ふに、始は其の難きを覚え、大いなる努力を要すれども、久しき後は、自然に勢力増加して容易となる。怠

手形 一定の金額の、一定の場處にて、或時期に支拂はるべき旨を記載せる有價證券。爲替手形・約束手形・小切手の三種に分つ。

情、惑溺其の他諸の惡習の襲撃を防がんには、否の一語より外は有らず。故に曰く、當然の時に於て否の一語を言ふは、大いなる徳行なり。こ。 (中村正直「西洋節用論」)

諺

- 苦しい時の神だのみ。
- 正直の頭に神宿る。
- 藝が身を助く。
- 取らぬ狸の皮算用。
- 藁苞に黄金。
- 杓子は耳搔にならず。
- 知らぬが佛。
- 泣き面に蜂。
- 犬も歩けば棒にあたる。
- 轉ばぬ先の杖。

中村正直 文學博士。江戸の人。東京大學教授・女子高等師範學校長等に歴任す。明治二十四年歿す。年六十。

三五 イソップより

蟹の親子

蟹の婆さんが息子に向かつて、何だつてお前は、そんな風に横這ひに這つて歩くのだね。眞直ぐに歩くものですよ。」こいふと、若い蟹は答へて、「かあさん、ぢやあ眞直ぐに歩いて見せておくれ。わたしもそのまほりにやつて見るから。」そこで蟹の婆さんは、一所懸命眞直ぐに歩いて見せようとしたが、だめだつた。そして息子ばかり間違つてゐるといつて責めるのは悪かつたと悟つた。

蟻と蟋蟀

冬の天氣のよい日に、蟻達がせつせと、長雨にしめつた貯

訓言 「口で教へるよりまづ身に行へ。」

への穀物を乾かしてゐるを、そこへ瘦せ衰へた蟋蟀が來て、食物を何でも恵んで下さいと頼んだ。ほんとうにわたしはかつゑて死にさうなんですよ。」蟋蟀はいつた。蟻達は自分達の主義には反くけれど、仕方なしに暫く仕事の手を休めて、蟋蟀の相手をした。ぢやあ聞くが、お前さん此の夏は一體何をしてゐなすつたね。此の冬の用意に食物を集めては置かなかつたのですかい。」實は、蟋蟀は答へた。わたしはあんまり歌ばかり歌つてゐたものですから、外の事をする暇がなかつたのです。」お前さん、夏の間歌をうたつて暮したこいふのなら、此の冬はまあ踊ををどつて暮すより外に仕方はあるまいね。」かう蟻は答へて、あは、笑ひながら相變らず仕事にかゝつた。

訓言 「將來のために計れ。」

樵夫と水の神

樵夫が河の畔で樹を伐つてゐたが、斧を振上げる手先が狂つて、思はず手を放すと、斧は河の中へ飛込んでしまつた。樵夫は河縁に立つて、斧のなくなつた事を嘆いてゐると、水の神様が現れて、何を悲しんでゐると言つて尋ねた。そして譯を聽くと、大層氣の毒がつて、早速水の中へ斧を取りに行つてくれたが、やがて黄金の斧を持つて來て、これではないかと思ひ、樵夫がそれではないといふと、又水の中に潜つて、今度は銀の斧を持つて來て、これでもないかと思ひ、いゝえ、それでもございませぬ。樵夫は答へたので、もう一度神様は水の中に潜つた。そしてなくなつた斧を持つて出て來た。樵夫は品物が戻つたので大喜び、夢中になつて御禮を言

つた。神様は樵夫の正直なのを大層感心されて、外の金と銀の二本の斧も褒美にくれた。樵夫が歸つて、此の話を仲間の者にすると、其の中でも友達の仕合せを羨ましく思つた男が、自分も一番運だめしをやつて見ようと思ひつゝ、ここでわざ／＼河の畔へ出かけて行つて、わざ／＼斧を水の中へ落した。神様は前のやうに現れて、斧を落した話を聽くと、すぐ中に潜つて、やはり黄金の斧を持つて上がつて來た。そして、これはお前のか。とも何ともいはないうちに、慾ばりの樵夫は、それです、それです。と叫びながら、手を伸ばしてそれを取らうとした。けれども、ごつこい、神様は此奴の不正直を憎んで、決して黄金の斧をやらないばかりか、水の中へ落した斧までも取上げてしまつた。(楠山正雄譯「イソップ物語」)

訓言「正直は最上の政略。」
楠山正雄 文學者。東京に
生まる。早稲田大學の出身。

三六 蜘蛛の絲

或日のことにございます。お釋迦様は極樂の蓮池の縁を獨りでぶら／＼お歩きになつていらつしやいました。

池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞つ白で、その眞中にある金色の蓋からは、何ともいへない好い匂が絶間なくあたりへ溢れて居ました。

極樂は丁度朝でございました。

やがてお釋迦様はその池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になりました。

この極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つて居ります

極樂 娑婆世界より西方十萬億佛土を過ぎたるところにある阿彌陀如來の淨土。

から、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や、針の山の景色が、まるで視眼鏡を見るやうにはつきり見えるのでございます。

するど、その地獄の底に犍陀多といふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿がお眼に止りました。

この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろ／＼悪事を働いた大泥坊でございます。が、それでも、たつた一つ善いことをした覚えがございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は、早速足を舉げて踏殺さうといたしました。が、いや／＼、これも小さいながら命のあるものに違ない。その命を無暗にこる

蠢く 蟲などの少しづつ動くこと。

さいふことは、いくらなんでも可哀さうだ。」と、かう急に思ひ返して、さう／＼その蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けたことがあるのをお思ひ出しになりました。さうして、それだけの善いことをした報には、出来るならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲を懸けてをりました。お釋迦様はその蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうしてそれを玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ眞直ぐにおおろしなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に、浮いた

血の池 紅蓮地獄のこと。
八寒地獄の一にして、こ

り、沈んだりしてゐた犍陀多でございます。
なにしろ、こちらを見ても眞つ暗で、たまにその暗闇から

ここに落ちたるものは、酷寒のために身體支裂して紅蓮の花弁の如くなるさ

ぼんやり浮上がつてゐるものがあると思ひますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細ささいつたらございませぬ。その上、あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つてゐて、たまに聞えるものさいつては、たゞ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。これは、ここへ落ちて来るほどの人間は、もう様々な地獄の責苦に疲れはてて、泣聲を出す力さへもなくなつてゐるのでございしました。ですから、さすがの大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、唯もがいてばかりをりました。

「ところが、或時のここでございます。何氣なく韃陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めます。其のひっそりとした闇の中を、遠い／＼天の上から、銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、ずる／＼と自分の上へ垂れて参るではございませんか。」

「韃陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。この絲に縋りついて、ごこまでも登つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行く／＼、極樂へはひる／＼も出来ませう。さうすれば、針の山へ追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。かう思ひましたから、韃陀多は早速その蜘蛛の絲を兩手でしつかりと掴みながら、一所懸命に

上へ上へと手繰り登り始めました。もこより大泥坊のここでございますから、かういふここには昔から慣れきつてゐるのでございます。

併し、地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくら焦つて見たところで、容易に上へは出られません。やゝ暫く登る中に、さう／＼韃陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へは登れなくなつてしまひました。

そこで、仕方がございませんから、まづ一休み休むつもりで、絲の中途にぶら下がりながら、遙かに目の下を見おろしました。すると、一所懸命に登つたかひがあつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもういつの間にか闇の底に隠れてをりました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐ろし

い針の山も、足の下になつてしまひました。この分で登つてゆけば、地獄からぬけ出すのも存外わけがないかも知れません。犍陀多は両手を蜘蛛の絲に絡みながら、こゝへ來てから、何年にも出したところのない聲で、「しめたく。」と笑ひました。

ところが、ふと氣がつかますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが、自分の登つた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へ一心に攀登つて來るでございませんか。犍陀多はこれを見るに、驚いたのと恐ろしいのとで、暫くはたゞ馬鹿のやうに大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしてをりました。自分一人でさへ切れさうな此の細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに

堪へるここが出来ませう。若し萬一途中で切れたといたしましたら、折角こゝまで登つて來たこの肝腎な自分までも、もこの地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんなここがあつたら大變でございます。

が、さういふ中にも罪人たちは、何百となく、何千となく、眞つ暗な血の池の底からうよ／＼と這上がつて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながら、せつせと登つて参ります。今の中にどうかしなければ、絲は眞中から二つに切れて、落ちてしまふのに違ありません。

そこで犍陀多は大きな聲を出して、「こら、罪人ども、この蜘蛛の絲は己のものだぞ。お前たちは一體誰の許を受けて登つて來た。おりろく。」と喚きました。

その途端でございませぬ。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が急に犍陀多のぶら下がつてゐるところから、ぶつりと音を立てて切れました。……
ですから、犍陀多もたまりませぬ。あつこいふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるくまはりながら、見るく中に闇の底へ眞つ逆様に落ちてしまひました。
後にはたゞ極樂の蜘蛛の絲がきらくま細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございませぬ。

お釋迦様は極樂の蓮池の縁に立つて、この一部始終をぢつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をな

さりながら、またぶらくお歩きになりました。

自分ばかり地獄からぬけ出さうとする犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰を受けて、もこの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦様のお目から見ると、あさましく思召されたのでございませぬ。

併し、極樂の蓮池の蓮は、少しもそんなことには頓著いたしません。その玉のやうな白い花は、お釋迦様のお足のまはりにゆらく、こ萼を動かしてをります。そのたんびに、眞中にある金色の蓋からは、何ともいへない好い匂が、絶間なくあたりに溢れて出ます。

極樂も、もうお午近くになりました。(芥川龍之介「傀儡師」)

芥川龍之介 文學者。東京の人。東京帝國大學の出身。昭和二年歿す。年三十六。

三七 曾我兄弟

第三幕

幕の外。十郎・五郎登場。續松を把る。
十郎見て置いた。これが假屋ぢや。油斷いたすな。



五郎心得てござる。
十郎「こりや、五郎。父上がお討たれ
なされてから、十七年の久しい間
外 我々二人が念頭を離れぬ遺恨を
霽すは今ぢや。

西王國が園の桃は、
三千年にたゞ一度、

□尋常小學國語讀本四 曾我兄弟參照

第一幕 工藤の假屋にて酒宴の場。工藤祐經は、十郎・五郎に對し警戒して寢處を換ふ。

第二幕 伊豆の農家。曾我の宿。十郎・五郎、從者鬼王・丹三郎に暇をつかはし、故郷の母に遺書と記念の品をおくる。

時 建久四(一八五三)年五月二十八、九日。
處 富士山の西麓伊出の狩場。

人 源賴朝。
大房丸。
曾我祐成。
曾我時致。
工藤祐經。
その他。

十郎 曾我祐成。河津祐泰の子。小字一萬。その父は工藤祐經に殺され、母は曾我祐信に再嫁す。よつて曾我氏を稱す。建久四年弟時致と共に富士の

花を開くこ傳へ聞く。

五郎 「又金輪王の出づる時、

現るこいふ優曇華も、

稀に逢ふ日の譬なり。

十郎待ちに待つた當の敵、左衛門尉は言ふに及ばず、出で逢ふものに容赦はいらぬ。ぢやが、女ばらも許多ある。逸つて無益の殺生すな。

五郎 仰しやるまでもござらぬ。

十郎 いざ。

五郎 いざ。二人幕をかゝけて入る。

板戸をさしたる假屋の縁の前。

裾野の狩場に於て父の仇を報じ、身は仁田忠常に殺さる。年二十二。
五郎 曾我時致。兄と共に父の仇を報じ、捕へられて斬らる。年二十。
西王母 支那の傳説に見えたる天女。その園にある桃は三千年に一度實るこ傳へらる。
金輪王 佛説に、須彌山の四洲を統治する王。
優曇華 ウドンゲ。印度に於ける想像の植物。三千年に一度咲くこいふ。
左衛門尉 工藤祐經。伊東祐次の子。叔父祐親を傷つけ、又その子祐泰を殺す。曾我兄弟のために復仇せらる。

十郎五郎登場。

五郎兄上、敵はごこへ参つたでござらう。

十郎左手を顧みる。「晝酒飲うでをつたのは、今の假屋ぢや。それにあの通り人影もない。彼奴我等が寄せるご悟つて、急に臥戸を換へたご見える。はてごこを尋ねたものであらう。

五郎此の上は是非がない。假屋々々を片端より捜すまでぢや。

十郎待て。大切の場ぢや。

(假屋の板戸を開き龜鶴燭を乗りて登場。)

龜鶴 「波に漂ふ沖津舟、

しるべの山はこなたぞや。

十郎さては龜鶴がしるべいたすか。五郎續けいざ。

五郎いざ。

(龜鶴入る。十郎五郎續き入る。夜廻の卒二人、一人は右手より、一人は左手より登場。)

第一の卒「や、これはお役目御苦勞ぢやの。

第二の卒「お互ぢや。(板戸の方を見る。)こゝはごなたやらの假屋ぢやつたの。

第一の卒「こゝか。不斷はお屋形の宿直の人達が、代り合うて下がつて息ましやる處ぢやが、今夜は工藤殿が客人と一緒にはひられた。

第二の卒「客人といふのは、あの象のやうに太つた宮司殿か。

第一の卒「さうぢや。(空を仰ぐ。)や、又降つて來た。ごりや、一廻してしまはうか。

宮司 吉備津宮の宮司、大藤内成景。

第二の卒「そんなら又後に逢ふぞよ。(卒二人入れ違ひて退場。)

(大藤内板戸を蹴放ちて登場。十郎五郎續きて登場。)

大藤内「お主達は曾我の同胞ぢやな。工藤殿を殺した下手人はわしが見極めた。後日に異論を言ふまいぞ。」

十郎「何を。(十郎大藤内を一刀斬る。大藤内俯臥になる。五郎腰を斬放す。)

五郎「馬は吼え、

牛は嘶く、

世なればや、

足二つもて、

四つに這ふらん。」

十郎「笑ふ。」こやつ平家の世盛りには、妹尾もぎに附いて榮もぎを干もぎめ、

妹尾 平氏の臣妹尾太郎兼保。

その罰に召放された領地を、又工藤の手で取返し居つた。世渡り上手奴。四這に這うて世を渡れ。(十郎五郎共に笑ふ。)もうこれまでぢや。潔く名告つて討死せう。
五郎「さうぢや、兄上、いしくも言はれた。」
十郎「やあ、假屋の人々。」

かねて音にも聞きつらん、
目のあたりには今し見よ。

伊豆の國人河津の次郎祐親には孫、三郎祐泰が忘れ形見、養家の氏を冒して曾我の十郎祐成。

五郎「同じく五郎時致、只今假屋の内に於て、父の敵工藤左衛門尉祐經を討取つたり。」

十郎「我ご思はん人々は、」

疾うくこゝに出で逢ひて、

二人御討留め候へ。

(二人暫く屏息して物音を聞く)

五郎誰も出ぬではござらぬか。

十郎無下のものぢや。さらば馳廻つて名告らう。五郎まゐれ。

(右手へ往かんとす。假屋の内に烟起る。少將、龜鶴登場。衣を覆ひて

火を消さんとす)

五郎兄上、あれは。

少將續松の火でござんす。

龜鶴板敷にほんの少し燃えついたばかりゆる。

二人わたし達がつい消します。こゝは大事ござんせぬ。

十郎そんならお身達に頼んだぞ。

(十郎五郎右手へ往く。女二人火を揉消す)

將軍家の屋形、葎の外、板縁、雨。

五郎登場。

五郎兄上、兄上。

仁田の聲(舞臺の背後にて)やあ假屋の人々承れ。狼藉者の一人、曾
我の十郎祐成は、伊豆の國人仁田の四郎忠常が討取つたり。
関の聲(同上)「えい、おう。

五郎はつ、兄上はお討たれなされたか。此の上は祖父様を自
滅させ、敵工藤を最辰せられた將軍家を一太刀恨まう。さう
ぢや。

(五郎縁に登る。五郎丸帽衣を被り摩れ違ひ、帽衣を脱ぎ、背後より
五郎を抱く。五郎縁を踏抜く。二人無言にて揉合ふ)

幕

仁田の四郎 伊豆の人。頼朝の臣。

五郎丸 御所五郎丸。頼朝に仕へて小舎人童たり。

第四幕

將軍家の屋形垂簾。簾の下には諸大名左右に二列に坐す。中央前
景に狩野介宗茂新開荒二郎忠氏居る。

第一の大名最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小
平太はごういたいたやら。第二の大名に固より曾我の殿原
は奸盗山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩付になり申し
た。

第二の大名情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つ
た工藤は父の仇ゆるゑ、申し宥める道もござらう。御屋形の御
座所近く推参いたいたと申すからは、罪科は所詮逃れます
まい。

(雑色登場)

辰の刻 今の午前八時頃。
大見の小平太 名は實政。

雑色 仲間・足輕なご身分
卑しき侍。

雑色 只今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

(雑色退場)

(五郎登場。大見小平太實政繩を取る。狩野座を進む。)

狩野曾我の五郎承れ。只今これへ召されたは、某ご新開ごが
承つて、夜討の宿意を尋ねるためぢや。さあ逐一に申し立て
い。

五郎(怒る) 黙れ、狩野の介。祖父伊東の次郎祐親が、將軍家ご不
和のため自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをる
が、某ごても遠祖左大臣藤原の武智鷹が流を汲む、由緒ある
身分ぢや。申すほどの事はぢきに申さう。若しそれが、慥はぬ
なら、何事も申すまい。

武智鷹 不比等の子。南家
さいはる。曾我兄弟の生
家伊藤氏は武智鷹の子乙
鷹の遠孫なり。

狩野怪しかる事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開、それを彼此申すのは、犯人の身となつても、まだ君に楯衝く所存か。

頼朝の聲(簾の内より)「いや、待て、狩野、新開、曾我の五郎が申す條尤もなれば、頼朝みづから聽いて遣はす。

(簾を半ば捲く、頼朝登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開中央に残る。)

五郎(新開に)「そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそれにあては、和殿に物言ふに似て快うない。

(新開退く。)

將軍見れば、昨夜の雨に、その土は濕つてをる。誰かある。曾我の五郎に敷革を取らせい。

卒「はあ。」

(卒右手より敷革を持出でて敷く。)

五郎(感激す。)

「此の敷革を見るにつけ、

十年の昔ぞしのぼる。」

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覚えめでたく、名利のために訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行つた小賢しき敵工藤が、時勢の移り變るに乗じて、宇佐美殿によつて御目見えを賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽足らないで、我我兄弟を殺さうと、讒舌を揮うたため、

兄一萬は十二歳、

此の箱王は十の時、

由比が濱邊に伴なはれ、

宇佐美殿 伊豆の豪族。

引据ゑられし敷革は、
夢見ごこちに春を待つ、
蒼を擢く悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨を霽し、此の世に思ひ置くことなければ、
最後に急ぐわがために、
此の一枚の敷革は、
父に見えん彼の岸に、
渡す弘誓の舟筏。
有りがたく拜領いたす。(敷く)
將軍殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此の度工藤を討取つたのは年頃の企か。但しは俄の思ひ立か。

弘誓の舟 佛の衆生を濟度するを、船に人を乗せて渡すに譬へていふ語。

五郎それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは十七年の昔、兄は五歳、某は三歳、しかご意趣をも存ぜんのだが、兄が九つ、某が七つになつて、物心を辨へてから以來は、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍然らば伊豆にある工藤が十年の久しい間、月に四五度乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。
五郎いかにも其の往返には心を附け、足柄箱根大磯小磯由比小坪のあたりに佇み、兄弟附け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少き時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。
將軍ふん、さもあらう。扱工藤は父の仇ゆゑ仔細ないが、多くの麾下の侍をば何故妄りに傷つけた。

由比 神奈川縣鎌倉郡鎌倉町の海岸。
小坪 同縣三浦郡逗子町の字。

五郎固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、及向かふ者のあらんかぎり、千萬騎をも斬りなびけうご存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立處も知らず逃行くゆゑ、後日のために一太刀づつ印を附けたまででござる。將軍して大藤内はなぜ討つた。

五郎あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切棄てはいたいたが、所領安堵を喜んで下國する途中、報謝のために引返したは、せめてもの心掛、今はなか／＼不便に存ずる。

將軍神妙な詞ぢや。ぢやが、それほど義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座處に踏込んだ。

五郎これは憚ある申條かは存ぜぬが、流人となられた將軍

家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道の主人ではござらぬか。それが成行とは申しながら、三浦殿にあづけられて自滅いたいた。又敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これらの遺恨なきにあらねば、一太刀お恨み申した上で自害いたす覺悟でござつた。

將軍おう、よう隠さずに申したぞ。此の度の企を前以て存じて居つた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序にそれも申せ。

五郎さやうなものは一人もござらぬ。

將軍さはいへ、母には打明けたであらうな。

五郎こは仰ごも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死にに往けし申す親のござらうや。

伊東の次郎 祐親。伊豆の豪族。河津次郎と稱す。治承中、天野遠景に捕へられ、後自殺す。
三浦 名は義澄。

將軍おう、一族否運に陥つたそちが申條として、一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎は居らぬか。
仁田の聲(上手背後にて)「はあ。四郎忠常只今それへ。」

(仁田首桶を持ち登場。)

仁田仰によつて曾我の十郎が首級、これに持参いたいてござる。

將軍五郎、兄に逢はせて遣すぞ。それ縛繩解け。

(天見五郎の繩を解く。)

仁田實檢の上、申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ、對面いたされい。

(首桶を開く。)

五郎懐かしや、兄上。

點し列ねし松の火の、
消えなば共にご思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても兄上、ごうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くごも、時致だに居合はせたら。

仁田いや、和殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘ご小鬢ごに薄手をさへ負うたれご、十郎が運拙く、我が薙刀に拂はれて、及はほつきご鏢元から。五郎なに、兄上の太刀が折れたごか。なぜ我が太刀を兄上に佩かせなんだか。

仁田おう、その悔み道理至極ぢや。某ごても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうごいつた某を、十郎自ら呼

止めて、首を我が手に授けたのぢや。
五郎さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛られたか。

(五郎歎く。犬房丸鞭を持ち、走り出づ。)

犬房、父上の敵、思ひ知れ。

(五郎を鞭うつ。)

五郎、や、この小童は何者ぢや。

(五郎睨む。犬房たじろく。)

仁田、犬房丸、御前ぢやぞ。

五郎、なに、犬房丸が御身か。

彼も人の子、釋くて

親を討たれし悲しみは、

いかでか我に異ならん。

犬房丸 工藤祐經の子。

果報の繩に引かれずば、

刃を取りて立向かひ、

御身に討たれん我が身なり。

刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣りに、さあ、其の答

で打つてくれい。

犬房、父上を討つたお前は強い人ぢやと思つたに、優しい事

を言うて下さる。それではごうも打たれませぬ。

五郎、おう、さうか。さあ、につくい小童、打たれるなら打つて見

い。

犬房、なんの打たいで、おのれが、おのれが。

(連打す。)

將軍、もう、よい／＼。犬房、それで勘忍いたせ。

果報 因果應報。

犬房はつ。
鞭を棄てて平伏す。

將軍五郎、此の上問ふべき事もないが、賴朝關外の職を辱うして、勇士猛卒を惜しむこそ何物にも譬へられぬ。ごうぢや、志を翻して奉公いたいてくれまいか。
五郎それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房に此の素つ首を取らせ申さう。犬房が討たいでも、

關外の職 將軍の職。

近き恵に代へられぬ、
遠き恨のまつはれば、

いつ謀叛人にならうも知れぬ。一緒に死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。刎ねられるを待つ外ござらぬ。

(天見に) さあ繩を打たれい。

大見いや、某は五郎丸が掛けたまゝの御身の繩を、君命によつて預り、又君命によつてほごいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

將軍待て。勇士を失ふは遺恨ながら、其の志を奪ふべからず。五郎が繩は賴朝が手づから打つて遣さう。

五郎(居直る)こは思ひも掛けぬ仰ぢや。今生の思ひ出に、さあ御繩を拜領いたさう。

將軍(起つ)わが打つ繩は不動の羅索、難伏のそちには相應はしからう。いでく。(階を降らんとす)

幕

(森鷗外「鷗外全集」)

不動の羅索 不動明王の左手に持ちたる縛の繩。

森鷗外 名は林太郎。醫學博士。陸軍々醫總監。文學博士。島根縣津和野の人。大正十一年歿す。年六十一。

音子聲有

鼻音	顫動音	摩擦音	破裂音	
				喉頭音
				喉音
ng (ンガ)			g (グ)	顎音
				顎音
		j (ヂ)		齒音
n (ナ)	r (ラ)	z (ザ)	d (ダ)	唇音
m (マ)			b (バ)	

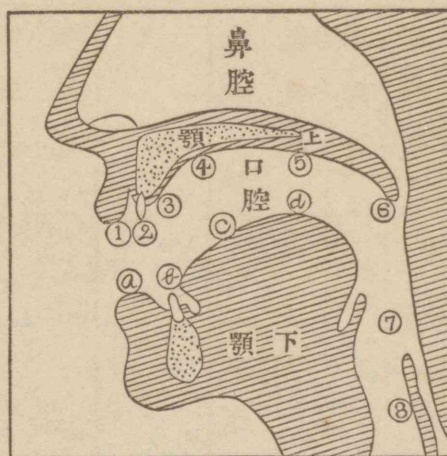
音子聲無

摩擦音	破裂音	
		喉頭音
h (ハ)		喉音
	k (カ)	顎音
ch (チ)		齒音
s (サ)	t (タ)	唇音
f (フ)	p (パ)	

音母

長音	主聲	有聲
aa	a o	a
ii	i o	i
uu	u o	u
ee	e o	e
o	o o	o

關機音聲



(口) 聲音分類

(イ) 聲音機關

- 1 上唇 2 門齒
 - 3 齒槽 4 硬口蓋
 - 5 軟口蓋 6 懸壅垂
 - 7 喉頭 8 喉
- ~~~~~
- a 下唇 b 舌尖
 - o 中舌 d 後舌

え

ゑん(穢) ゑん(穢土)

ゑんぼし(烏帽子)

ゑんじゆ(槐)

ゑむ(笑)

ゑがほ(笑顔)

ゑくほ(靨)

ゑつほ(笑壺)

ゑじ(衛士)

ゑふ(酔ふ)

こゑ(聲)

つゑ(杖)

つゑ(机)

ゆゑ(故)

ゆゑん(所以)

すゑ(据)

すゑぶろ(据風呂)

(ふ 附)

あま(甘)

をさ(箴)

をだま(芋環)

をがら(麻幹)

をか(岡・丘陵)

をかほ(陸稻)

をがむ(拜)

をかす(犯)

をぎ(荻)

をきむし(尺蠖)

をけら(朮)

をこ(痴(愚))

をこがまし(痴)

をかし(可笑)

をこせ(臆)

をさ(長)

をさな(幼)

は

しをん(紫苑)

しをろ(河津)

うわる(植)

かわく(乾渴)

くつわ(轡)

くるわ(廓)

はにわ(填輪)

くわる(慈姑)

ことわざ(諺)

しわざ(爲業)

ことわる(斷理)

こわいろ(聲色)

こわだか(聲高)

こわね(聲音)

さわぐ(騒)

さわやか(爽)

しわ(皺)

しわむ(皺)

わらぢ(草鞋)

ひずむ(歪)

ます(雑交混)

みみず(蚯蚓)

もず(百舌鳥)

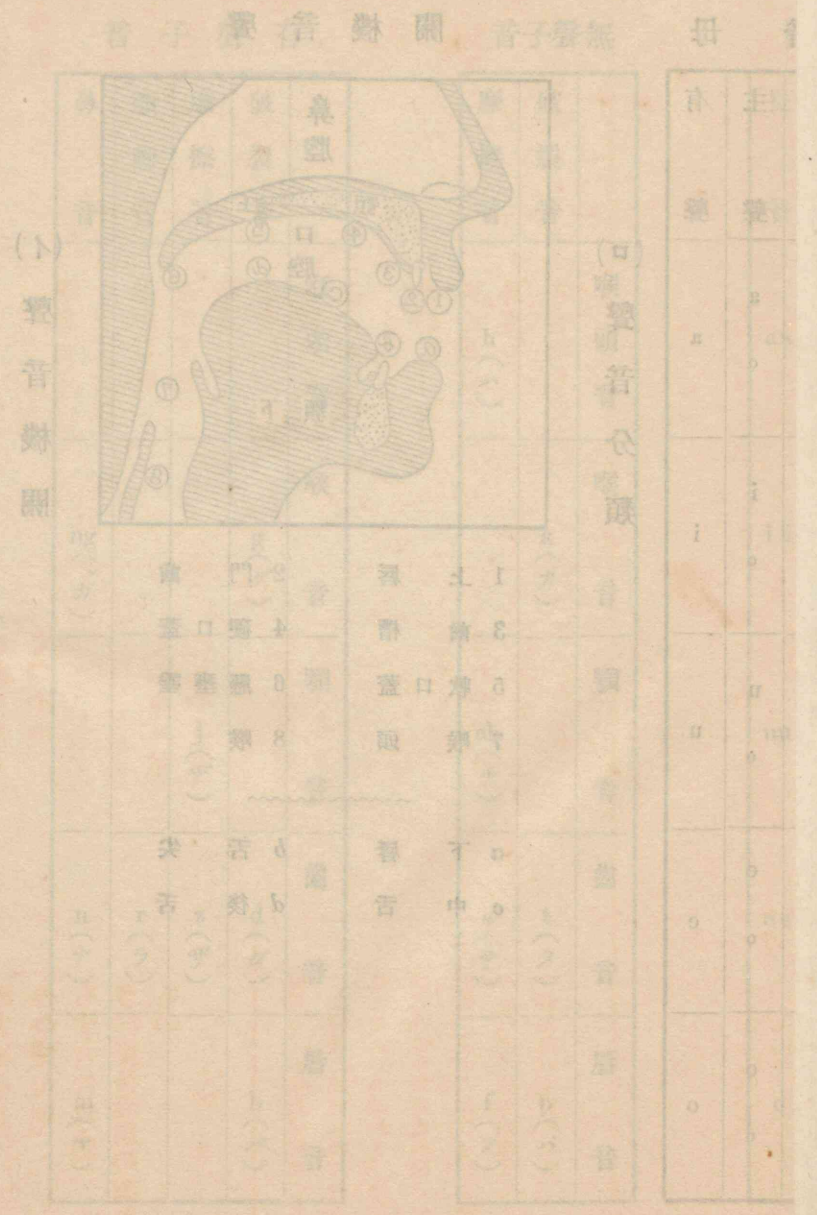
さ行變格活用の濁れるもの

禁す・信す

○時代とともに發達變遷した國語には發音が相似てゐて假名の同じでないものがある、之を書き別けるのを國語假名遣といふ。

○記憶に便せんがために少數のものゝあけて他を類推せんとするものが本表の主旨である。

發音の公眼



最モ少イヲ語記スル。其ノ他ハイカヒデアアル。

る(井堰)

るけた井桁
るづつ(井筒)
るぜき(井堰)
るぐひ(井杭)
るで(井手)
るなか(田舎)
るもり(蝶蠟)

る(居)

るざり(膝行)
るしき(臂)
かもる(鴨居)
しきる(闕)
くもる(雲居)
くらむ(位)
しばる(芝居)
とのる(宿直)
とりる(鳥居)
まとの(團欒)
もとの(基)

る(猪)(亥)

るくび(猪頸)
いぬる(乾)
るのこ(家)
るのしし(猪)

る(蘭)

おほる(大蘭)
ふとる(莞)

る(率)

ひきめる(率める)
もちめる(用るる)

ある(藍)

くれなる(紅)

なる(地震)

うなる(髻髪)

かたる(乞食)

くわる(慈姑)

あぢさゐ(紫陽花)

まゐる(參る)

はらみせ(腹居せ)

せる(所居)

語頭デハヒチイト發音スル
コトハナイ。紛レ易イノハ
イトルデアアル。前ニ掲ゲタ
ルノ外ハ皆イデアアル。

語中語尾デハあトイト

ヒガ紛レ易イ。るヲ用キル

場合ハ前ニ掲ゲタ。次ノイ

用キル場合ノ外ハヒデアアル。

おい(老)

く(悔)

む(報)

音便(き・し)ガ(い)トナ

ルモノ。

しいじ(四時)

しいか(詩歌)

するもの(陶器)
いし(礎)

す(末)

すゑひろ(末廣)
こすゑ(梢)(末末)
うゑ(飢饉)
うゑ(植)

ち(智慧)

うゑ(木)
うゑ(前栽)

語頭デハヘチイト發音スル
コトハナイ。紛レ易イノハ
トエデアアル。前ニ掲ゲタ
ノ外ハ皆エデアアル。

語中語尾デハ系ト系ト

ヘトガ紛レ易イ。系ヲ用キ

ル場合ハ前ニ掲ゲタ。次ノ系

ヲ用キル場合ノ外ハヘデア

え(兄)

きのえ(甲)
ひのえ(丙)
つちのえ(戊)
かのえ(庚)
みづのえ(壬)

え(枝)

しすえ(下枝)
すはえ(條)
え(江)
いりえ(入江)

ふ(笛)

のどぶえ(吭)
ぬえ(鶴)
ひえ(種)
ひえど(鴨)

さ(蝶螺)

な(轆)

は(映)

ゆ(夕映)

も(萌)

も(萌黃)

み(外見)

は(生)

ひ(髪)

あ(肖)

い(瘡)

あ(甘)

い(嘶)

お(脊)

お(覺)

こ(越)

こ(肥)

き(消)

す(體)

ふ(殖)

こ(凍)

ま(聞)

ほ(吠)(吼)

を(治修)
を(納)

を(大抵)

をし(鴛鴦)
をし(韋)
をし(晚稻)
をし(教)

を(惜)

を(食治)

を(獵)

を(遠)

を(遠近)

を(昨年)

を(昨日)

を(越度)

を(四媒鳥)

を(踊跳躍)

を(斧)

を(慄)

を(終卒了)

を(叫)

を(檻)

を(洋)

を(節)

を(居)

を(折)

を(折敷)

を(萎)

を(乘)

を(九十九折)

を(大蛇)

語中語尾デハおハ用キナ
イ。紛レ易イノハをトほ
アル。次ノ外ハ皆ほデア
アル。

あ(襖)

あ(靑)

あ(靑貝)

あ(靑)

い(功績)

う(魚)

か(鯉)

し(白魚)

ひ(氷魚)

か(香薰)

さ(竿棹)

し(紫苑)

し(可憐)

し(萎)

た(嬋妍)

た(手弱女)

と(十)

ば(芭蕉)

ま(申)

み(操)

み(水脈)

や(徐)

わ(俳優)

し(吝)
ず(條)

ず(坐)

た(痴鈍)
た(束藁子)
た(撓)

た(撓)

た(嬋妍)

た(手弱女)

た(俵)

の(野分)

は(腸)

この(海鼠腹)

ひ(鶉)

ゆ(硫黃)

よ(弱)

か(弱)

い(鱗)

じ(書ク語ヨリ) ち(書ク語
ノ方ガ少イ。次ニアゲル他ハ
ジヲ用キル。

ち(父)

お(伯父叔父小父)

ち(爺祖父)

ち(路)

こ(小路)

す(筋)

う(氏)

ひ(臂)

あ(味)

あ(味)

あ(鱈)

か(梶)

か(鍛冶)

ひ(泥)

ふ(藤)

ふ(藤)

こ(麴)

く(鯨)

こ(琴柱)

ね(螺旋)

ね(拗)

あ(紫陽花)

ち(縮)

な(汝)

も(紅葉)

わ(草鞋)

な(蛞蝓)

み(三十)

よ(四十)

い(五十)

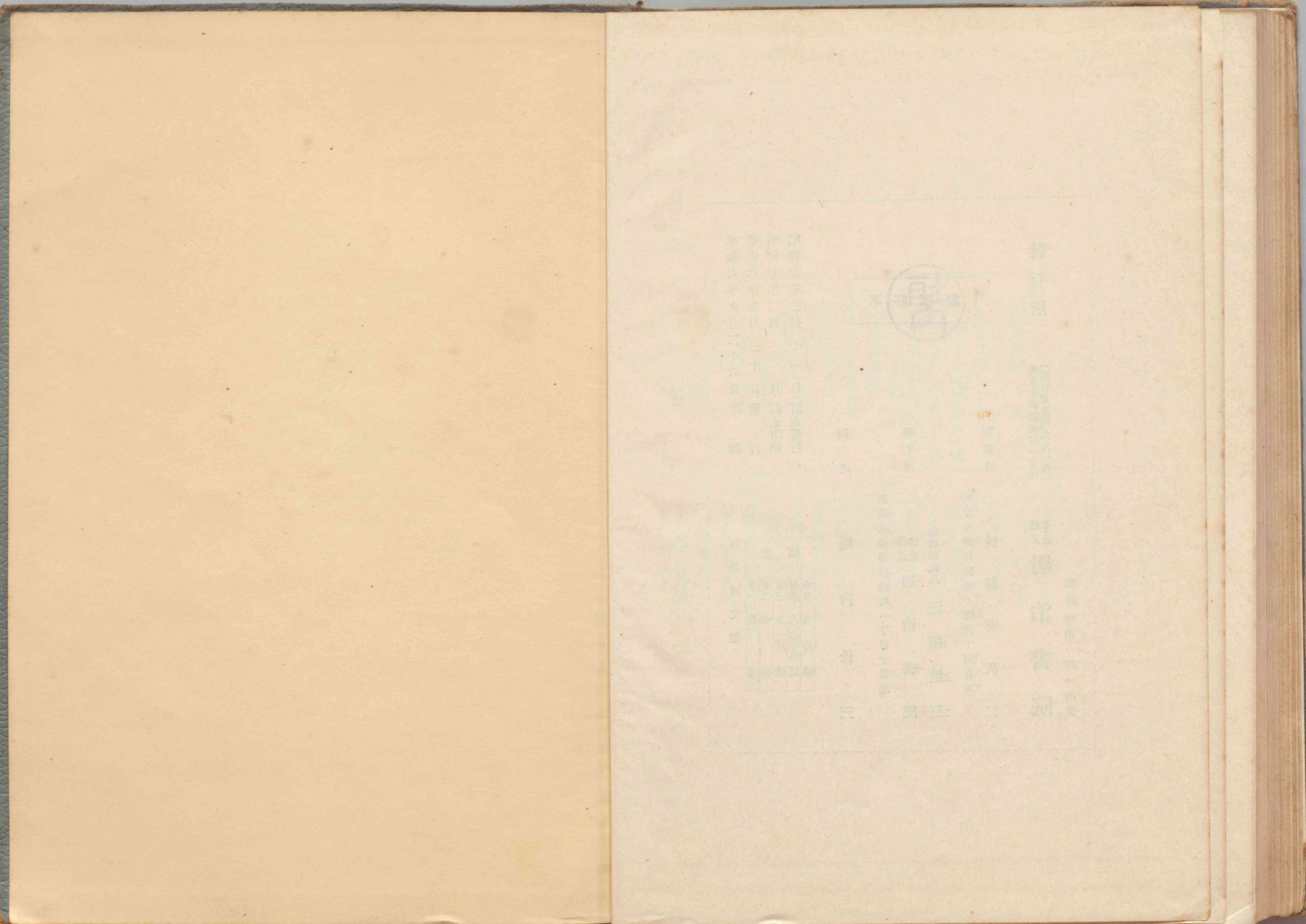
む(六十)

づ(書ク語ヨリ) ず(書ク語
ノ方ガ少イ。次ニアゲル他ハ
づヲ用キル。

ず(從者・儒者)

ず(誦)

ず(數珠)



民國二十一年一月一日
中華民國二十一年一月一日
中華民國二十一年一月一日
中華民國二十一年一月一日
中華民國二十一年一月一日



四川

第五六號

四川省政府
四川省政府
四川省政府
四川省政府
四川省政府

一部
一年
木戸豊一





第一學年
未
戸

広島大学図書
2000301915



32
915